伊　良　原　Ⅶ

下伊良原竹の内遺跡
下伊良原宮久保遺跡

福岡県文化財調査報告書　第261集

２０１８

九州歴史資料館

序

福岡県教育委員会では、伊良原ダムの建設事業に伴って、平成18年度から28年度までの期間、京都郡みやこ町犀川上伊良原および下伊良原所在の諸遺跡の発掘調査を実施してまいりました。今年度は、その報告の最終年度にあたります。

この間に多くの遺跡が発見され、縄文時代には豊かな自然の恵みを享受し、また古くから彦山神領として発展してきた様子が、徐々に明らかになって参りました。

本書は平成24年度から28年度に発掘調査を行った、下伊良原竹の内遺跡と下伊良原宮久保遺跡の記録です。両遺跡でも、縄文時代早期以来近現代までの、この地の人々の多様な生活の一端を知ることができました。

本書が教育、研究とともに、文化財に対する認識と理解、地域文化の普及啓発の一助となれば幸いです。

発掘調査および報告書作成にあたり、ご協力いただいた方々に厚く感謝いたします。

平成30年３月31日

九州歴史資料館
館長　杉光　誠

例　言

1．本書は、県営祓川流域総合開発事業（伊良原ダム建設事業）にともなって平成24～28年度に発掘調査を実施した、京都郡みやこ町犀川下伊良原所在の下伊良原竹の内遺跡、下伊良原宮久保遺跡の調査の記録である。伊良原ダム関係埋蔵文化財調査報告の第７集にあたる。

2．発掘調査と整理報告は、福岡県県土整備部河川開発課の執行委任を受け、九州歴史資料館が実施した。

4．本書に掲載した遺構写真の撮影は各調査担当者が、また遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は東亜航空技研株式会社に委託した。

5．本書に掲載した遺構図の作成は各調査担当者が行い、発掘作業員が補助した。

6．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において実施した。

7．出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

8．本書に使用した周辺遺跡分布図は国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「田川」を加筆改変したものである。また、本書に掲載した調査区位置図は、伊良原ダム建設事務所が作成した1/2,500地形図を加筆改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。

9．本書の執筆は、Ⅲ－１－Ⅰ・Ⅱ区の遺構は新原正典の原稿を元に吉村靖徳が、同遺物とⅢ－２－３）は吉村が、Ⅲ－２－１）・２）・４）は飛野博文が、Ⅲ－１－Ⅳ区は城門義廣が、それぞれ担当し、それ以外の執筆と編集は小川泰樹が担当した。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の組織 …… 2

Ⅱ　位置と環境 …… 3
　1　地理的環境 …… 3
　2　歴史的環境 …… 3

Ⅲ　調査の内容 …… 7
　1　下伊良原竹の内遺跡 …… 7
　　Ⅰ区 …… 7
　　Ⅱ区 …… 32
　　Ⅲ区 …… 45
　　Ⅳ区 …… 65
　2　下伊良原宮久保遺跡 …… 80

Ⅳ　おわりに …… 87

図 版 目 次

図版１　１　下伊良原竹の内遺跡遠景（南西から）
　　２　Ⅰ区A地点全景（北東から）
　　３　Ⅰ区A地点全景（南西から）
図版２　１　Ⅰ区グリッド全景（東から）
　　２　１号土坑（南から）
　　３　３号土坑（北から）
図版３　１　集石遺構（北から）
　　２　集石遺構（西から）
　　３　遺物出土状況（南から）
図版４　１　１号掘立柱建物跡（南から）
　　２　１号土壙墓（北西から）
　　３　１号土壙墓副葬品出土状況（南東から）
図版５　１　２号土壙墓土層（南から）

２　２号土壙墓（南から）
３　１号溝（南から）
図版６　１　２号溝（南から）
２　Ⅰ区B地点全景（北から）
３　炭窯全景（南西から）
図版７　１　炭窯焚口（西から）
２　炭窯奥壁と左側壁（南西から）
３　炭窯の煙道断面（北から）
図版８　出土遺物１
図版９　出土遺物２
図版10　出土遺物３
図版11　１　Ⅱ区全景（東から）
２　東壁土層（西から）
３　グリッド掘り下げ状況（西から）
図版12　１　２号土坑遺物出土状況（西から）
２　土坑検出状況（右下：３号土坑、左：５号土坑　西から）
３　５号土坑（南東から）
図版13　１　Ⅱ区全景（東から）
２　１号掘立柱建物跡（西から）
３　石垣（北西から）
図版14　出土遺物４
図版15　１　Ⅲ区遠景（南上空から）
２　Ⅲ区遠景（北西上空から）
３　Ⅲ区全景（北西上空から）
図版16　１　グリッド全景（南西から）
２　グリッド全景（南から）
３　グリッド掘削作業状況（南から）
図版17　１　Ａ３－１Gr土層（南から）
２　Ａ３－１Gr土層（東から）
３　Ａ４－１Gr土層（南から）
４　Ａ４－１Gr土層（東から）
図版18　１　Ａ５－１Gr土層（南から）
２　Ａ５－１Gr土層（東から）
３　Ａ６－１Gr土層（北から）
４　Ａ６－１Gr土層（西から）
図版19　１　Ｂ２－１Gr土層（南から）
２　Ｂ２－１Gr土層（東から）
３　Ｂ３－１Gr土層（南から）
４　Ｂ３－１Gr土層（東から）
図版20　１　Ｂ４－１Gr土層（南から）
２　Ｂ４－１Gr土層（東から）
３　Ｂ６－１Gr土層（南から）
４　Ｂ６－１Gr土層（東から）
図版21　１　Ｂ７－１Gr土層（北から）
２　Ｂ７－１Gr土層（西から）
３　Ｃ１－１Gr土層（南から）
４　Ｃ１－１Gr土層（東から）
図版22　１　Ｃ２－１Gr土層（南から）
２　Ｃ２－１Gr土層（東から）
３　Ｃ３－１Gr土層（南から）
４　Ｃ３－１Gr土層（東から）
図版23　１　Ｃ５－１Gr土層（南から）
２　Ｃ５－１Gr土層（東から）
３　Ｃ６－１Gr土層（南から）
４　Ｃ６－１Gr土層（東から）
図版24　１　Ｄ１－１Gr土層（南西から）
２　Ｄ１－１Gr土層（北東から）
３　Ｄ２－１Gr土層（南から）
４　Ｄ２－１Gr土層（東から）
図版25　１　Ｄ３－１Gr土層（南から）
２　Ｄ３－１Gr土層（東から）
３　Ｅ３－１Gr土層（南から）
４　Ｅ３－１Gr土層（東から）
図版26　１　土坑群全景（上空から）
２　土坑群全景（上空から）
３　土坑検出状況（北東から）
図版27　１　１号土壙墓（南西から）
２　１号土壙墓（北西から）
３　１号土壙墓土層（北東から）
図版28　１　１・２号土坑（西から）
２　１・２号土坑土層（東から）
３　２号土坑（西から）
図版29　１　２号土坑土層（南東から）
２　３号土坑（南東から）
３　４号土坑（南東から）
図版30　１　４号土坑土層（南から）

2　５号土坑（西から）
3　５号土坑土層（南から）
図版31　1　６号土坑（西から）
2　７号土坑（東から）
3　７号土坑土層（南から）
図版32　1　８～11号土坑検出状況（南から）
2　８～11号土坑（南西から）
3　８号土坑（南西から）
図版33　1　８号土坑土層（南から）
2　９号土坑（南西から）
3　９号土坑土層（南から）
図版34　1　10号土坑（南から）
2　10号土坑土層（南から）
3　11号土坑（南西から）
図版35　1　11号土坑土層（南から）
2　12号土坑土層（南から）
3　13号土坑（南から）
図版36　1　13号土坑土層（南から）
2　14号土坑（南から）
3　14号土坑土層（南から）
図版37　1　15号土坑（東から）
2　15号土坑土層（南から）
3　16号土坑（西から）
図版38　1　16号土坑土層（南西から）
2　17号土坑（北東から）
3　17号土坑土層（南から）
図版39　1　18号土坑（北から）
2　18号土坑土層（南から）
3　19号土坑（北西から）
図版40　1　20号土坑（北から）
2　20号土坑土層（南から）
3　21・22号土坑（南西から）
図版41　1　21号土坑土層（南西から）
2　22号土坑土層（南東から）
3　23号土坑（北から）
図版42　1　23号土坑土層（南から）
2　24号土坑（南から）
3　24号土坑土層（南から）
図版43　1　25号土坑（南から）
2　25号土坑土層（南西から）
3　29号土坑（南から）
図版44　1　29号土坑土層（南西から）
2　30号土坑（西から）
3　30号土坑土層（西から）
図版45　1　31号土坑（南から）
2　31号土坑土層（南西から）
3　32号土坑（南から）
図版46　1　32号土坑土層（南西から）
2　34号土坑（南西から）
3　34号土坑土層（南西から）
図版47　1　35号土坑（南西から）
2　35号土坑土層（南西から）
3　36号土坑（南西から）
図版48　1　36号土坑土層（北東から）
2　37号土坑（南西から）
3　37号土坑土層（南西から）
図版49　1　38号土坑（南西から）
2　38号土坑土層（南西から）
3　39号土坑（南西から）
図版50　1　39号土坑土層（南西から）
2　40号土坑（南西から）
3　40号土坑土層（南西から）
図版51　1　41号土坑（南から）
2　41号土坑土層（東から）
3　遺構掘削作業状況（南から）
図版52　出土遺物５
図版53　出土遺物６
図版54　1　Ⅳ区全景（南西から）
2　Ⅳ区全景（南西から）
3　Ⅳ区グリッド土層（西から）
図版55　1　Ⅳ区縄文土器出土状況（西から）
2　Ⅳ区２号土坑（西から）
3　Ⅳ区４号土坑（南から）
図版56　出土遺物７
図版57　出土遺物８
図版58　出土遺物９

図版59　出土遺物10
図版60　1　下伊良原宮久保遺跡遠景（北西上空から）
　　2　近景（北西上空から）
図版61　1　近景（上空から）
　　2　立石周辺（上空から）
図版62　1　立石現況（東から）
　　2　立石現況（南から）
　　3　立石現況（西から）
図版63　1　立石現況（北から）
　　2　立石基壇（北東から）
　　3　立石基壇（西から）
図版64　1　立石基壇内部（東から）
　　2　立石前面土師器出土状況（南東から）
　　3　立石発掘後（東から）
図版65　1　調査後全景（東から）
　　2　調査後全景（西から）
　　3　ビール瓶出土状況（東から）
図版66　出土遺物11
図版67　1　炭窯全景（北から）
　　2　炭窯内天井崩落状況（北から）
　　3　焚口と前面の整地（南東から）
図版68　1　焚口（東から）
　　2　焚口と焼成部（北から）
　　3　焼成部と煙道（南西から）

挿図目次

第１図　みやこ町の位置…… 1
第２図　周辺遺跡分布図（1/50,000）…… 5
第３図　調査区位置図（1/5,000）…… 6
第４図　Ⅰ区遺構配置図（1/300）…… 折込
第５図　基本層序模式図（1/20）…… 8
第６図　１～４号土坑実測図（1/30）…… 9
第７図　１号土坑出土縄文土器実測図（1/3）…… 10
第８図　集石遺構実測図（1/20）…… 11
第９図　層位等出土縄文土器実測図１（1/3）…… 14
第10図　層位等出土縄文土器実測図２（1/3）…… 15
第11図　層位等出土縄文土器実測図３（1/3）…… 16
第12図　層位等出土石器実測図１（2/3）…… 17
第13図　層位等出土石器実測図２（2/3）…… 18
第14図　層位等出土石器実測図３（81・82・89は1/2、その他は1/3）…… 19
第15図　１号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 21
第16図　１・２号土壙墓実測図（1/20）…… 22
第17図　１・２号土壙墓出土土器実測図（1/3）…… 23
第18図　１号土壙墓出土紡錘車実測図（1/3）…… 23
第19図　中世以降の出土土器・陶器・染付実側図（1/3）…… 24
第20図　炭窯周辺地形図（1/150）…… 25
第21図　炭窯実測図（1/60）…… 26
第22図　炭窯出土煙突実測図（1/8）…… 27
第23図　石器の出土傾向…… 28
第24図　伊良原地区出土の縄文早期・前期土器（1/4）…… 29
第25図　Ⅱ区遺構配置図（1/300）…… 33
第26図　グリッド配置・土層実測図（1/100）…… 34
第27図　１～４号土坑実測図（1/30）…… 36
第28図　５・６号土坑実測図（1/30）…… 37
第29図　１～３・５号土坑出土縄文土器実測図（1/3）…… 38
第30図　ピット・層位等出土縄文土器実測図（1/3）…… 39
第31図　出土石器実測図（2/3）…… 40
第32図　１号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 41
第33図　２号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 42
第34図　石垣実測図（1/30）…… 43
第35図　中世以降の出土土器・染付等実測図（1/3）…… 43
第36図　出土石器・石製品実測図（1/4）…… 44
第37図　Ⅲ区遺構配置図（1/300）…… 46
第38図　グリッド土層実測図（1/150・1/600）…… 折込
第39図　出土縄文時代遺物実測図（1/3、1/2）…… 48
第40図　１号土壙墓実測図（1/20）…… 49
第41図　１号土壙墓出土遺物実測図（1/3、1/2）…… 49
第42図　１～６号土坑実測図（1/30）…… 51
第43図　７～15号土坑実測図（1/30）…… 53
第44図　16～23号土坑実測図（1/30）…… 56
第45図　24～32号土坑実測図（1/30）…… 58
第46図　33～41号土坑実測図（1/30）…… 60
第47図　土坑出土遺物実測図（1/3）…… 62

第48図　ピットその他出土中世遺物実測図（1/3）…… 63
第49図　Ⅳ区遺構配置図（1/200）…… 65
第50図　縄文グリッド配置図（1/400）…… 66
第51図　縄文Ｄグリッド北壁土層実測図（1/60）…… 67
第52図　包含層土器出土状況実測図（1/20）…… 67
第53図　縄文土器実測図１（1/3）…… 68
第54図　縄文土器実測図２（1/3）…… 70
第55図　縄文土器実測図３（1/3）…… 71
第56図　縄文土器実測図４（1/3）…… 72
第57図　石器実測図（2／3）…… 73
第58図　１～４号土坑実測図（1／30）…… 75
第59図　中世遺物実測図１（12・19は1/2、他は1/3）…… 76
第60図　中世遺物実測図２（33・34は1/2、他は1/3）…… 77
第61図　下伊良原宮久保遺跡地形測量図（1/300）…… 折込
第62図　立石およびその周辺実測図（1/60）…… 折込
第63図　出土銭貨および石製品実測図（1/1、1/3）…… 82
第64図　出土土器・ガラス瓶等実測図（1/3）…… 83
第65図　炭窯実測図（1/60）…… 85

表 目 次

第１表　伊良原ダム建設に伴う発掘調査…… 1
第２表　下伊良原竹の内遺跡Ⅰ区石器計測表…… 20
第３表　下伊良原竹の内遺跡Ⅱ区石器計測表…… 40

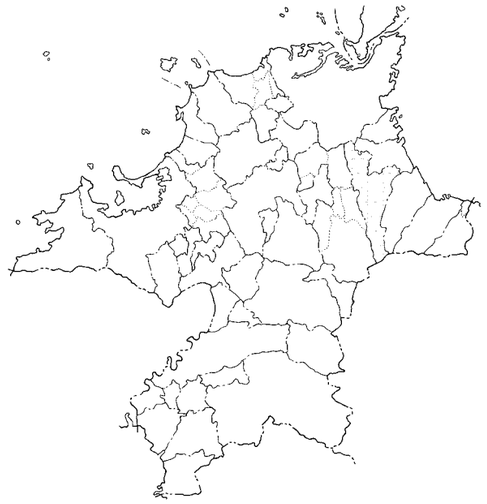
Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

伊良原ダムは、洪水の調節、京築地区各市町と田川地区（田川市、福智町、川崎町、糸田町）への水道用水の供給、農業用水の確保等を目的として計画され、祓川上流部のみやこ町犀川下伊良原および上伊良原に建設されてきた。集水面積36.8㎢、湛水面積1.22㎢、総貯水量2,870万㎥で、堤高81.3m、堤頂長295.0mの重力式コンクリートダムであり、今年度（平成29年度）完成し、30年３月31日でダム事業は完了した。昭和49（1974）年に実施計画調査が採択されて以来、45年の歳月が経過している。

開発にあたっての文化財の取り扱いに関する協議は、平成６（1994）年度以来、福岡県伊良原ダム建設事務所（元 福岡県行橋土木事務所伊良原ダム建設出張所）を中心とした開発部局と、福岡県教育庁総務部文化財保護課（元 指導第二部文化課）および九州歴史資料館の文化財保護部局との間で継続して行ってきた。その結果、平成７～10年度に民俗文化財調査、平成18～28年度には埋蔵文化財発掘調査を実施しており、既に合計７冊の調査報告書を福岡県教育委員会と九州歴史資料館によって刊行してきている。今年度は、その整理・報告の最終年度にあたり、『伊良原Ⅶ』、『伊良原Ⅷ』の２冊の報告書を作成した。

本書では、平成24年９月から29年３月までの期間に、ダム建設工事の優先順位と、伊良原小学校の移転に合わせて、断続的に調査を実施した下伊良原竹の内遺跡Ⅰ～Ⅳ地点と、平成28年１月から６月調査の下伊良原宮久保遺跡の、２遺跡の報告である。



第１図　みやこ町の位置

遺跡名	調査次数	調査年度	調査主体	報告
下伊良原中ノ坪遺跡	1次（Ⅰ区）	H18（2006）	福岡県教育委員会	県報222集
下伊良原原田ノ谷遺跡	1次	H18（2006）	福岡県教育委員会	県報222集
下伊良原寺ノ谷遺跡	1次	H18（2006）	福岡県教育委員会	県報222集
上伊良原川上遺跡	1次	H18（2006）	福岡県教育委員会	県報222集
上伊良原下ノ段遺跡	1次	H18（2006）	福岡県教育委員会	県報222集
上伊良原榎遺跡	1次	H19（2007）	福岡県教育委員会	県報229集
上高屋台ノ原遺跡	1次	H19（2007）	福岡県教育委員会	県報229集
下伊良原塚本遺跡	1次	H20（2008）	福岡県教育委員会	県報232集
上高屋台ノ原遺跡	2次	H20（2008）	福岡県教育委員会	県報229集
上高屋台ノ原遺跡	3次	H21（2009）	福岡県教育委員会	県報229集
上伊良原マトコロ遺跡	1次	H22（2010）	九州歴史資料館	県報255集
下伊良原フラノ遺跡	1次	H23（2011）	九州歴史資料館	県報255集
下伊良原東向川原遺跡	1次	H23（2011）	九州歴史資料館	県報255集
下伊良原原羽後屋敷遺跡	1次	H24（2012）	九州歴史資料館	県報255集
下伊良原中ノ切遺跡	1次	H24（2012）	九州歴史資料館	県報255集
下伊良原竹の内遺跡	1次（Ⅱ区）	H24（2012）	九州歴史資料館	本報
下伊良原竹の内遺跡	2次（Ⅳ区）	H24（2012）	九州歴史資料館	本報
下伊良原西の塚遺跡	1次（Ⅰ区）	H24（2012）	九州歴史資料館	県報257集
下伊良原竹の内遺跡	3次（Ⅰ区）	H24・25（2012・2013）	九州歴史資料館	本報
下伊良原西の塚遺跡	2次（Ⅱ区）	H25（2013）	九州歴史資料館	県報257集
下伊良原西の塚遺跡	3次（Ⅲ区）	H25（2013）	九州歴史資料館	県報257集
下伊良原西の塚遺跡	4次（Ⅳ区）	H25（2013）	九州歴史資料館	県報257集
下伊良原平原遺跡	1次	H25（2013）	九州歴史資料館	県報257集
下伊良原中ノ坪遺跡	2次	H25（2013）	九州歴史資料館	県報257集
下伊良原庄屋屋敷遺跡	1次	H25（2013）	九州歴史資料館	県報256集
下伊良原高木神社遺跡	1次	H25（2013）	九州歴史資料館	県報256集
下伊良原下地ヶ原遺跡	1次	H26（2014）	九州歴史資料館	県報257集
上伊良原高木神遺跡	1次	H26（2014）	九州歴史資料館	県報256集
上伊良原善治遺跡	1次	H26（2014）	九州歴史資料館	県報256集
下伊良原宮園遺跡	1次	H26・27（2014・2015）	九州歴史資料館	県報256集
下伊良原宮久保遺跡	1次	H27・28（2015・2016）	九州歴史資料館	本報
下伊良原竹の内遺跡	4次（Ⅲ区）	H28（2016）	九州歴史資料館	本報

第１表　伊良原ダム建設に伴う発掘調査

2. 調査の組織

発掘調査（平成24～28年度）および整理・報告書作成（平成29年度）の関係者は次のとおり。

	平成24年度	平成25年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
九州歴史資料館					
総括					
館長	西谷　正	荒巻俊彦	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠
副館長	篠田隆行	篠田隆行	伊﨑俊秋	飛野博文	飛野博文 （宮久保整理・報告）
参事			飛野博文 （宮久保調査）		
総務室長	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塩塚孝憲	塩塚孝憲	田嶋朋子
文化財調査室長	飛野博文	飛野博文	吉村靖徳	吉村靖徳 （宮久保調査）	吉村靖徳 （竹の内Ⅰ･Ⅱ、宮久保整理･報告）
文化財調査室長補佐	吉村靖徳	吉村靖徳 （竹の内Ⅰ調査）		伊﨑俊秋	伊﨑俊秋
文化財調査班長	小川泰樹	小川泰樹	秦　憲二	秦　憲二	秦　憲二
庶務					
総務班長	長野良博	長野良博	中村満喜子	中村満喜子	中村満喜子
事務主査	青木三保	青木三保 南里成子	宮崎奈巳 西村知子	西村知子	林田朋子
主任主事	近藤一崇			原野貴生 秦　健太	原野貴生 秦　健太
調査・整理・報告					
参事補佐	新原正典 （竹の内Ⅰ･Ⅱ調査）	新原正典 （竹の内Ⅰ調査）		小川泰樹 （竹の内Ⅲ調査）	小川泰樹 （竹の内Ⅲ整理･報告･編集）
主任技師	城門義廣 （竹の内Ⅳ調査）				
文化財保護課					
整理・報告					
主任技師					城門義廣 （竹の内Ⅳ整理・報告）

Ⅱ　位置と環境

１．地理的環境

みやこ町は、福岡県東部に位置し、面積151.34㎢、人口約２万人、平成18（2006）年３月に京都郡の勝山町、犀川町、豊津町の３町が合併して誕生した。カルスト台地平尾台を水源とする長峽（ながお）川と英彦山に源を発する今川、祓川が町内を貫流し、行橋市を経て周防灘に注いでいる。気候は瀬戸内海型気候区に区分されるが、北西の季節風の影響で冬季の降水量がやや多く、日本海型気候区の特徴もみられる。

伊良原地区は、みやこ町の南部、英彦山の北側斜面にあたり、祓川の上流域の、下伊良原、上伊良原、扇谷、帆柱の４地区からなる旧伊良原村の範囲を指す。90％以上が山林で、祓川によって形成された河岸段丘および小規模な沖積面上に集落と耕作地が形成されている。地質的には、中生代に貫入した花崗岩類が主体であり、今回の調査地点付近は優白質花崗岩層と黒雲母花崗岩層の境界付近に、新生代第四紀に属する主に花崗岩よりなる角礫および粘性土の崖錐堆積がみられる。また、山間部である伊良原では、町内でも低地より気温が４～５℃低く、降水量もかなり多く、冬季には積雪、凍結に悩まされる。

２．歴史的環境

伊良原ダム関係のこれまでの調査成果では、この地区の埋蔵文化財は縄文時代と中世が主体となるのが、ほぼ共通した特徴といえる。

縄文時代では、上伊良原榎遺跡で早期初頭の、上高屋台ノ原遺跡と下伊良原竹の内遺跡では早期から前期の、上伊良原川上遺跡、下伊良原原田ノ谷遺跡、横瀬東部遺跡でも前期の土器がまとまって出土している。中期では、下伊良原竹の内遺跡で春日式のほぼ完形の土器が出土している。後期になると、上伊良原川端遺跡で２軒、下伊良原西の塚遺跡で１軒の竪穴住居跡を検出しており、祓川を下った節丸西遺跡では約30軒からなる集落を確認している。また、下伊良原西の塚遺跡で19基以上、下伊良原東向川原遺跡で８基の、ドングリを貯蔵したと考えられる土坑を検出した。晩期では、上伊良原川上遺跡で竪穴住居跡を確認したほか、下伊良原中ノ坪遺跡で突帯文土器がまとまって出土している。

弥生時代から奈良時代にかけての時期は、伊良原地区では遺物を散見する程度で、現在のところ明確な生活の痕跡を見出すには至っていない。

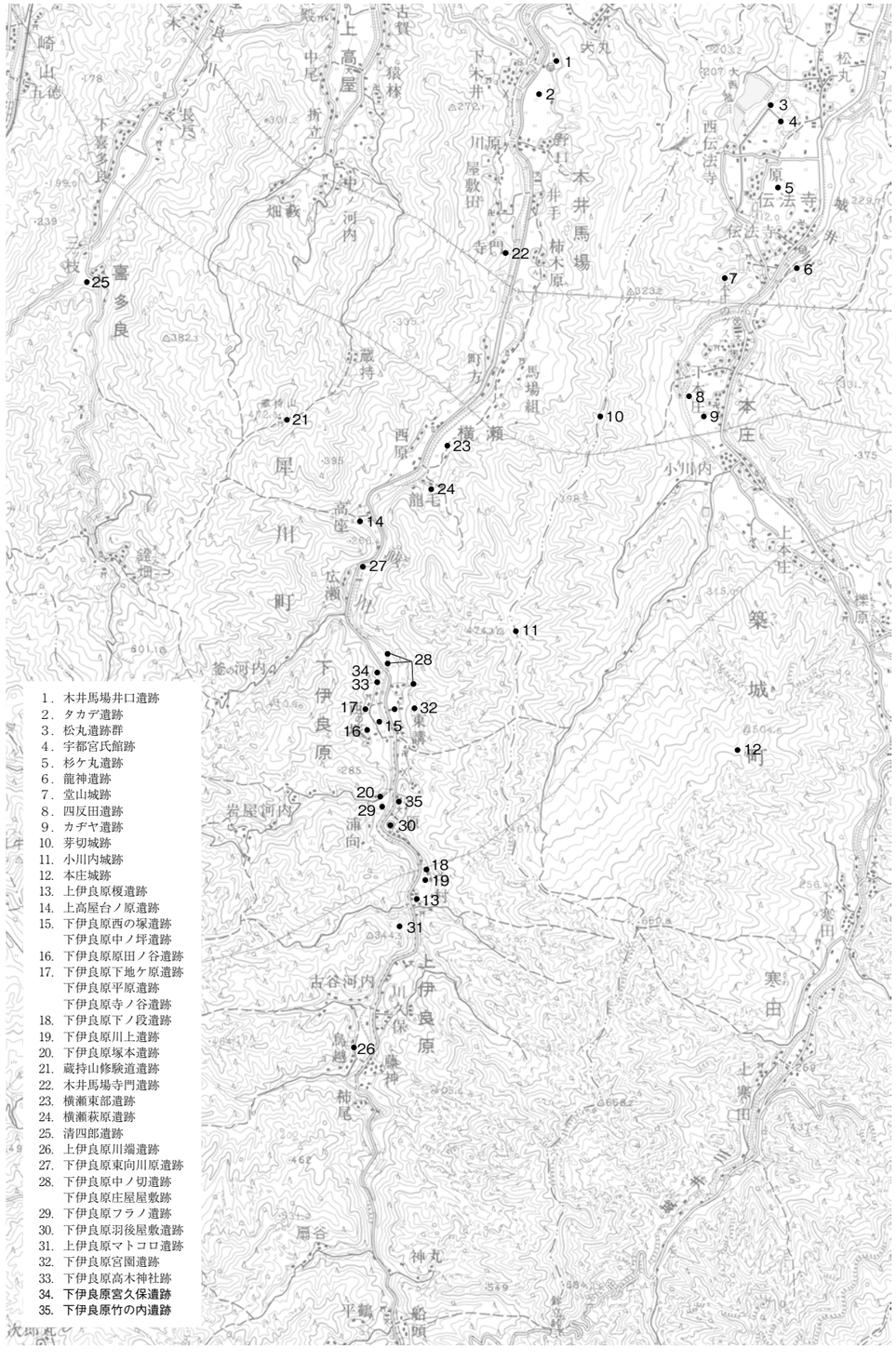
平安時代の後期には、宇佐宮および神宮寺である弥勒寺の影響を強く受けた地域で、近辺では宇佐宮領として城井浦、横瀬浦などの荘園が記録に残るが、伊良原については彦山社領であったとされる。また、平安末期には大宰府官人の板井氏が進出して木井に本拠を置いて勢力を拡大したとされる。鎌倉時代になって下野の御家人、宇都宮氏が入部して京築地域一帯を支配下に置いたが、南北朝期以前の拠点を板井氏の後を受けて木井において城下集落を形成している。それらは市屋敷遺跡、寺の下遺跡、下木井遺跡などの調査で実態が徐々に明らかになりつつある。宇都宮氏は後に本拠を城井谷に移しており、戦国末期に至って秀吉の九州征伐後の黒田氏の豊前入国に際して攻め滅ぼされている。関ケ原合戦後に黒田氏は筑前に転封、豊前国は細川氏の所領となり、後に小笠原氏と交代した。

また､この地区の歴史を考える上では､九州最大の山岳修験道場である彦山（近世以降英彦山）と、その強い影響下で発展した蔵持山の存在が大きい。特に蔵持山は伊良原の北方に接して至近の距離にある。承平・天慶年間（930年代）の開山伝承を持ち、これと大きく外れない時期の遺物が出土していることから、既にこの頃には信仰の山として成立していたようである。以降、本末の関係にあった彦山の七里四方とされた神領の北限として重要な位置を占め､彦山六峯の一つに数えられた。中世には宇都宮氏の庇護もあって発展し、最盛期には96坊があったとされており、地域の信仰を集めた 。一方で彦山は、古くから伊良原を領有していたと考えられ、今回の調査地点である下伊良原からでも祓川沿いに遡って10数kmの距離であり、文字通り膝下といえる。当時その規模は圧倒的であり、蔵持山の本山でもある。民俗調査によっても、伊良原地区は蔵持山よりもむしろ英彦山との結びつきが大きかったという。彦山は天正９（1581）年の大友氏による攻撃で壊滅的な打撃を受けて、末山である蔵持山も含めて一時期衰亡する。

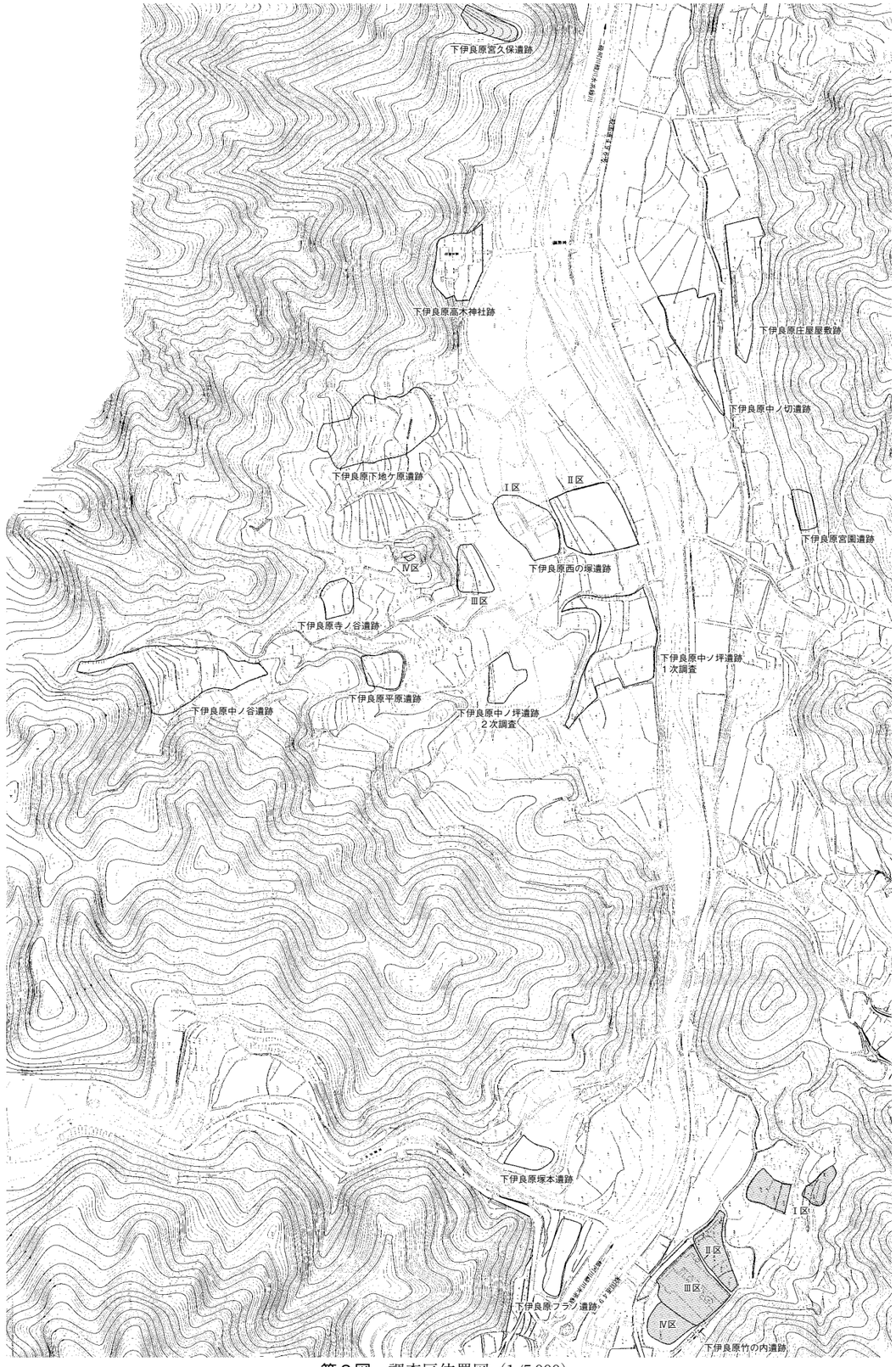
伊良原地区は、宇都宮氏の本拠のあった木井地区、蔵持山と彦山を結ぶ要路に位置する。今回のダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の各地点で中世の遺構・遺物を確認しているが、これら三者との関係で考えるべきものであろう。

参考文献

犀川町誌編纂委員会1994『犀川町誌』
福岡県教育委員会 1999『伊良原－民俗文化財の調査－』福岡県文化財調査報告書第143集
福岡県教育委員会 2003『木井馬場井口遺跡　味噌谷古道跡』福岡県文化財調査報告書第183集
福岡県教育委員会 2009『伊良原Ⅰ』福岡県文化財調査報告書第222集
福岡県教育委員会 2011『伊良原Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第229集
福岡県教育委員会 2012『伊良原Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第232集
福岡県教育委員会 2017『伊良原Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第255集
福岡県教育委員会 2017『伊良原Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第256集
福岡県教育委員会 2017『伊良原Ⅵ』福岡県文化財調査報告書第257集
犀川町教育委員会 1992『城井遺跡群』犀川町文化財調査報告書第３集
犀川町教育委員会 1994『城井遺跡群Ⅱ』犀川町文化財調査報告書第４集
みやこ町教育委員会 2013『蔵持山遺跡群』みやこ町文化財調査報告書第９集



第２図　周辺遺跡分布図（1/50,000）



第３図　調査区位置図（1/5,000）

Ⅲ　調査の内容

１．下伊良原竹の内遺跡

福岡県京都郡みやこ町下伊良原地区は、集落の中央部を豊前海へと東流する祓川と、それとほぼ並行して走る行橋市と日田市を結ぶ国道496号線沿い展開する細長い集落である。狭小な集落ではあるが、ダム建設前までは、伊良原小学校をはじめ郵便局や農協支所などの公共施設、それに旅館などもあり、この地区の中心的集落であった。

その伊良原小学校の背後と、祓川の川幅を狭小にするように右岸にせり出した標高227ｍの丸山と呼ばれる半円球状の小山との間に竹の内遺跡のⅠ区とⅡ区は存在する。

竹の内遺跡Ⅰ・Ⅱ区は、平成21年３月11日から31日にかけて実施された試掘調査によって確認された遺跡である。伊良原ダム建設工事に先立つ試掘調査は、福岡県教育庁文化財保護課調査第一係が担当し、開校中の伊良原小学校を除く３つの丘陵先端部とそれに挟まれた谷部の広大な用地に重機を使って41本のトレンチが設定された。試掘面積は計1,320㎡に及ぶ。

試掘調査の結果、丘陵上の水田面からは中世の掘立柱建物跡やピット、縄文時代の土坑などを検出した。また、丘陵に挟まれた谷部は地表下１ｍほどで泥炭層となり、湧出地形であることを確認した。一方、試掘できなかった小学校敷地は、地形や隣接地の試掘結果から遺跡の存在が予想され、小学校閉校後に改めて試掘調査をすることとした。

以上の試掘結果から、竹の内地区については遺跡の存在が確認された４個所について、祓川下流側丘陵から72・73・105番を竹の内遺跡Ⅰ区、77・78・79番を竹の内遺跡Ⅱ区、伊良原小学校校舎敷地を竹の内遺跡Ⅲ区、そして小学校グランド敷地を竹の内遺跡Ⅳ区として発掘調査の対象地とした。

その後、平成23年度になり、ダム事務所との協議において、平成24年度から竹の内地区の工事が開始されることが示され、工事着手の優先順位が高い竹の内Ⅱ区について、翌年の平成24年９月から発掘調査を実施することとした。

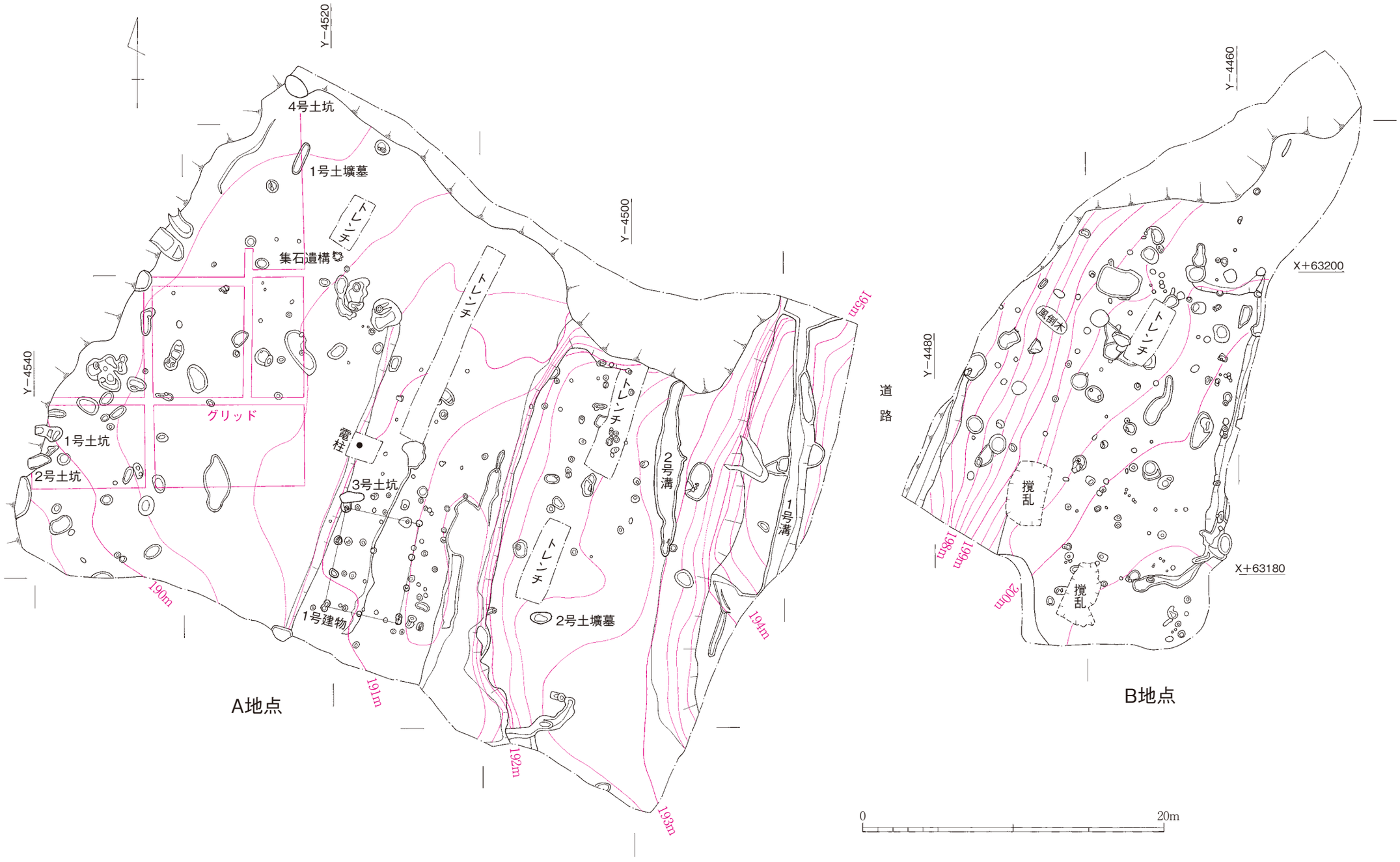
Ⅰ区

１）調査の概要

竹の内遺跡Ⅰ区は、旧伊良原小学校の東側、先行して実施した竹の内遺跡Ⅱ区の丘陵と10ｍ幅の谷を挟んだ東側丘陵先端部に位置する。調査区は３カ所に分かれ、祓川に近い丘陵先端部北域の72・73番の水田をＡ地点、里道を挟んだ南域の丘陵基部側105番宅地跡をＢ地点、さらに、B地点の北東約50ｍの山林に確認されていた炭焼窯をＣ地点とした。Ａ地点は標高189.5～195.5ｍ、Ｂ地点は標高197ｍ～200.5ｍの間に、また、Ｃ地点は標高223ｍの高所に所在する。また、丘陵眼下に流れる祓川は標高180ｍ前後で、その比高差はＡ地点で約10ｍある。なお、Ⅰ区全体の調査面積は計2,040㎡である。

調査は平成25年１月８日に重機による表土除去からはじめ、遺構検出作業および遺物包含層の一部掘削で年度末を迎えたため、24年度の調査は平成25年３月19日で終了した。

平成25年度の調査は平成25年４月15日から再開した。７月24日でまでに炭窯と縄文包含層を除いた箇所の調査を終え、担当の新原が報告書作成のための室内作業にかかるため、現場作業は吉村に



第４図　Ⅰ区遺構配置図（1/300）

引き継いだ。９月11日には窯の調査を終了し、竹の内遺跡Ⅰ区の調査はすべて終了した。

竹の内遺跡Ⅰ区で検出した遺構は、中世の掘立柱建物跡１棟、土壙墓２基、それに縄文時代と思われる土坑４基と集石遺構１基などである。そのほかに、南の丘陵基部側において、丘陵を切断する里道と平行して南北方向に延びる近世の溝２条を検出した。

Ⅰ区では、調査中の平成25年４月下旬の春、Ⅰ区とⅡ区の間に流れる谷川に体長３㎝弱のオタマジャクシが数多く泳いでおり保護種の可能性もあったため､県のダム建設事務所に確認を依頼した。ダム建設事業は自然環境の保全に配慮しており、調査の結果、福岡県では絶滅危惧Ⅱ類に指定されているヤマアカガエルのオタマジャクシと判明した。ヤマアカガエルは成長すると体長４～８㎝になり、腹側の咽の辺りに大きな斑点模様があるのが特徴で、ダム用地内に設けられた安全な湿地に放つこととなった。

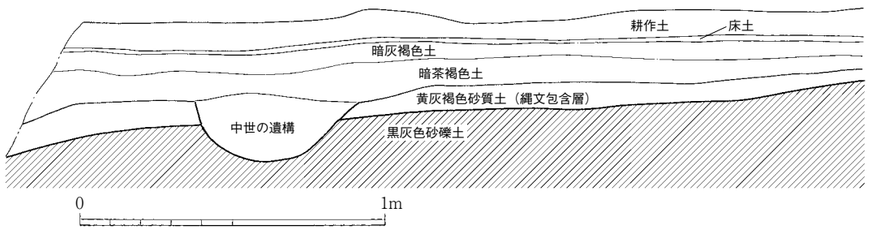
２）基本層序

竹の内遺跡Ⅰ区の層序は第５図で見るように、発掘前の地目が水田であったため、基本的には上から水田耕作土とその下の暗灰褐色土の水田床土、更に下が客土の暗灰褐色土となり、その下の暗茶褐色土（包含層）を除去すると中世の遺構面に至る。遺構面は丘陵基部側では旧地表より－50～60㎝で黄灰白色砂質土の地山面、丘陵先端部側では、－20～40㎝で黒灰色砂礫土の地山面となり、この面にて遺構群が検出された。遺構面はおおよそ標高190～193ｍの間にある。

また、丘陵先端部側には地山となる黒灰色砂礫土の上位に、厚さ10～20㎝ほどで黄灰色砂質土の縄文土器を含む包含層が遺存している。中世遺構の調査終了後にグリッドを設定して下層を掘り下げ遺構の検出を行ったが、この層位中から土器小片や石鏃などが出土したものの遺構は検出されなかった。黄灰色砂質土の下層は黒色砂粒を含む淡黄褐色砂礫土となり、この層には遺物は含まれていない。

３）縄文時代の遺構と遺物

竹の内遺跡Ⅰ区において、縄文時代の遺構は、土坑４基、集石遺構１基を確認した。また、丘陵先端部においては縄文時代の包含層となる黄灰色砂質土が遺存していた。



第５図　基本層序模式図（1/20）

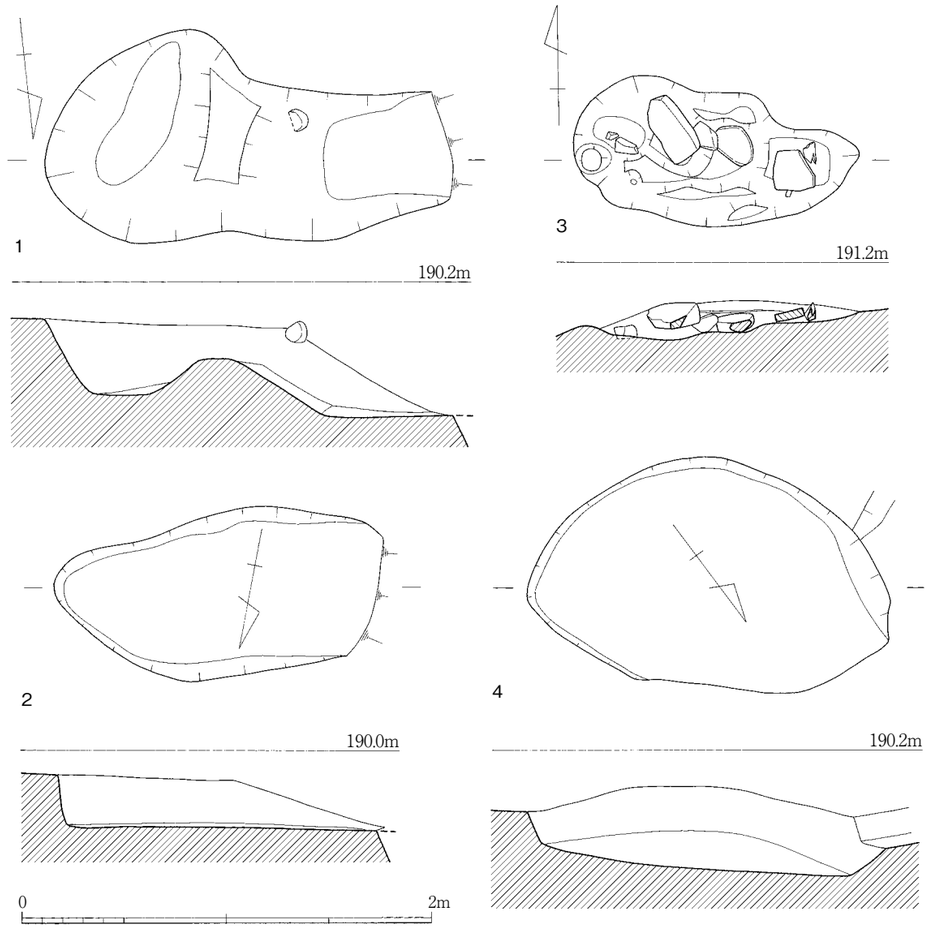
土坑

１号土坑（図版２、第６図）

Ａ地点の最北端部丘陵突端で検出し、一端は段落ちにより削られている。この土坑は、遺構検出時に、上面に縄文土器を含む暗黄灰色土の平面不正楕円形をした覆土層があり、掘り下げたものである。調査の結果、下部は二つの坑に分かれており、別々の穴の可能性も残されてはいるが、ここでは一つの土坑として報告する。土坑の長軸は東西方向で、上端径195㎝、最大幅107㎝を測る。底面は中央部のテラスを介して東西に分かれる。西側の穴は深さ42㎝、東側の穴は深さ35㎝である。

出土遺物（図版８、第７図）

いずれも深鉢で､１～４は口縁部。１～６は貝殻条痕によりミミズ状の突線をつくりだしている。２・３・４は口縁端部が面をなす。そのうち２・４は刻みを施している。内面調整はいずれも二枚



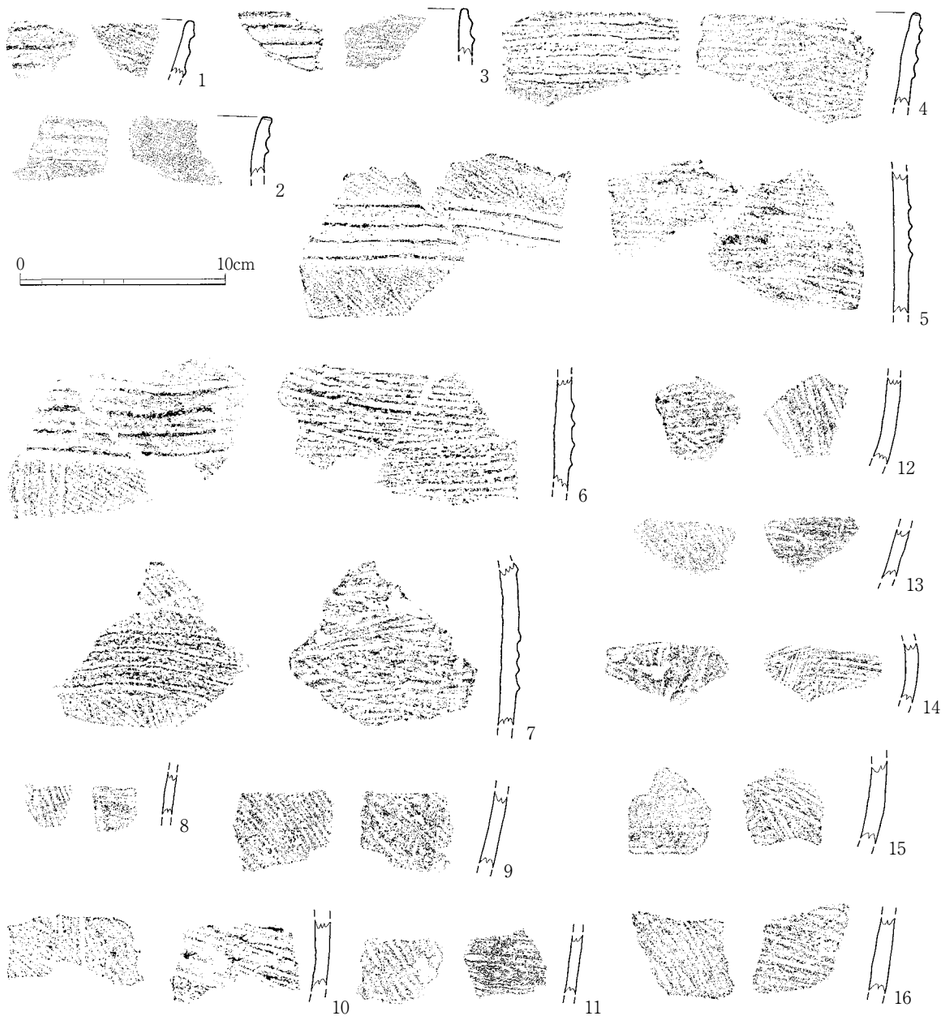
第６図　１～４号土坑実測図（1/30）

貝腹縁による条痕。２の口縁端部から内面には煤が付着する。その他はいずれも内外面とも条痕が残る。

坑内を覆う覆土から20点近くの縄文土器片のほか、数点の角礫片が出土した。これらの遺物は土坑埋没後に堆積したもので、土坑には伴わない。

２号土坑（図版５、第６図）

２号土坑は１号土坑の西２ｍの位置で検出し、１号土坑と同じく北端は段落ちとなる。長軸は現存長160㎝でほぼ東西を向く。平面形は不正長方形で、底面での長軸は156㎝、幅80㎝、深さ26㎝を測り、底面は平坦である。覆土は黄灰色土の埋土で、坑内からの遺物の出土は若干の縄文土器片のみである。



第７図　１号土坑出土縄文土器実測図（1/3）

３号土坑（図版２、第６図）

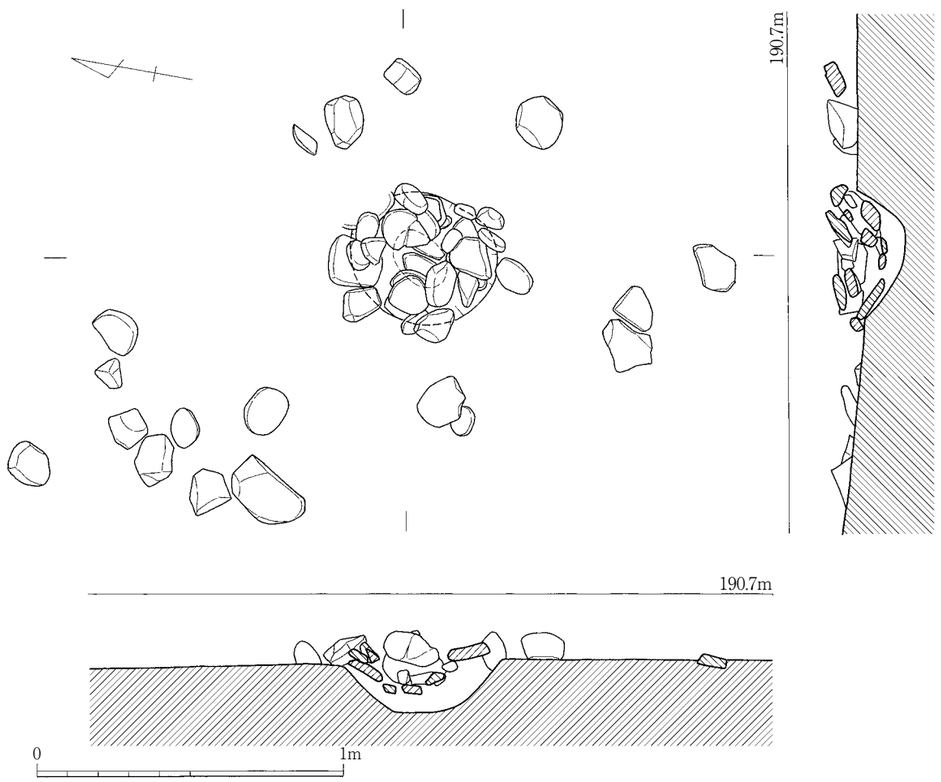
３号土坑はＡ地点中央で検出した。長軸139㎝、幅66㎝、深さ16㎝を測る。平面は楕円形で、西端は段落ちで削平されている。長軸はほぼ東西方向にある。坑内は炭混入灰白土の埋土で、花崗岩角礫が敷き詰められた状況で出土した。底面は焼けている。坑内からの出土遺物はない。新しい時期の土坑かもしれないが埋土からみて縄文時代の所産と考えておく。

４号土坑（図版５、第６図）

４号土坑はＡ地点北端の発掘区端で検出した。土坑の北端は段落ちにかかる。埋土は黄灰色土の埋土で、轟式土器片が出土した。土坑は平面形楕円形で、長軸178㎝、遺存する短軸112㎝、深さ41㎝を測り、長軸は北西～南東方向にある。周壁は直に立ち上がり、底面は皿状に窪む。

集石遺構（図版３、第８図）

Ａ地点下段の北域、標高190.5ｍの面にて集石遺構が１基検出された。集石は径40㎝、深さ15㎝の浅い楕円形の坑の内壁に面をそろえるように10個の礫を配架している。またこれを取り囲むように1.5×２ｍ四方に角礫が散在していた。これら周囲の礫はまとまりをもたないものの、中央の石組みとレベルが合うことから、集石とともに一体的な遺構の可能性が高い。中央部の集石について



第８図　集石遺構実測図（1/20）

は、石材が焼けた痕跡がなく、また、くぼみの埋土からは炭化物や焼土は出土していないが、形状から炉の可能性を考えておきたい。角礫は数個の花崗岩を除いて眼下の祓川河川敷に散乱する安山岩の河原石である。

ピット・包含層等出土遺物

土器（図版８、第９～11図）

１は深鉢の口縁部破片。口縁下の外面に径４㎜ほどの刺突文を施す。早期の柏原式の可能性も考えられるが、口縁部が外反していないことなど同型式と異なる点がある。

２は横走山形文。内面は条痕。

３～５は縄文。いずれも内面に条痕が残る。

６～16は外面に直線的な沈線文を施す一群。６は深鉢の口縁部で大きく外反する。外面には残存部位で確認できる限りではヘラ状工具によるVやX字状の文様を施す。調整は内面がナデ、外面は摩滅が著しいため不明。７は口縁端部が面をなし、刻みを入れる。９は口縁部が直立するもので、二重の斜格子状の文様となる。調整は内外面ともヨコナデ。口縁部の内面には煤状の炭化物が付着する。10は口縁部が屈曲して開く。外面に先端が尖った工具により縦方向に沈線文を入れる。内面の調整は条痕のちナデ。11は格子文。12・13は９・15・16と同一個体とみられる。12は二重の斜格子の下に横位の沈線がまわる。14は胎土が精良で、６と同一個体とみられる胴部破片。６と同じく小片であるため文様の規則性はわからない。

17は口縁部の小破片。外面の口縁端部際には条痕の上から巻貝の先端により波状の文様を描く。内面は二枚貝腹縁による斜め方向の条痕が残る。

18・19は口縁端部などに形状の差異が認められるものの、同一個体とみられる。口縁は波状で、外面に連続する刺突文を５列以上整然と並べ、口縁端部には刻み様の押圧が間断なく施される。内面には二枚貝腹縁による横方向の条痕が残る。胎土は比較的粗い。22・23は同部の小破片。

20･21は体部に巻貝先端による刺突が並ぶ。ともに胎土は精良で､内面に煤が付着する。同一個体。

24～35は二枚貝の腹縁によりミミズ状の突線をつくりだしたもの。27・28は条痕が波状になる。いずれも内面には二枚貝腹縁による条痕が残る。

36は鉢の口縁部。内湾気味の体部に直立する口縁部が付く。口縁部外面には二条の沈線をめぐらせ、沈線間には連続する刺突文を配している。37は口縁部の端部に刺突文を施す。また口縁下には沈線をまわす。39は外反する口縁に直立する口縁部をもつもの。口縁部外面に二本の沈線をめぐらせる。40・41は器壁が薄い。40は口縁端部が肥厚し、巻貝先端による刺突を施す。41も同様の施文で、刺突は二段である。42は口縁下に突帯がまわり、突帯には刺突が施される。48は口縁部。47～72は条痕が残るもの。48は口縁部。端部に刻みを入れている。55は胴部の屈曲部分。57は焼成後の穿孔がある。孔は外面から穿たれている。

73・74は底部。73は平底で、外面が黒変している。底径7.0㎝を測る。74は上げ底。底部外面の調整は条痕。

石器（図版９、第12～14図）

１～55は石鏃。基部は７・８・13のように抉りの浅いもの、50・53・54のように抉りが深いいわゆる鍬形鏃のほか、39・40のような平基、45の円基などのバリエーションがある。形状はほとんどが三角形であるが、22は五角形で、また31は側縁部が弧状になって先端部を尖らせた特異な形状である。15は鋸歯鏃。23は薄い剥片の周縁部のみに細かな剥離を施した剥片鏃。39は他と比べて厚みがあり、また形状からみて尖頭器としたほうがよいか。51は抉りがあるため石鏃としてよいものと思われる。周縁部に細かな剥離が施されていないため、未製品と考えられる。53は裏面に素材の主要剥離面を残す。石材は姫島産黒曜石の割合が最も高く56％､次いで安山岩16％､腰岳産黒曜石７％､その他（玻璃質安山岩など）である。重量は１が最も軽く0.2ｇ、51が最も重く７ｇである。

56～69はスクレイパー。56はつまみ形石器。頂部の両側に抉りを入れ、先端に細かい二次加工を施す。58～60はそれぞれ周縁部に二次加工を施し刃部としている。61は縦長剥片の片側に粗い二次加工を施す。64は厚みのある横長剥片の左側縁部に二次加工を施す。65・67～69は大形のスクレイパー。いずれも素材となった剥片の主要剥離面を片面もしくは両面に残す。66はエンドスクレイパー。明確な二次加工は確認できないが、下端部に使用のための刃こぼれがみられる。69は表裏に素材の剥離面が残り、主要剥離面側の一辺に二次加工を施して刃部としている。70・71は石匙。70は横長で刃部が直線的である。71は縦長で先端部を欠損する。

72～74は石錐。いずれも素材である縦長剥片の二側辺に加工を施して刃部を作り出す。

75～78は使用痕剥片。それぞれ不整形剥片の側縁部に使用による刃こぼれが残る。

79は細石核。上面を細かく加工して打面となる平坦面を整えている。側面は船底形を呈する。80は細石刃か。下部を欠損する。

81・82は磨製石斧。81は刃部の先端に刃こぼれがみられる。82は欠損した側面の破片。刃部の右側が欠損しており、使用による剥落とも考えられる。

84～86は凹石。85・86は両面とも中央部が敲打により凹んでいる。また、側縁部の１カ所が敲き石として使用したためにへこんでいる。87･88は磨石。ともに上面が使用により平滑になっている。

89は石包丁。背は直線的で、孔の一部が遺存している。

４）中世の遺構と遺物

掘立柱建物跡

Ａ地点の南端中央部の標高190.3ｍの地点で、掘立柱建物跡１棟を検出した。

１号掘立柱建物跡（図版４、第15図）

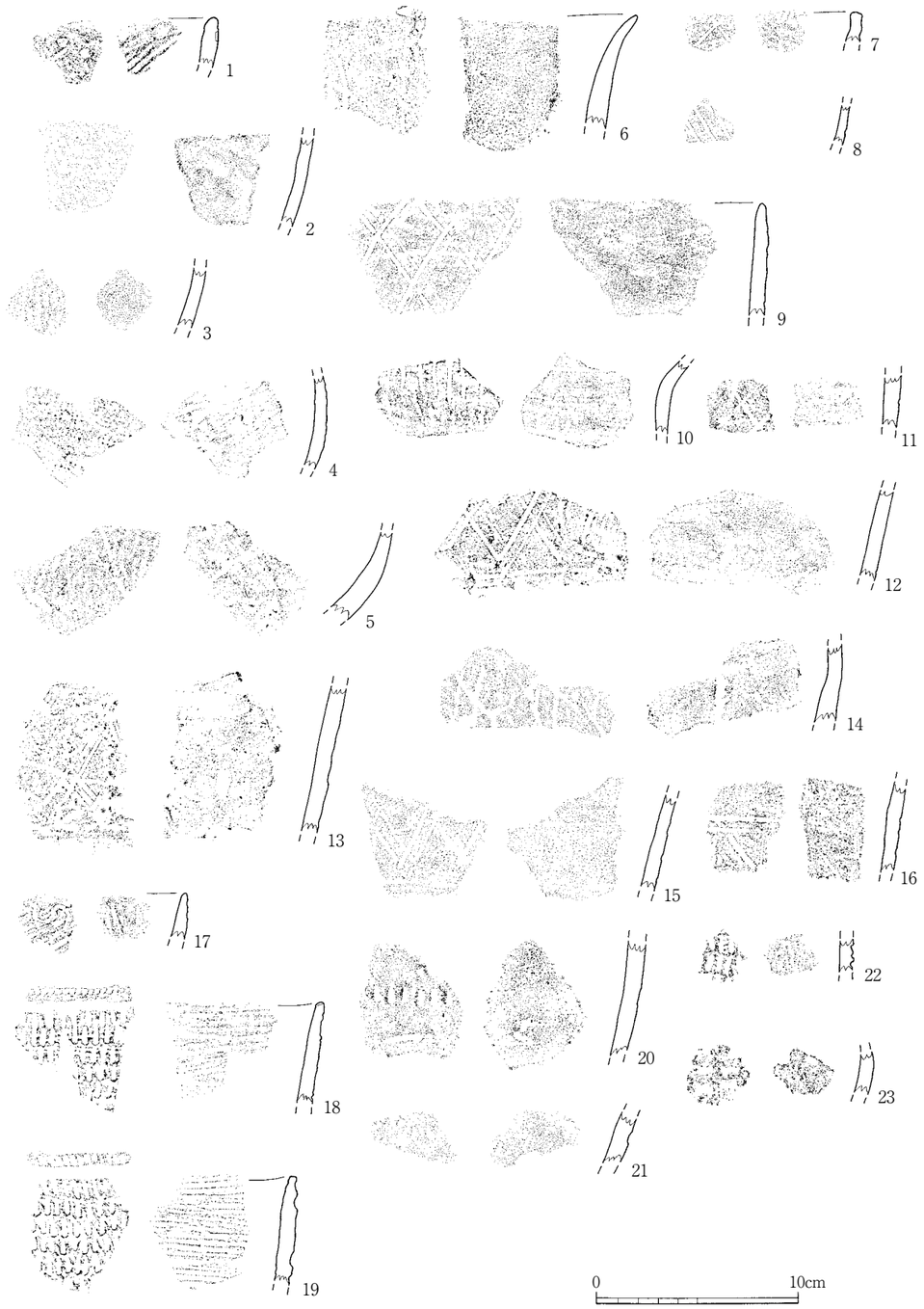
建物は棟方向をＮ－12°－Ｅにとる略南北棟で、やや東向きとなる。建物の規模は梁行２間510㎝×桁行３間660㎝で、面積は33.7㎡を測る。柱間は、梁方向は2.4～2.7ｍとばらつきがあるが、桁方向は2.2ｍと等間である。柱穴掘方の直径は35～50㎝で、深さは29～70㎝と深い穴もある。北東隅の柱穴には、直径10㎝ほどの細い木柱が残っていた。

土壙墓

Ａ地点北端部と南東部の２ヶ所にて、中世の土壙墓をそれぞれ１基検出した。

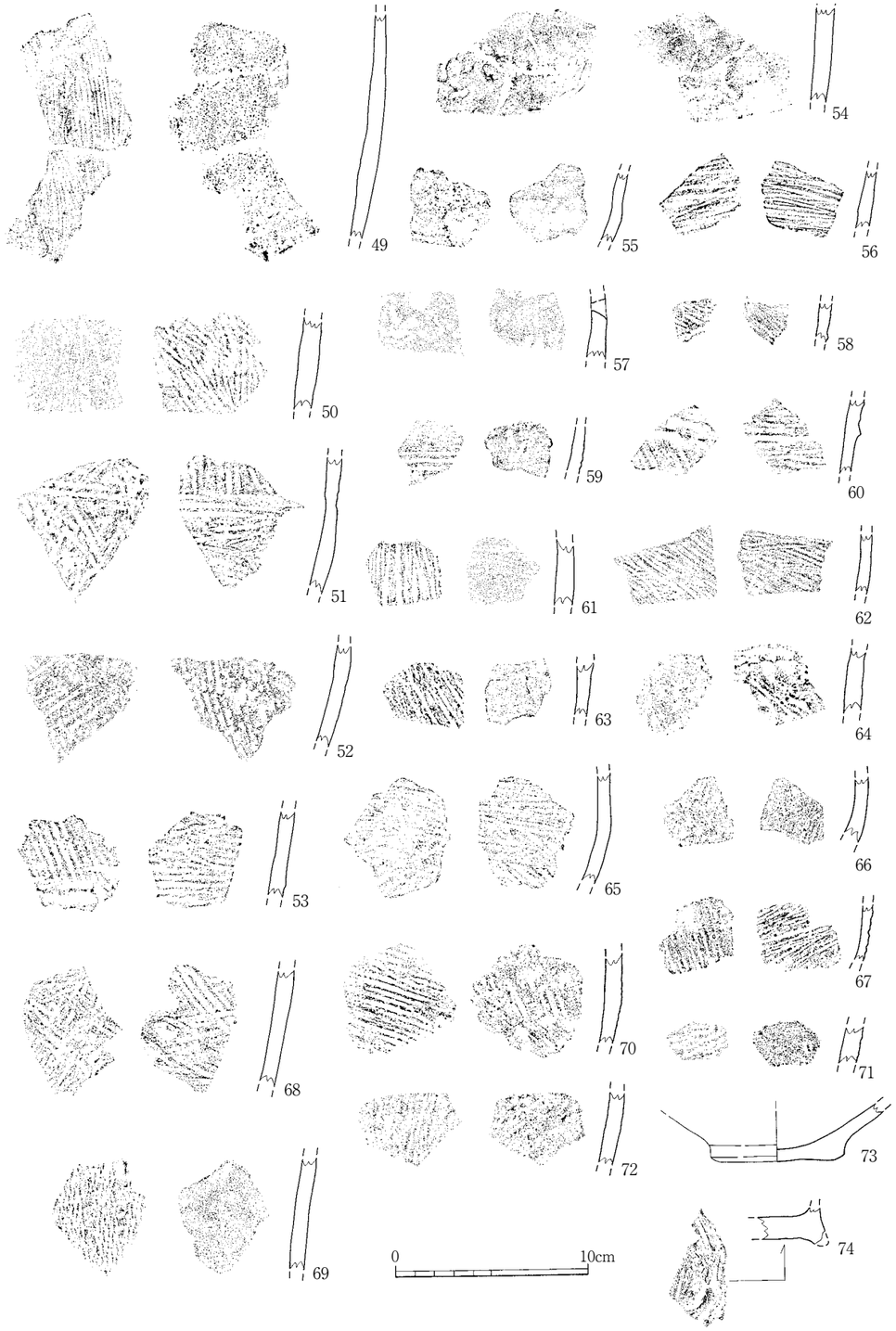
１号土壙墓（図版４、第16図）

１号土壙墓はＡ地点の北端、丘陵先端部で検出した。平面形が隅丸長方形の土壙墓である。規模

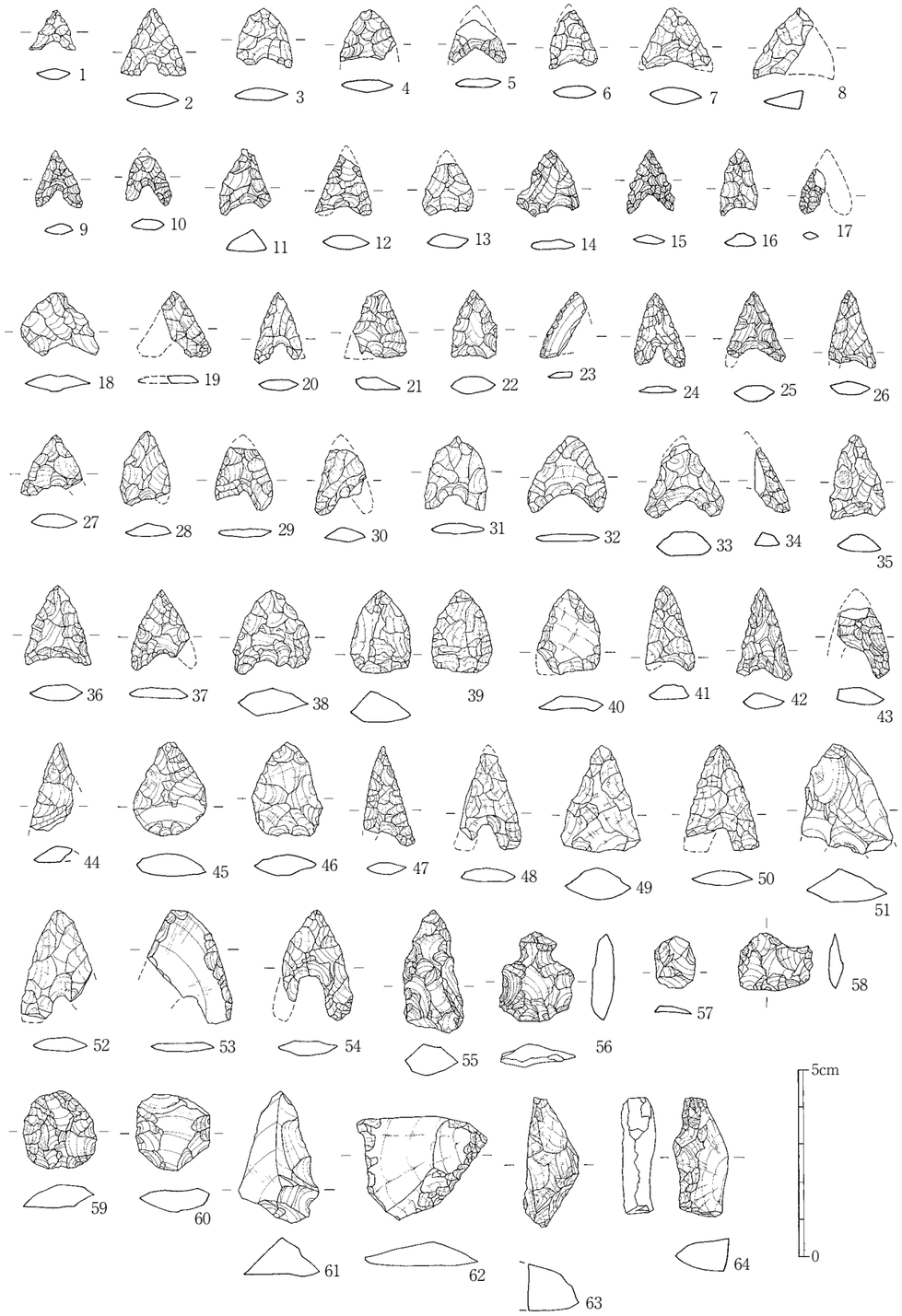


第９図　層位等出土縄文土器実測図１（1/3）

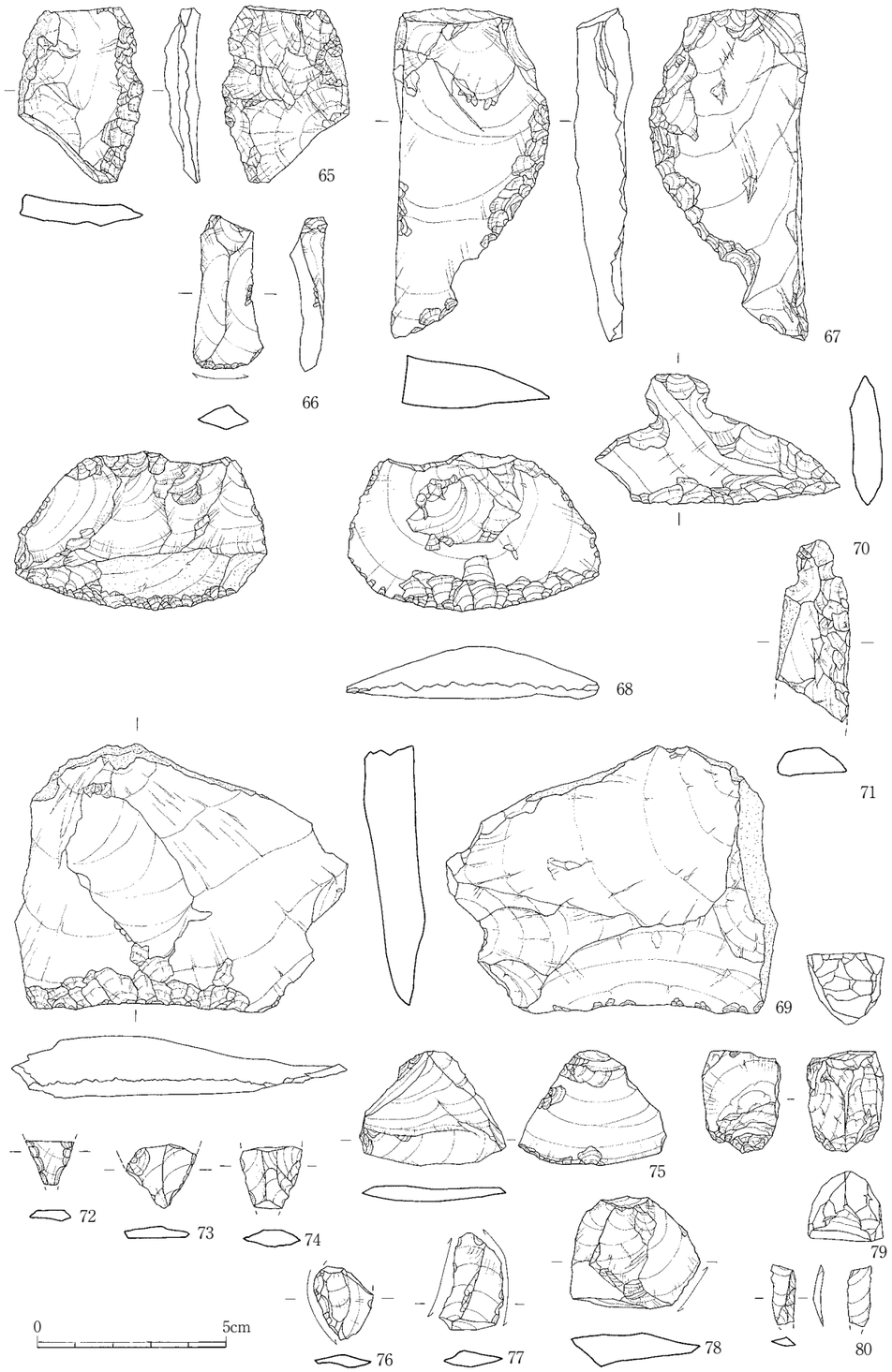
第10図　層位等出土縄文土器実測図２（1/3）



第11図　層位等出土縄文土器実測図３（1/3）



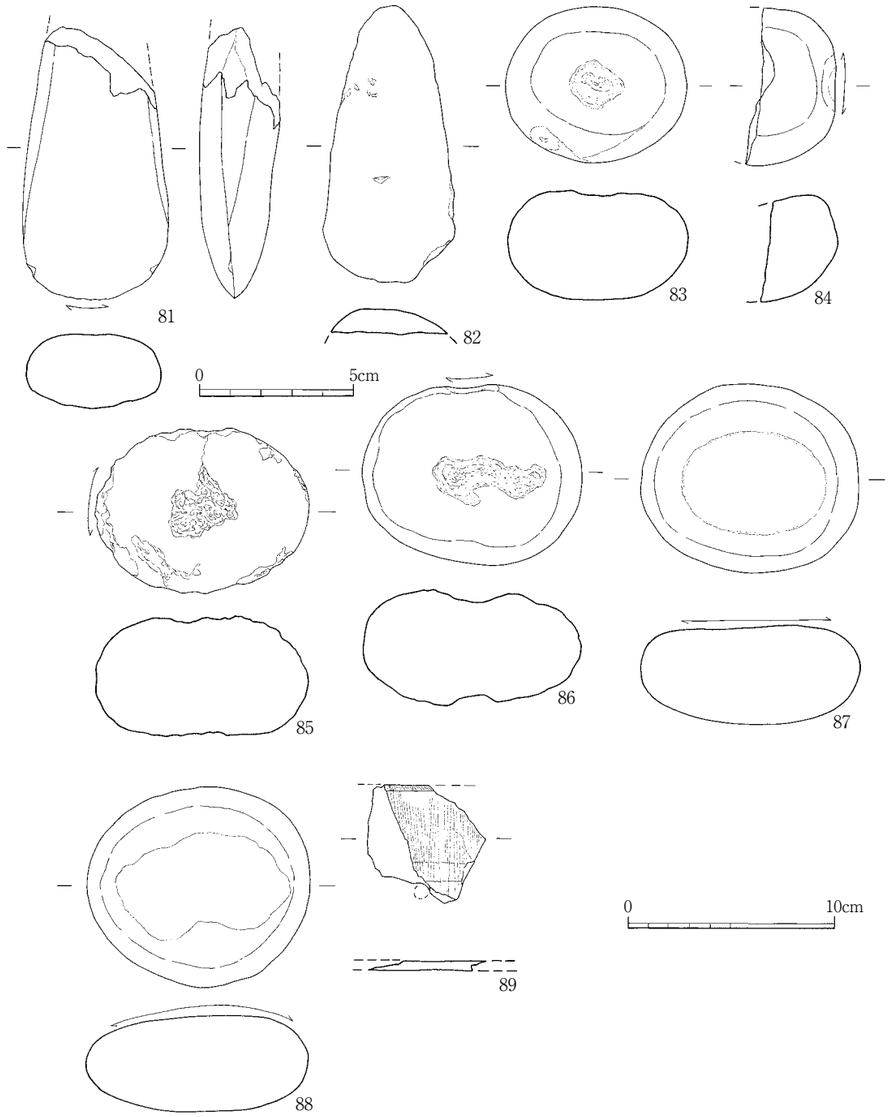
第12図　層位等出土石器実測図１（2/3）



第13図　層位等出土石器実測図２（2/3）

は、長さ225cm、北端幅67cm、南端幅62cm、中央幅67cm、墓壙上部の削平が著しく、かろうじて深さ５cmが残っていた。底面の標高は190.2mを測る。埋土は暗灰褐色砂質土の埋土であった。墓の主軸はＮ－34°－Ｅで、底面北半には長さ18cm、幅24cm、高さ14cm大の枕石とみられる花崗岩礫が置かれていた。枕石および副葬品の位置から頭位は北となる。底部北端から副葬品が一括して出土したが、床面よりも浮いていたため、木蓋土壙もしくは木棺墓であった可能性がある。

副葬品は、土師器坏６、蓋付青白磁小壷１、青白磁皿１、それに完形の鉄製紡錘車１の計９点で



第14図　層位等出土石器実測図３（81・82・89は1/2、その他は1/3）

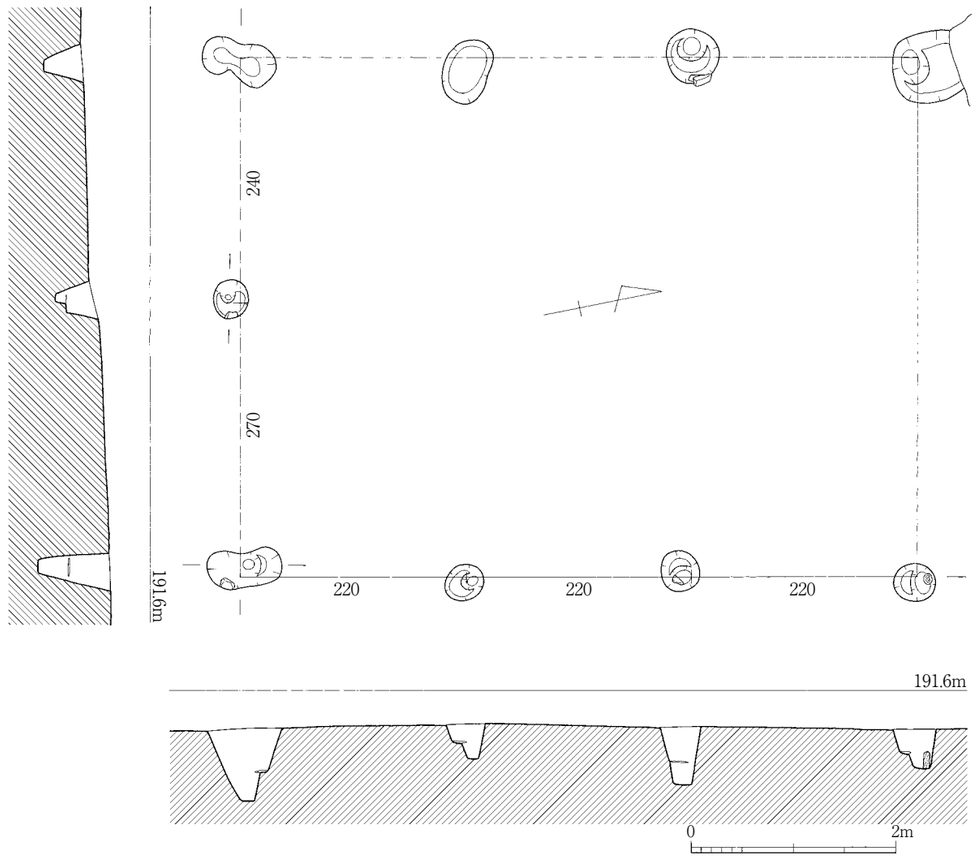
第２表　下伊良原竹の内遺跡Ⅰ区石器計測表

図番号	番号	器種	石材	出土遺構	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）
	1	石鏃	安山岩	包含層	10.5	12.5	3.0	0.2
	2	石鏃	安山岩	包含層	12.5	3.5	17.0	0.6
	3	石鏃	安山岩	包含層	14.5	15	3.0	0.6
	4	石鏃	黒曜石（姫島産）	検出面	14	13	3.0	0.4
	5	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	(11.0)	14	2.5	0.3
	6	石鏃	安山岩	包含層	(15.0)	12.0	3.0	0.5
	7	石鏃	安山岩	包含層	16.0	18.0	5.0	1.0
	8	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	8.0	(22.0)	4.0	0.8
	9	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	15.0	12.5	3.0	0.4
	10	石鏃	玻璃質安山岩	包含層	(14.0)	12.0.	3.0	0.3
	11	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	17.0	13.0	5.0	0.8
	12	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	(15.0)	15.5	4.0	0.7
	13	石鏃	安山岩	包含層	(13.0)	13.0	3.5	0.5
	14	石鏃	黒曜石	包含層	17.0	16.0	3.0	0.7
	15	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	17.0	10.0	4.0	0.5
	16	石鏃	黒曜石	包含層	17.0	13.0	2.5	0.3
	17	石鏃	黒曜石	包含層	(12.0)	(7.0)	2.0	0.1
	18	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	17.0	19.0	5.0	1.2
	19	石鏃	黒曜石（姫島産）	検出面	17.5	(13.0)	2.5	0.4
	20	石鏃	安山岩	包含層	18.0	13.0	3.0	0.6
	21	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	18.0	(13.0)	4.0	0.7
	22	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	18.0	22.0	5.0	1.0
	23	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	18.0	(6.0)	3.0	0.2
	24	石鏃	安山岩	包含層	19.0	13.0	2.0	0.4
	25	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	19.0	11.0	4.0	0.6
	26	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	21.0	12.0	3.5	0.5
	27	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	15.7	15.7	4.0	0.6
	28	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	19.0	16.0	4.0	0.8
	29	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	(16.0)	15.0	2.0	0.5
	30	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	(17.0)	12.0	3.5	0.7
	31	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	19.5	16.0	3.0	0.8
	32	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	20.0	21.0	2.0	0.8
12	33	石鏃	黒曜石（姫島産）	検出面	20.0	20.0	7.0	1.7
	34	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	19.0	(7.0)	4.5	0.4
	35	石鏃	珪質岩	包含層	22.0	14.0	4.5	0.7
	36	石鏃	安山岩	包含層	21.5	17.5	4.5	1.3
	37	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	22.0	16.0	3.0	0.7
	38	石鏃	黒曜石	包含層	22.0	20.5	7.0	2.9
	39	石鏃	安山岩	包含層	22.0	16.0	8.0	2.6
	40	石鏃	安山岩	包含層	23.0	16.0	4.0	1.5
	41	石鏃	安山岩	包含層	23.0	13.0	5.0	1.0
	42	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	24.0	14.0	4.5	0.9
	43	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	(18.5)	13.5	4.5	0.9
	44	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	(24.0)	(12.0)	4.0	0.9
	45	石鏃	黒曜石	上層遺構面	24.0	18.0	6.0	2.3
	46	石鏃	黒曜石（姫島産）	表土	25.0	18.0	5.0	1.8
	47	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	27.0	16.0	3.0	0.7
	48	石鏃	安山岩	遺構検出時	(25.5)	(18.0)	3.1	1.3
	49	石鏃	安山岩	包含層	28.0	21.0	5.0	3.5
	50	石鏃	安山岩	包含層	28.0	19.0	4.0	1.7
	51	石鏃	黒曜石（姫島産）	中段トレンチ埋土	28.0	24.0	8.0	4.0
	52	石鏃	安山岩	包含層	(28.0)	(18.0)	4.0	2.0
	53	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	30.0	(18.0)	3.0	1.9
	54	石鏃	黒曜石	包含層	30.0	18.0	4.0	1.5
	55	石鏃	黒曜石（姫島産）	包含層	33.0	16.0	8.0	3.6
	56	つまみ形石器	黒曜石	包含層	24.0	20. 0	6.0	2.1
	57	スクレイパー	黒曜石（姫島産）	包含層	14.0	10.0	3.0	0.3
	58	スクレイパー	黒曜石（姫島産）	包含層	15.0	19.5	4.0	1.0
	59	スクレイパー	黒曜石	検出面	19.0	18.7	7.0	2.1
	60	スクレイパー	黒曜石（姫島産）	上層遺構面	20.0	19.5	6.0	2.1
	61	スクレイパー	黒曜石（姫島産）	包含層	35.0	21.0	1.0	4.9
	62	スクレイパー	安山岩	包含層	27.0	35.0	7.0	5.0
	63	スクレイパー	安山岩	包含層	(13.0)	(35.0)	13.0	5.5
	64	スクレイパー	安山岩	P17	32.0	15.0	9.0	4.2
	65	スクレイパー	安山岩	包含層	45.0	33.0	9.0	10.9
	66	スクレイパー	黒曜石	包含層	39.0	18.0	7.0	3.9
	67	スクレイパー	チャート	包含層	86.0	42.0	16.0	44.5
	68	スクレイパー	黒曜石（姫島産）	包含層	31.0	67.0	14.0	29.1
	69	スクレイパー	安山岩	排土中	69.0	87.0	17.0	87.7
	70	石匙	安山岩	包含層	34.0	63.0	8.0	13.1
	71	石匙	安山岩	包含層	(47.0)	18.0	7.0	7.0
13	72	石錐	黒曜石（姫島産）	包含層	(11.0)	(13.0)	3.0	0.4
	73	石錐	黒曜石（姫島産）	包含層	17.0	18.0	3.0	0.7
	74	石錐	黒曜石（姫島産）	包含層	16.5	16.0	4.5	1.2
	75	使用痕剥片	黒曜石（姫島産）	包含層	30.0	38.0	4.5	5.6
	76	使用痕剥片	黒曜石（姫島産）	包含層	19.0	14.5	3.0	0.8
	77	使用痕剥片	黒曜石（姫島産）	包含層	25.0	16.0	4.5	1.2
	78	使用痕剥片	チャート	包含層	29.0	34.0	9.0	8.6
	79	細石核	安山岩	土坑１	27.0	20.0	18.0	11.7
	80	細石刃	黒曜石	包含層	16.0	6.0	2.0	0.1
	81	磨製石斧	安山岩	包含層	87.0	47.0	24.0	146.9
	82	磨製石斧	安山岩	包含層	89.0	44.0	(8.0)	31.0
	83	凹石		包含層	76.5	103.5	50.4	534.8
14	84	凹石		包含層	79.5	117.0	58.5	635.6
	85	凹石	花崗岩	包含層	100.5	103.5	60.0	647.0
	86	磨石	凝灰岩	包含層	106.5	120.0	46.5	627.8
	87	磨石		包含層	97.5	106.5	48.0	825.6
	88	石包丁	片岩	遺構検出時	(51.0)	(55.0)	6.0	817.0

ある。副葬品はすべて正立の状態でおかれていた。土師器４点（遺物番号１～４）は被葬者の左脇に内面を上にして、紡錘車は軸鉤先端部を足位側に向けた状態で出土した。遺物は底面より５cmほど浮いた状態で出土した。そのほかは右脇にあたる部分に置かれていた。また、足元側からは壁体の破片が出土した。土坑内での人骨や炭などの出土もない。

出土遺物（図版９・11、第17・18図）

１～３は土師器の小皿。口径8.4～8.6cm、底径4.6～6.4cm、器高1.1～1.5cmを測る。糸切り。４は土師器の杯。小さな底部から体部が直線的に大きく開くものである。口径15.4cm、底径5.8cm、器高4.2cm。糸切り。５は輪花の白磁皿。器壁が薄く丁寧なつくりである。釉は乳白色。畳付は露胎となる。６は青白磁の小壺。蓋の形状は扁平で、上面に鏑を持つ連弁を型押ししている。口径3.8cm、最大径5.8cm、器高1.0cmを測る。畳付と内面は露胎となる。身は最大径が中位よりやや上にあり、口縁

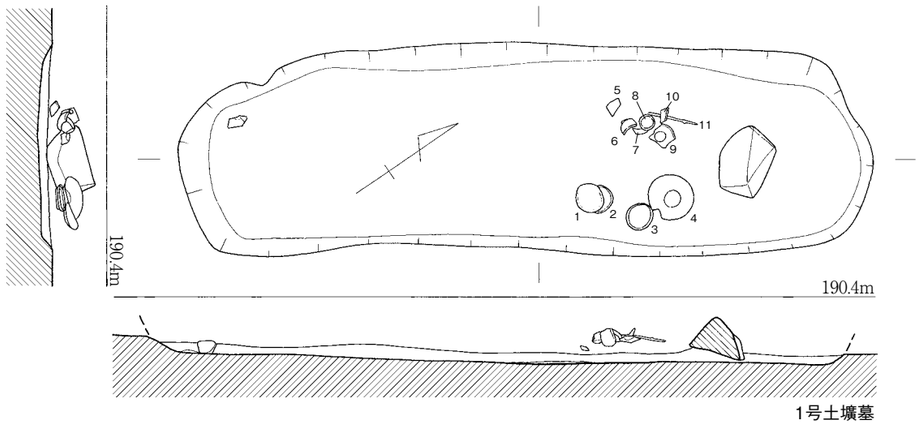


第15図　1号掘立柱建物跡実測図（1/60）

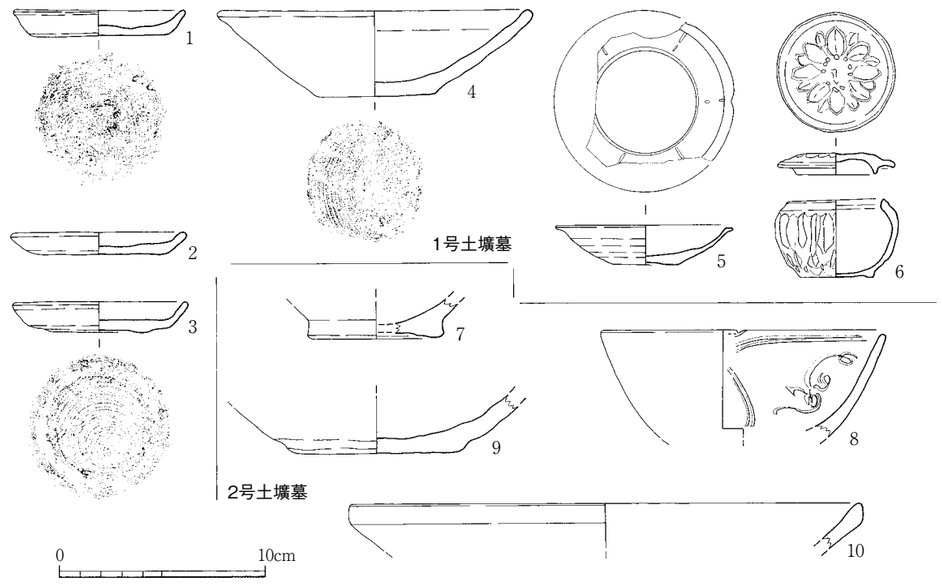
部は短く立ち上がる。体部外面には鏑連弁文を配置している。釉は灰白色で、口縁部は露胎となる。第18図は鉄製の紡錘車。鉤の部分をわずかに欠損する。軸棒は長さ15.9cm、径３㎜を測る。錘は径4.2で、鉤とは反対側に向かってわずかに笠形になっている。

２号土壙墓（図版５、第16図）

Ａ地点南域で検出した土壙墓である。主軸はＮ－84°－Ｗにあり、ほぼ東西方向を向く土壙墓で、丘陵主軸とほぼ平行である。埋土は１号土壙墓と同じく灰褐色砂質土の埋土であった。平面形は隅



第16図　1・2号土壙墓実測図（1/20）



第17図　1･2号土壙墓出土土器実測図（1/3）

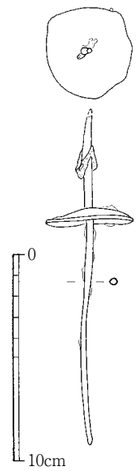
丸方形に近い長円形で、規模は、主軸長146cm、幅68cmで、最大幅は頭位とみられる西側がやや広くなる。深さは80cmで、底面は中央が窪む。埋土は締まりのない黒灰色砂質土が主体で、中位に花崗岩角礫や安山岩の川原石が層をなしている。これらの石は西が高く東へ向かって傾斜している。底面には、ほぼ全面に炭化層が拡がり、一部には炭化材が遺存していた。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。

この遺構は、底面の形状からすると木棺を据えるには不安定ではあるが、底面の炭化材の存在や埋没土の状況から木棺墓の可能性があり、中層の石材は木棺蓋上に墓標として集積されていた角礫が、木棺腐敗後に棺内へ落下したものとみられる。

墓壙内上層からは土師器砕片の遺物が僅かに出土したが、坑内からの副葬品の出土はなかった。

出土遺物（図版10、第17図）

７は厚い玉縁の白磁碗の底部。釉は灰色で、底部は露胎となる。８は竜泉窯系の輪花青磁碗。内面に草花文を片彫りする。釉は緑灰色。９・10は須恵質土器の鉢。９の内面は使用により摩滅している。10は口縁部で断面は三角形状に肥厚する。

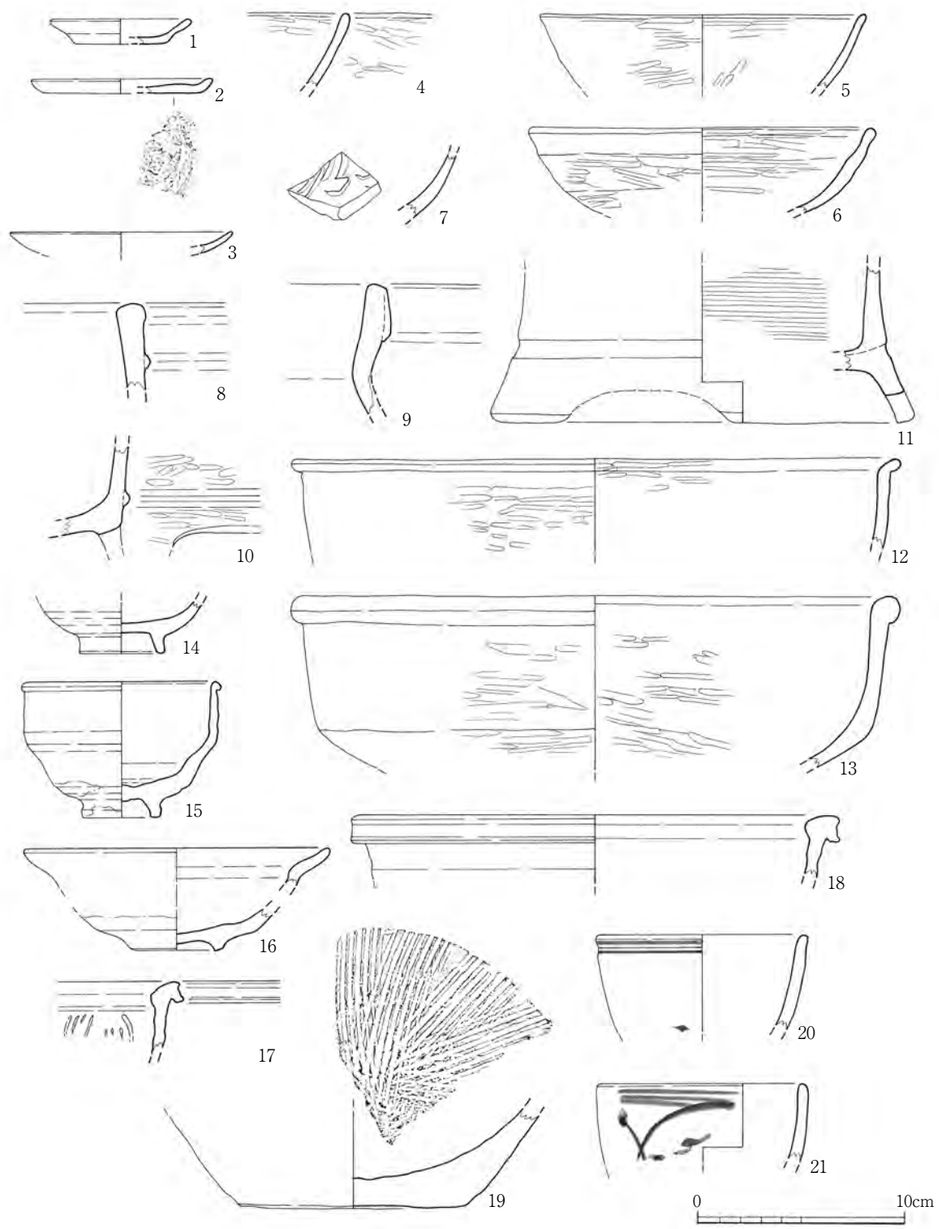


第18図　１号土壙墓出土紡錘車実測図（1/3）

その他の出土遺物（図版10、第19図）

１～３は土師器小皿。１は底径が小さく、大きく開くタイプである。口径７cm、底径4.6cm、器高1.2cm。糸切り。２は口径9.0cm、底径8.0cm、器高0.8cmを測る。糸切り。ともに底部内面はナデ調整。４～６は瓦器椀。５は口径16.1cm、６は口径17.0cm。調整は内外面ともミガキ。８～13は瓦質土器。８～10・11は火鉢。

８は口縁端部に向かって器壁の厚みを増す。口縁下に断面蒲鉾形の突帯をまわしている。10は底部から脚部にかけての破片。調整は外面がミガキ、内面は横方向のナデ。９は甕で、外反する口縁部は折り返すかもしくは粘土帯を貼付して肥厚させている。11はハ字形に踏ん張った脚部の三方に弧状の透かしを入れる。調整は外面がミガキ､内面は横方向のハケ。12と13は鍋。12は口縁部が外反し、端部をまるく収める。調整は内外面ともミガキ。13の口縁端部は丸く肥厚させる。調整は内外面と



第19図　中世以降の出土土器・陶器・染付実側図（1/3）

もヨコ方向のミガキ。復元口径30㎝。14は陶器碗。やや踏ん張った脚部に丸みを帯びた体部となるもの。釉薬は淡黄褐色で高台畳付は露胎となる。15も碗。口縁端部はまるく肥厚させる。16は陶器の高台皿。体は浅く、中位で屈曲して大きく開く。内面の見込みに目跡が二箇所に残る。灰色味を帯びた黄緑色の釉薬を施す。高台畳付は露胎となる。部分的に細かい貫入が入る。19は摺鉢。内面に櫛目の一部が残る。20・21は染付碗。20は口縁端部に二本の界線をまわす。21は口縁部下に三条の界線をまわし、体部には草花文を呉須で描く。

５）近世以降の遺構と遺物

炭窯

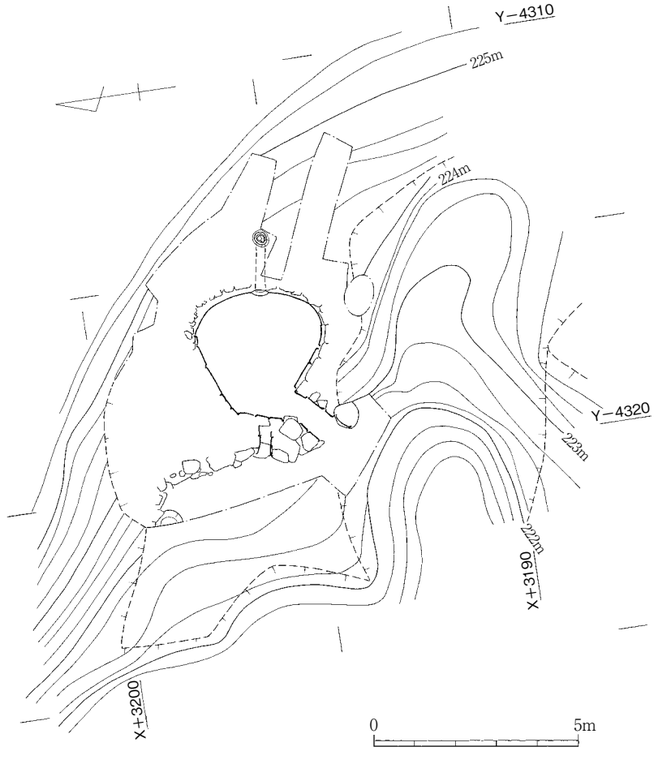
Ⅰ区B地点の北東50ｍの急傾斜地の谷頭近くのC地点で確認した。標高は224ｍほどである。

炭窯は南西に開ける谷の斜面部を切り盛り整地して築かれている。確認時、窯の内部は１/３ほどが埋没した状況で、堆積土を除去したが遺物の出土はなかった。

窯本体は略杓文字形で､南西部分に素材と炭の搬出入用の通路がある。本体部分の前面に幅６ｍ、奥行き３ｍほどの平坦部が設えられている。

焼成部は長さ、最大幅とも3.0ｍ、高さは1.5ｍを測る。焼成部の下半は最大で壁高の半分を超える高さの腰石を据え、その上に長さ30～40㎝ほどの大きさの石を焚口側から奥に向かって傾斜するように目地を斜めにして積み上げ、最後に奥壁側の大きな腰石の上部に、一辺15㎝ほどの小ぶりの石を比較的乱雑に積んで壁を構築する。その後、特に大きめの石材周辺に生じた隙間に粘土を貼って仕上げる。床面・壁面とも使用による硬化・黒化が認められる。また、床面には湿気抜きのための竹が埋め込まれていた。

煙道は２箇所ある。奥壁中央部のものは床面から３㎝ほど下がったレベルからおよそ45度の傾斜で立ち上げている。煙道には掘方が伴い、いったん掘削した後に煙道に合わせて角礫の面を揃えつつ粘土を貼りながら積み上げている。特に中位よりも上部はコークス状に硬化していた。煙出し部分は径20㎝ほどの円礫で蓋がされていたが、その際から素焼きの土管を転用した煙突が出土した。煙突は土管状で、上端にはめ込みの段を有している。口径25.2㎝、長さ68.0



第20図　炭窯周辺地形図（1/150）

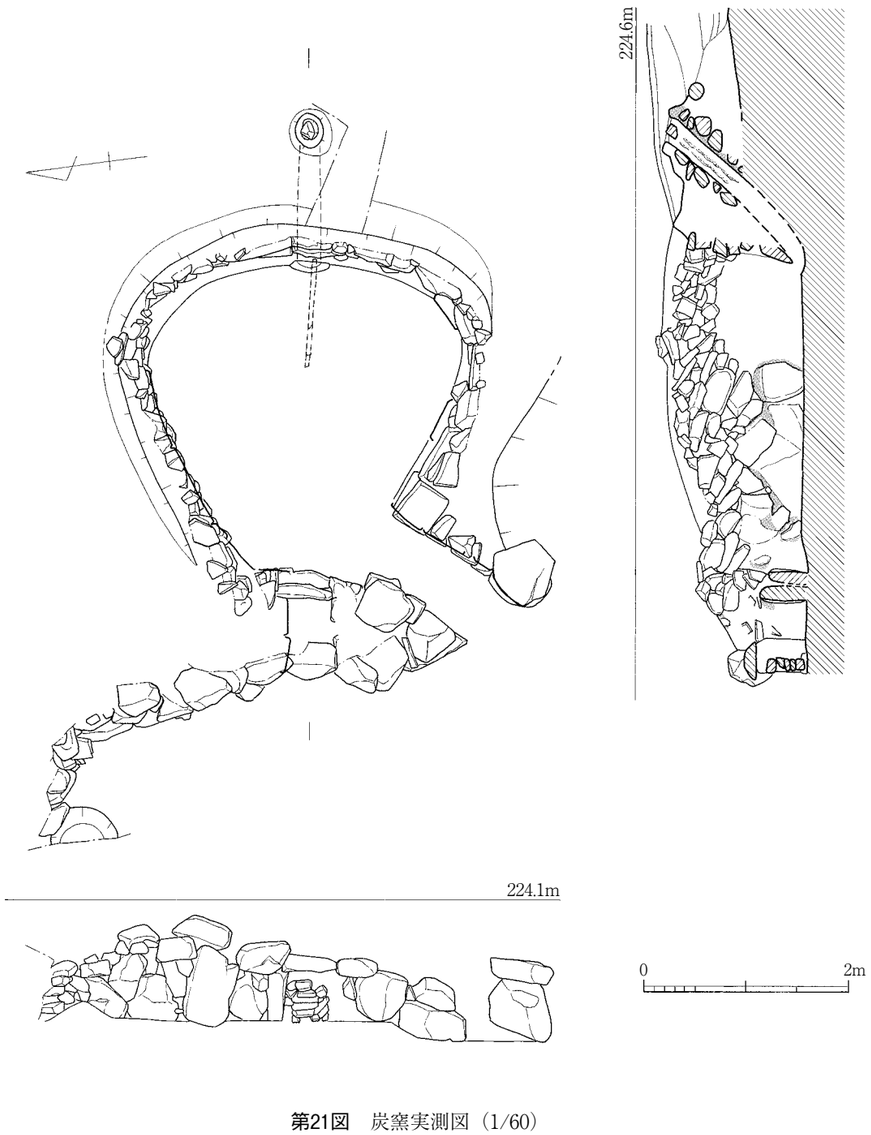
cmを測る。内面の口縁部寄りと下端寄りは煤がコークス状になり器壁に融着していた。もうひとつの煙出しは左側壁の最上部、ちょうど炭窯本体が最大幅となる位置の壁面にある。

素材を搬出入するための通路は本体右側壁の焚口寄りに開口し、幅50cm、長さ1.7mを測る。

焚口は柱状の袖石によって形成された幅40cm、長さ110cmの独立した空間で、燃焼部との境に高さ40cmの板石を立てて熱効率を高めている。焚口は、検出時は長さ10～20cmの板石により、ほぼ密閉された状態であった。

前面の平坦部には窯体の崩壊を防ぐための二、三段の石積みが伴っている。

なお、本体の周囲には湿気抜きの周溝が巡っている。



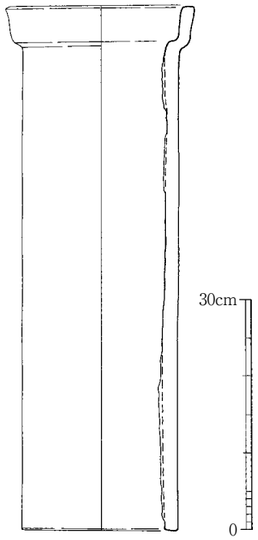
第21図　炭窯実測図（1/60）

6）小結

竹の内遺跡Ⅰ区においては、縄文時代、中世、昭和期の遺構を確認した。

縄文時代の遺構として認識できたものは、淡黄灰色砂礫土上面で確認した集石遺構のみである。集石遺構は焼けた面の確認ができなかったものの炉跡の可能性が高く、この周囲に散在する礫も含めた空間を生活痕跡として捉えることができるものと思われる。また調査区の西側、祓川寄りには部分的にアカホヤの二次堆積層が遺存していたためグリッドを組んで掘り下げたが、堆積も薄く、層中にわずかに縄文土器の小片と石器類を包含している状況であった。このように中世の遺構面の先端（祓川寄り）にアカホヤ火山灰の二次堆積層が遺存する状況は伊良原地区で普遍的にみられる。

出土土器については、包含層から早期・前期を中心とする遺物が出土したが、明確に文化層として捉えることはできなかった。石器に関しては、包含層に含まれる土器に押型文もわずかに含まれるものの、大半が塞ノ神式～轟Ｂ式に限られていることから、他の時期の混入があったとしても概ね早期末から前期にかけての一群として捉えてよいものと考えられる。



第22図　炭窯出土煙突実測図（1/8）

第23図下段は竹の内遺跡Ⅰ区から出土した石器のうち、石斧と磨石を除いた使用石材の比率を示したものである。そこでは姫島産黒曜石の割合が53％と半数を超え、西北九州産の黒曜石の13％に比べて著しく高い状況であった。上伊良原榎遺跡の報告では使用石材の時期別の傾向が示されており、押型文の時期のⅠ区第４文化層では姫島産黒曜石が13％、その他の産地は52％を占めている。これに対し、前期～後期にかけてのⅡ区第２文化層では姫島産黒曜石が55％、その他の産地は14％と使用石材が逆転し、竹の内遺跡Ⅰ区とほぼ同じような状況となる（第23図上段・中段。データは報告書より転載）。こうした石材の変化の背景には原産地の産出状況や流通体系に変化が生じたことが要因であったと想定される。竹の内遺跡のデータは一括資料を集約した良好なデータではないものの、いずれにしても姫島産石材の多用といった使用石材の転換期が早期末から前期段階に求められることを追認する様相を示しているといえるだろう。

中世では２間×３間の南北棟掘立柱建物跡１棟を検出した。この建物は祓川に面するように棟をとっている。出土遺物から明確な時期は分からないが、周辺で確認されている同種の建物跡を参考にすれば中世に位置付けて問題ないだろう。規模は平均的なものである。またⅠ区では、土壙墓２基を確認した。このうち１号土壙墓から出土した遺物のセットには鉄製の紡錘車が含まれており、被葬者は女性とみられる。

このほかに炭窯を確認した。煙突として転用された土管と炭窯の形態からみると昭和期に属するものとみられる。

さて、伊良原ダム建設事業にかかる報告は本年度をもって完了する。これまでの一連の調査では、縄文時代・鎌倉時代、江戸時代を中心とする遺構が主として確認された。ここでは特に下伊良原竹の内遺跡で比較的多く出土した縄文時代の早期・前期の様相に絞って簡単に記しておきたい。

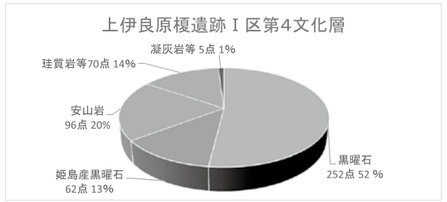
当該期の生活痕跡は、祓川上流から下流に向けて、上伊良原高木神社遺跡、上伊良原榎遺跡、下

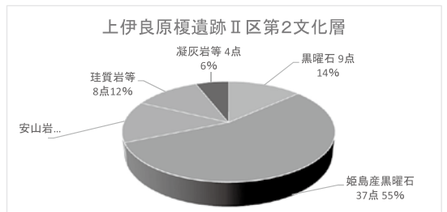
伊良原フラノ遺跡、下伊良原下地ヶ原遺跡、下伊良原竹の内遺跡、下伊良原高木神社遺跡、下伊良原東向原遺跡、下伊良原塚本遺跡、下伊良原原田ノ谷遺跡、上高屋台ノ原遺跡の各遺跡で確認されている。このうち上伊良原榎遺跡では、早期の押型文の時期の竪穴住居跡が４軒検出された。平面形状は円形ないしは不整円形で、規模はおおよそ2.0～2.7ｍである。このほか東向川原遺跡でも同時期の土坑が検出され、稲荷山式期の良好な一括資料を得ることができた。上伊良原榎遺跡・下伊良原竹の内遺跡・下伊良原高木神社遺跡では炉跡とみられる集石遺構が確認され、いずれの生活痕跡も祓川に面した段丘上の緩斜面に営まれている。また、下伊良原原田ノ谷遺跡では鬼界アカホヤ火山灰（約7,300年前）由来の純堆積層（橙色味の強い黄灰色土）が遺存し、その上層から轟Ｂ式の土器が出土している。アカホヤの二次堆積層は各遺跡でみられ遺物を包含しているが、純堆積層はほかに下伊良原高木神社遺跡で確認されているものの土器との関係は把握できる状況にはなかった。

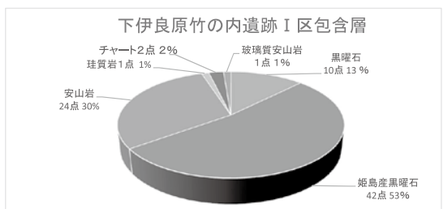
出土土器については層位的に前後関係が把握できる状況にはないが、以下、そのバリエーションについて略述しておく（第24図）。

Ⅰ類：刺突文土器。柏原式など。上伊良原榎遺跡で主体を占める形式の土器で、すでに同遺跡の調査者の吉田東明氏が特徴をまとめている（吉田2011）。それによれば僅かな例外はあるものの、口縁部が外反する、口縁下に一列の刺突文を２㎝以上の間隔で配する、施文深度が浅い、器面調整は内外面とも粗い二枚貝条痕、などの特徴が示されている。第24図２などはまさにその典型例である一方、１の刺突文は直立する口縁下におおむね１㎝間隔で配し、また施文深度は貫通手前で２ミリ程度の厚みしか残さないように穿たれているため、内面の器壁が瘤状に盛り上がっている。こうした例は筑紫野市原遺跡（水ノ江1994）や福岡市柏原遺跡（刺突文土器Ⅱ･山崎1983）にみられる。本破片では瘤状突起の有無が確認できないことや、器形に大きな差異がある点がⅠ類に置くことの不安材料として残るものの、内面の瘤状の盛り上がりや、内外面とも丁寧な横方向のナデを施す点などで上記２遺跡の資料と共通する。今後、時期的・系譜的な位置付けを再検討する必要もあるだろう。２は伊良原地区に通有のタイプで､外反する口縁下に間隔が広く、浅い刺突文を棒状工具によって施す。また貝殻条痕により調整された器面の外面に瘤状の粘土粒を貼付している。Ⅰ類は早期初頭に位置づけられる。

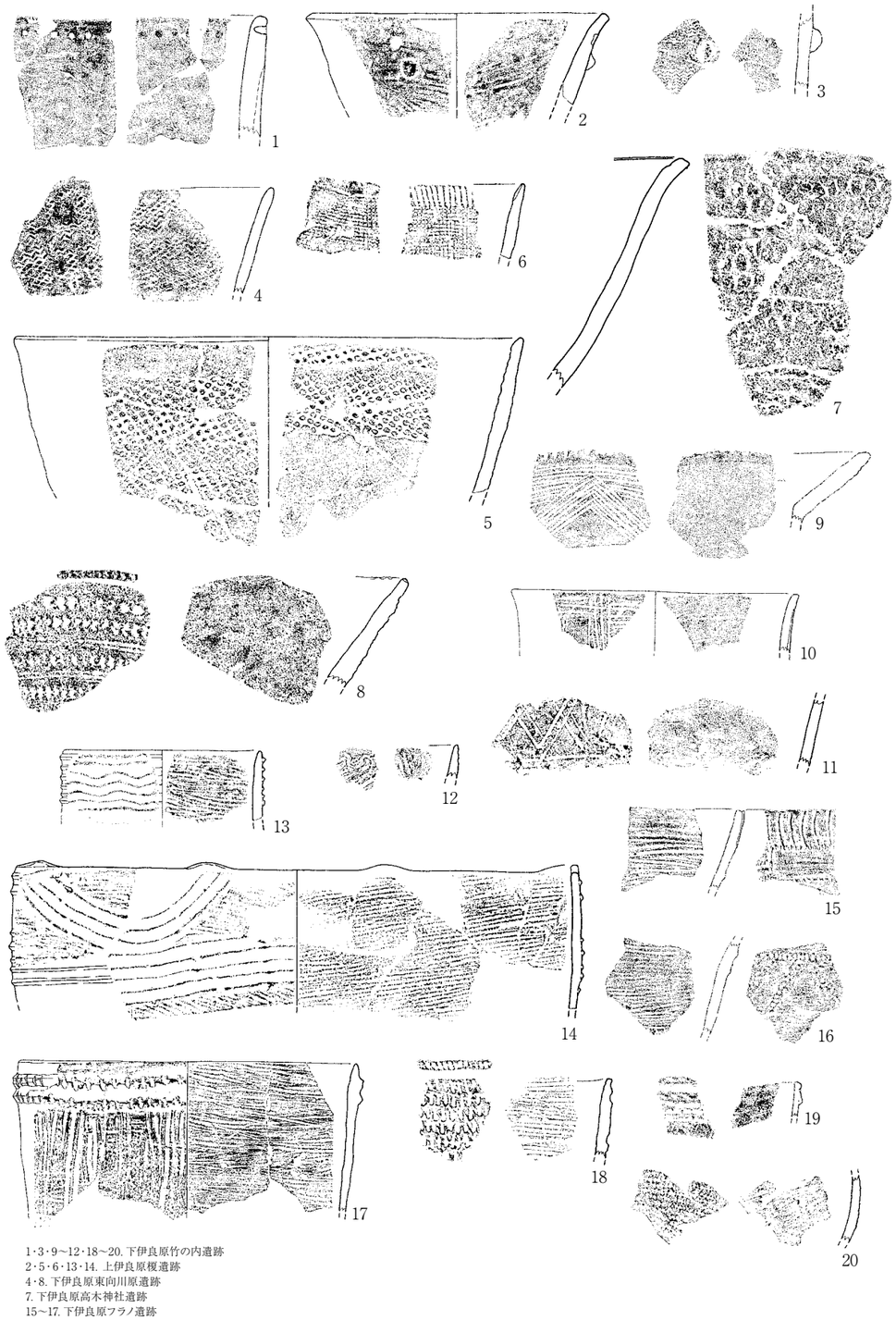
Ⅱ類：押型文土器。施文方法と時期差によりいくつかのバリエーションがある。４は内外面とも細かい横走山形文を施文している。既報告によれば中四国の早期の標識である黄島式とされている（小澤2017）が、本資料は東九州地域に普遍的な稲荷山式に該当させてもよいものと思われる。横走の細かい楕円文がある５は内面の口縁下に無文帯を持ち、４と変わらない時期に比定できる。内外面に格子の施文を行う６は内面の口縁下に原体条痕を伴う早水台式。７は口縁部が大き







第23図　石器の出土傾向



1･3･9～12･18～20. 下伊良原竹の内遺跡
2･5･6･13･14. 上伊良原榎遺跡
4･8. 下伊良原東向川原遺跡
7. 下伊良原高木神社遺跡
15～17. 下伊良原フラノ遺跡

第24図　伊良原地区出土の縄文早期・前期土器（1/4）

く外反し縦走する大型の楕円文を施すもので、時期が下る田村式。内面はナデ調整。Ⅱ類は早期中葉から前葉。

Ⅲ類：８は大きく開く口縁下に、二枚貝の腹縁による刺突と二条１セットの沈線を巡らせる。内面はナデ調整。口縁端部にも刻み状の押圧が密に並ぶ。９も８と同じく口縁端部に刻み状の押圧を行っていて、外面は７条１セットの沈線を巡らせて同じ７条１セットの単位の山形文と組み合わせている。調整は内外面とも丁寧になでている。９は平栫式にも同様の文様パターンはあるが、いずれも大きく開く口縁に円筒形の体部が特徴的な塞ノ神Ｂ式の範疇で、早期後葉に位置づけられる。

Ⅳ類：内外面ともに丁寧なナデ調整を行い、かつ直線的な沈線による施文を行う10や、２条１単位の沈線により斜格子文を描く11がある。塞ノ神Ｂ式に特徴的な貝殻刺突文は施されておらず、また傾きに不安が残るものの、大分県日出町エゴノクチ遺跡（高橋1993）などで出土している類似の土器が塞ノ神式の古い段階（塞ノ神Ⅰ式新段階）に位置付けられている（高橋1997）。第11図51など、貝殻条痕の調整ののちに崩れた粗雑な斜格子状の文様を描いたものは10の退化形式とみられ、塞ノ神Ｂ式の新段階に現れる。いずれにせよこれらの土器はアカホヤ火山灰降下以前の時期とみてよいだろう。

Ⅴ類：12は内外面とも貝殻条痕調整で、外面の口縁部下に棒状工具により波状の文様を描く。波状の沈線文の施文は平栫式にもみられるが、そうした例は内外面いずれもナデ調整が行われ、その点が本例と異なる。いずれにせよ押型文期以降の早期段階に収まるとみられる。

Ⅵ類：17は口縁部下に２条の刻目隆帯文を持つ西ノ薗式。調整は外面が粗い縦方向の条痕、内面は横方向の条痕である。下伊良原フラノ遺跡において２点が出土している。鹿児島県下堀遺跡で鬼界アカホヤ火山灰直下から出土した事例があり、轟Ａ式と轟Ｂ式の中間の時期に位置付けられる。

Ⅶ類：13・14は口縁部が直立し、外面に条痕によるミミズ腫れ状の隆起帯を施す。内面の調整は横方向の条痕である。前期初頭の轟Ｂ式。口縁部内面に垂下隆起帯を並べる15も轟Ｂ式の範疇としてよいだろう。

Ⅷ類：16のように口縁部と体部の屈曲部下に巻貝の先端による刺突文をめぐらせること、それが山形文と組み合うことは塞ノ神Ｂ式に比較的見られる特徴である。ただし隆起帯への施文から、轟Ｂ式の範疇で捉えておきたい。

Ⅸ類：18は外面の口縁部下に巻貝先端による刺突文を６列以上並べるもの。波状の口縁端部にも刻み目を密に施す。内面の調整は横方向の条痕である。口縁部に連続する刺突文を並べることは曽畑式に通有の施文手法であるが、通常は２列ないしは３列であり、本例のように６列以上の文様帯を形成するものは見当たらない。しかしながら､曽畑以前の時期に遡らせる積極的根拠もないため、轟Ｂ式期以降の前期の所産と考えておきたい。

Ⅹ類：口縁部外面に二列の刺突文をめぐらせるもの。口縁端部にも刻み目を入れる。

Ⅺ類：撚糸文。

以上、伊良原地区から出土した遺物のバリエーションを列挙した。Ⅰ類が主体的に出土した上伊良原榎遺跡をはじめとして、Ⅱ類を主体とする下伊良原向川原遺跡・下伊良原塚本遺跡・上高屋台ノ原遺跡、Ⅶ類を主体とする下伊良原竹の内遺跡・下伊良原高木神社遺跡と、伊良原地区全体としては早期から前期を通して一定量の遺物が出土していて、たとえばアカホヤ火山灰の降下による生活痕跡の断絶などの状況は、少なくとも編年のスケールの範囲内では認められない。また、生活痕跡の継続性という観点からするとⅡ類とⅢ類・Ⅳ類・Ⅴ類の中間土器群に位置付けられる平栫式にあたる資料が出土しておらず、この状況が地域性によるものか、そのまま時期的な空白期として捉えられるのかにわかに判断はできない。なお、上伊良原榎遺跡出土資料のC^{14}年代測定ではⅡ類が7815－7590年、Ⅶ類が3960－3760年となっている（遠部2017）。

【参考文献】

小澤佳憲　2017「下伊良原東向川原遺跡の調査報告」『伊良原Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第255集　九州歴史資料館
小林達雄編　2008『総覧 縄文土器』同刊行委員会
高橋信武　1993『宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書』大分県教育委員会
高橋信武　1997「平栫式土器と塞ノ神式土器の編年」『先史学・考古学論究Ⅱ』龍田考古会
遠部　慎　2017「上伊良原榎出土縄文土器の14Ｃ年代測定」『伊良原Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第256集　福岡県教育委員会
水ノ江和同　1994「縄文時代出土遺物」『原遺跡』福岡県文化財調査報告書第119集　福岡県教育委員会
水ノ江和同　2012『九州縄文文化の研究』雄山閣
山崎純男　1983『柏原遺跡群Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第90集　福岡市教育委員会
吉田東明　2011「小結」『伊良原Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第229集　福岡県教育委員会

Ⅱ区

１） 調査の概要

竹の内遺跡Ⅱ区は旧伊良原小学校の東側にあたる。遺跡の現況は杉林であったため、発掘調査は森林組合による樹木伐採が終わった平成24年９月４日より着手した。

まずは現場プレハブ用地と駐車場のためのヤード造成からはじめ、３日目から水田面の表土剥ぎを開始した。９月18日からは作業員を投入し、プレハブの設置や用水路の整備など遺跡周辺の環境整備にあたった。重機による掘削作業は９月21日から開始し、表土剥ぎの終わった78番地の水田から遺構検出作業に着手した。民家が建っていた77番は谷を埋めた場所で遺構が存在しないことから調査対象地から除外し、78番と79番を調査対象地とした。調査面積は1,780㎡である。

調査区北端は祓川に面した崖状の段落ちとなっている。崖面の下は祓川の旧氾濫源で、崖下の水田とは約５ｍの高低差がある。調査区の西隣は伊良原小学校校舎である。調査前の標高は、192.9ｍ～194.1ｍである。10月30日には２号土坑から完形縄文土器が出土した。そして10月31日までに遺構検出を終え、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。続いて12月４日からは縄文時代の包含層と下層遺構の有無確認を目的としてグリッドの設定と掘り下げを開始した。12月25日までには掘削作業と実測を終え、Ⅱ区のすべての作業を終了した。

２）基本層序（図版11－２、第26図）

竹の内遺跡Ⅱ区の調査前の現況は、水田と宅地であった。第26図Ａ～Ｅ１Ｇは調査区西壁の土層図で、竹の内遺跡Ⅱ区の標準的な土層である。

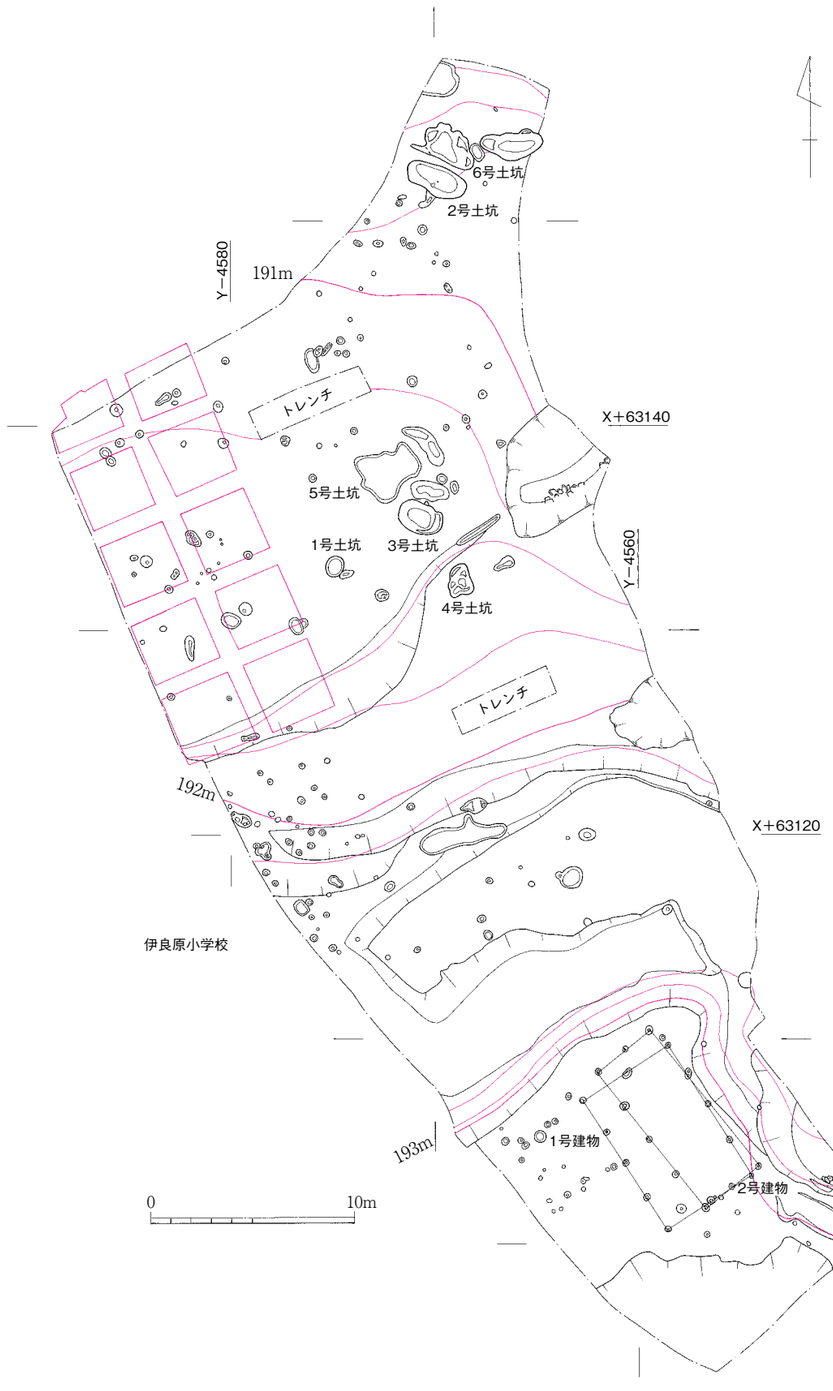
それによると、大別して、Ⅰ層として、地表面には水田の耕作土と床土及びその下のⅡ層・Ⅲ層としてバイランドを含む黄灰色砂質土があり、このⅢ層を除去するとⅣ層とした黒灰色砂礫土が露出し、このⅣ層上面が中世の遺構検出面となる。また、上層の中世の遺構の調査中に、縄文土器や石器などが確認され、とくに丘陵先端の北端部において多く散見された。また、それらは、遺跡周辺で見られる花崗岩風化土には見られず､黄灰色土層に包含されていることが分かった。このため、調査区北端の79番地の旧水田に３ｍ方眼のグリッドを設定し、下層遺構の検出にあたった（第25・26図）。Ⅳ層以下の層序はⅤ層としてバイランドを含む暗茶灰色粗砂質土、Ⅵ層として淡黒灰色細砂質土のシルト層となる。このシルト層は基盤層をなすものである。

グリッドではこのⅥ層上面で遺構検出を行い、丘陵先端部にあたるＡ１・Ａ２・Ｂ２グリッドにてピットなどを検出したが明確な遺構はなかった。遺物の出土もなかった。

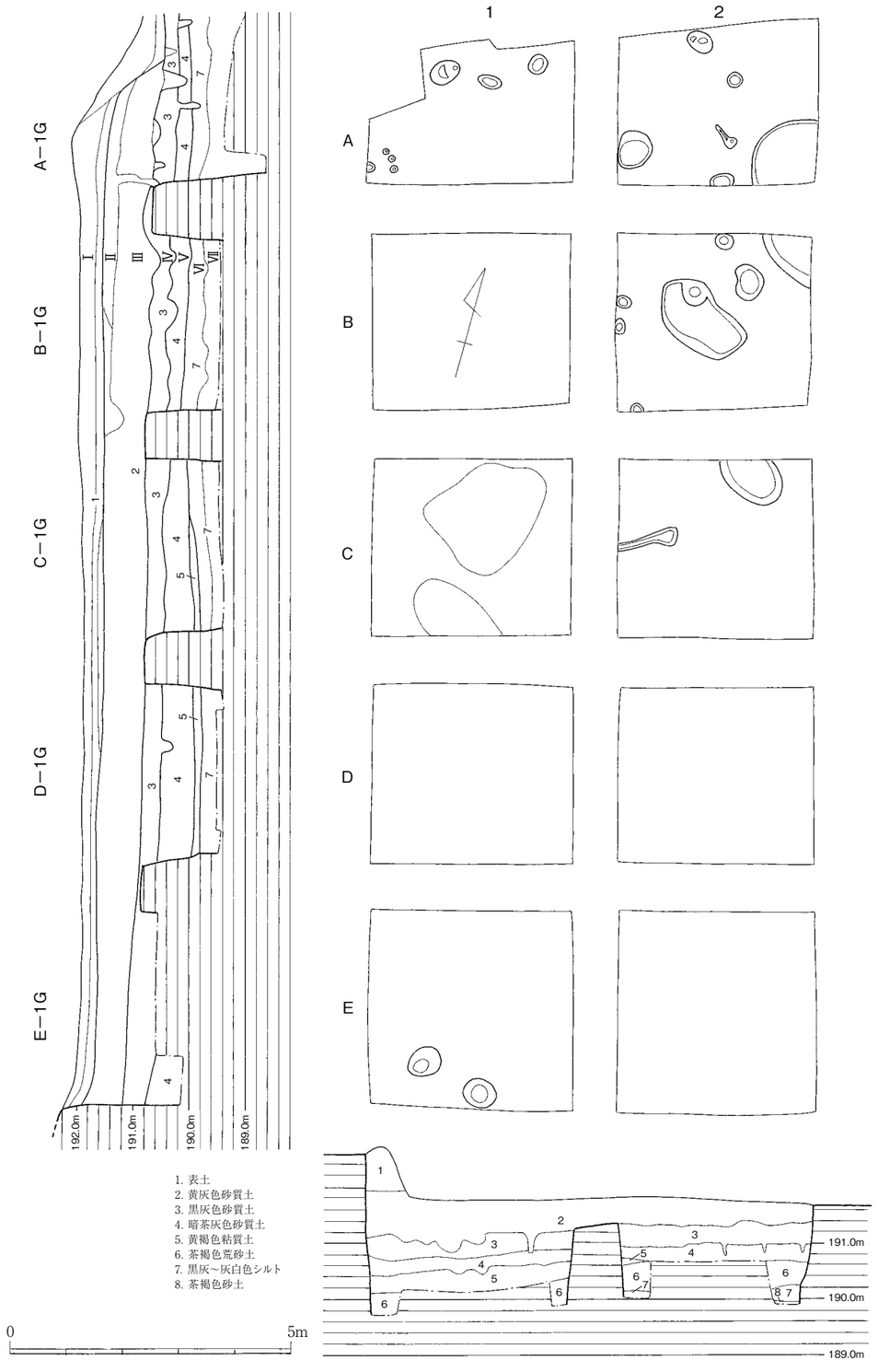
グリッド内上層の遺構検出面は黒灰色土面で、その標高はＢ－２グリッドで190.45mである。この面において暗黄灰色や暗茶褐色土埋土のピットをわずかに検出したが、確実なピットはＡ２グリッドで検出した黒茶灰色覆土のみである。Ｂ－２グリッドからも土器・石鏃が出土した。またグリッド内の標高はＢ－１グリッドで190.35mである。

３）縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、祓川を望む調査区北端の丘陵先端部に集中している。この個所はいわゆるアカホヤ火山灰の二次堆積と思われる黄灰色土の遺物包含層が堆積し、その下部の遺構面から６基の土坑が検出されたものの、住居跡など性格が特定できる遺構は確認できなかった。なお、出土した



第25図　Ⅱ区遺構配置図（1/300）



第26図　グリッド配置・土層実測図（1/100）

遺物は１点ずつ１/100平板に出土位置・レベルを記録しながら取り上げを行った。

土坑

１号土坑（第27図）

１号土坑は、調査区中央の中段西側で検出した。平面形は楕円形で長軸を東西方向にとる。土坑の規模は、長軸110cm、短軸93cmで、深さは33cmで、底面は西側が若干くぼむ。坑内の堆積状況は、上層が黄灰白色土、下層が黄茶色土の堆積で、上層からは縄文土器片や小石が少量出土した。

出土遺物（図版14、第29図）

１は表裏に条痕が残る鉢の破片。

２号土坑（第27図）

２号土坑は、調査区の北端の丘陵先端部で検出した長楕円形の土坑である。長軸は北東～南西方向にとり、丘陵主軸とは直交する。土坑の規模は、長軸297cm、短軸142cm、深さ34cmを測り、西壁は削平が著しい。南壁中央は別の柱穴により切られている。壁の立ち上がりは両壁とも緩く、底面はほぼ平坦でわずかに中央部が深くなっている。坑内堆積状況は単純で、軟らかくて緻密な黄灰色土の単純層で、坑内南壁寄り中央で縄文時代中期中葉の春日式土器１点が出土した。土器は、高さ19cm、口径18cmの完形品鉢が１点出土した。縄文土器は口縁部を下、底部を上にした斜めの状態で出土した。底面からは約10cmの位置である。また、底面中央には小石２個が貼りついていた。

土坑の性格については、土坑の規模や完形土器の出土から墓坑である可能性も考えられる。

出土遺物（図版14、第29図）

２は鉢でほぼ完形品である。体部は上げ底気味の底部から丸みをもって立ち上がり、中位で外側に屈曲しながら内湾して口縁部にいたる。口縁端部は肥厚し、端部上面と口縁部下に沈線状の文様を描く。口縁部は波状となる。外面の全面、くびれ部より上位の内面に煤が付着する。口径15.7cm、底径7.5cm、器高18.9cmを測る。

３号土坑（第27図）

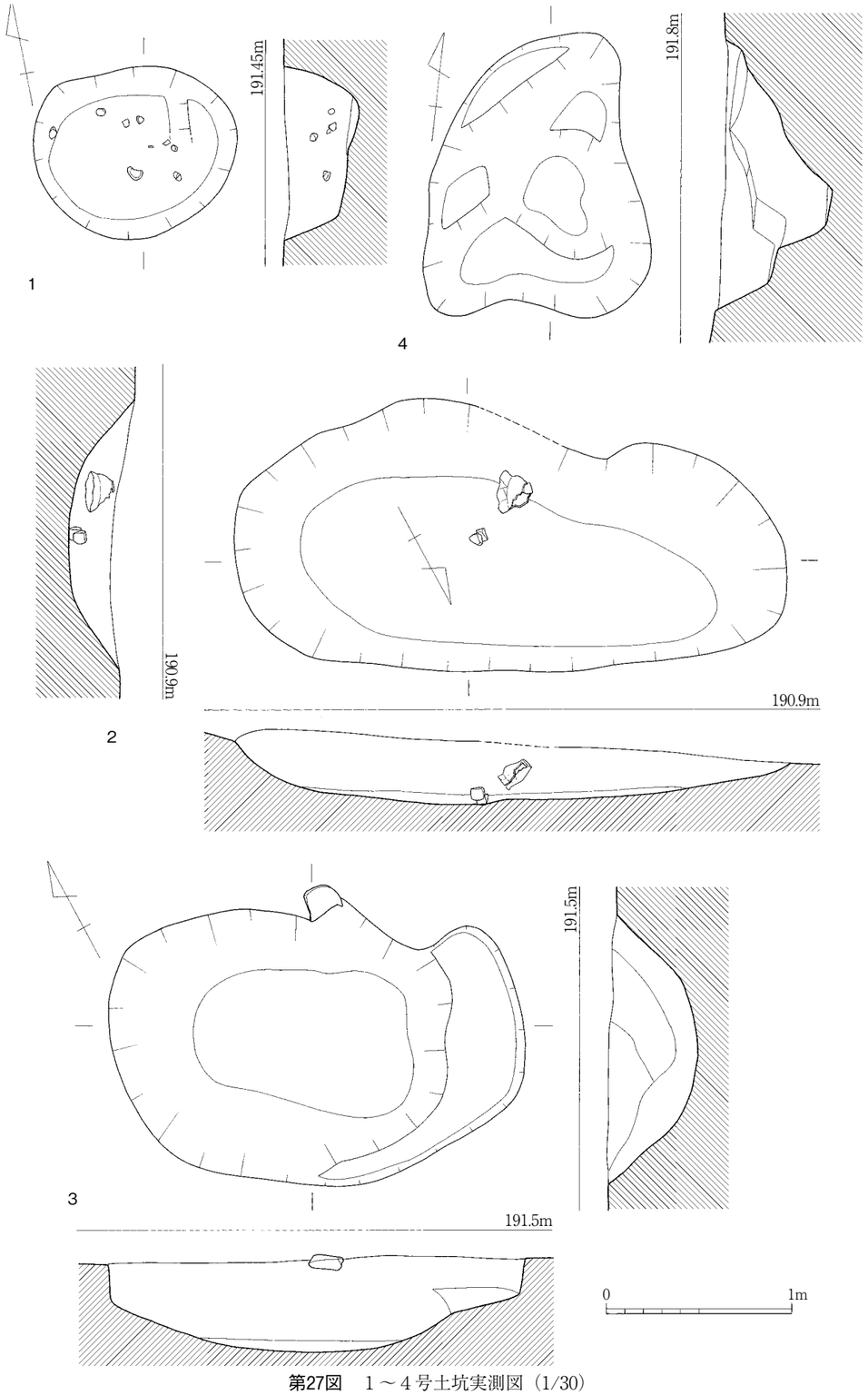
３号土坑は調査区中央で検出し、前述の１号土坑は南西８ｍの距離にある。土坑は長軸225cm、短軸145cm、深さ43cmの規模で、長軸は北西から南東方向にとり、丘陵主軸に対し斜交する。土坑の平面形は方形に近い楕円形で、東壁側は二段掘りで、周壁は緩く立ち上がり船底状となる。坑内堆積状況は、壁際から底面にかけての下層は黄灰色土が堆積し、上層は黄茶色土、中層は花崗岩バイランドを含む黄灰色土の堆積である。中層からは縄文土器片が出土した。

出土遺物（図版14、第29図）

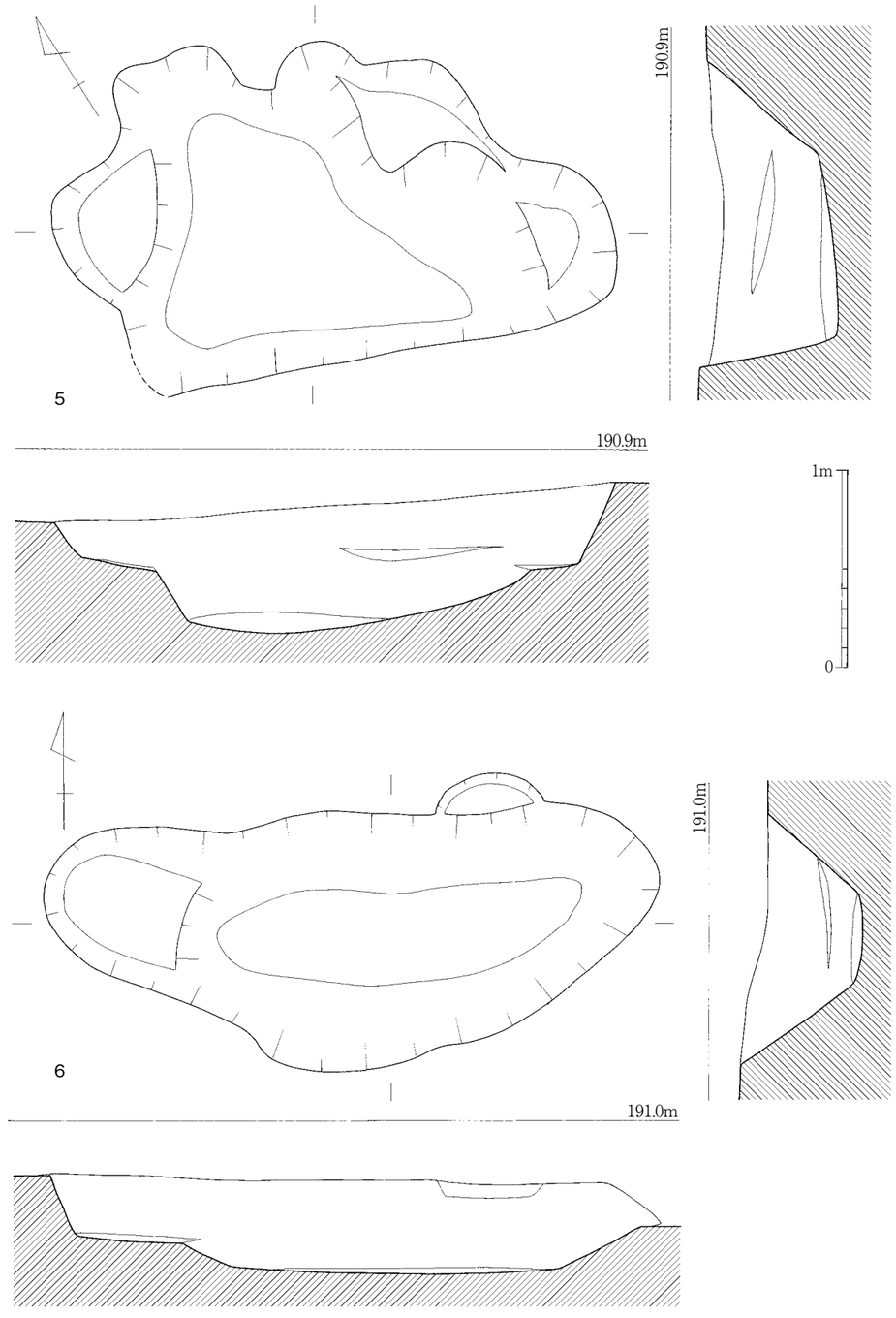
３・４は外面に二枚貝の腹縁によりミミズ状の突線をつくりだしたもの。内面はナデで平滑になっている。５は巻貝の先端により波状の文様を描いたもの。

４号土坑（第27図）

４号土坑は調査区１号土坑の西側で検出し、３号土坑とともに土坑が比較的まとまる箇所である。



第27図　1～4号土坑実測図（1/30）

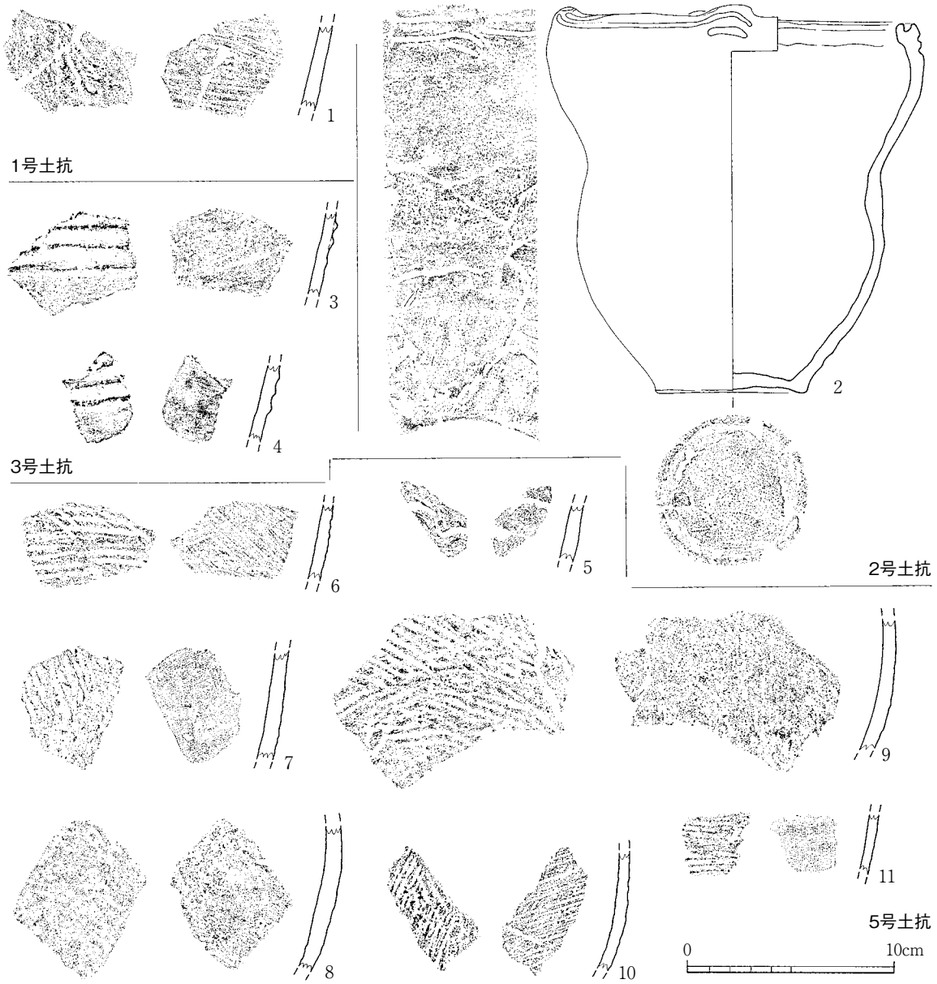


第28図　5・6号土坑実測図２（1/30）

土坑の平面形は不整楕円形で、長軸146cm、短軸112cm、深さ58cmの規模である。長軸の方向はほぼ南北にあり、丘陵方向に一致する。底面は不整形で、階段状に窪んでいる。坑内の堆積状況は、周壁際が軟質黄灰色～バイランド混茶灰土の、中層が黄灰白色土、上層が黄茶色土の堆積である。坑内からの遺物の出土はないが、堆積土は縄文土器を出土した１～３号土坑の堆積状況と似ている。

５号土坑（図版12、第28図）

５号土坑は調査区北端の２号土坑北２ｍの位置で検出した。５号土坑は南辺と東辺の一部を新しい遺構により切られているが、平面形はおおむね不整楕円形を呈する。土坑の規模は、長軸282cm、短軸153cm、深さ55cmの土坑で、長軸方向は北西～南東方向である。底面は長軸方向では船底となる。坑内の堆積状況は黄灰色土の単一の堆積で、縄文土器片や小石が出土した。



第29図　１～３・５号土坑出土縄文土器実測図（1/3）

出土遺物（図版14、第29図）

６～11は胴部の破片で、外面に条痕が残る。６・10は内面にも条痕を残すが、その他は平滑にナデている。

６号土坑（第28図）

６号土坑は、５号土坑の東辺に隣接し、東側は谷部により削平されている。平面形は長楕円形で、ほぼ東西方向に長軸がくる。土坑規模は、長軸310cm、短軸128cm、深さ47cmである。底面の西端は二段掘りとなるがほぼ平坦面である。坑内の上層は黄灰色土、下層は暗茶色土の堆積で、下層より安山岩製の石鏃が１点出土した。土器の出土はない。

その他調査区中央３号土坑北にて覆土が黒灰色土の不整形土坑が数個検出されたが、埋土の状況から、風倒木の跡と思われる。

縄文土器を出土する遺構や包含層の覆土はおおむね黄灰色～黄灰白色土層である。

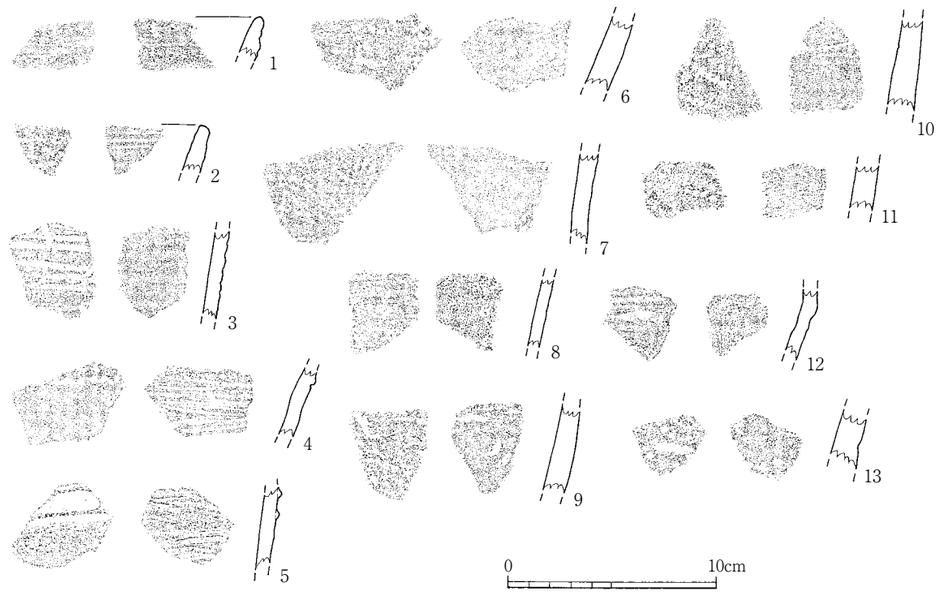
ピット・包含層等出土遺物

土器（図版14、第30図）

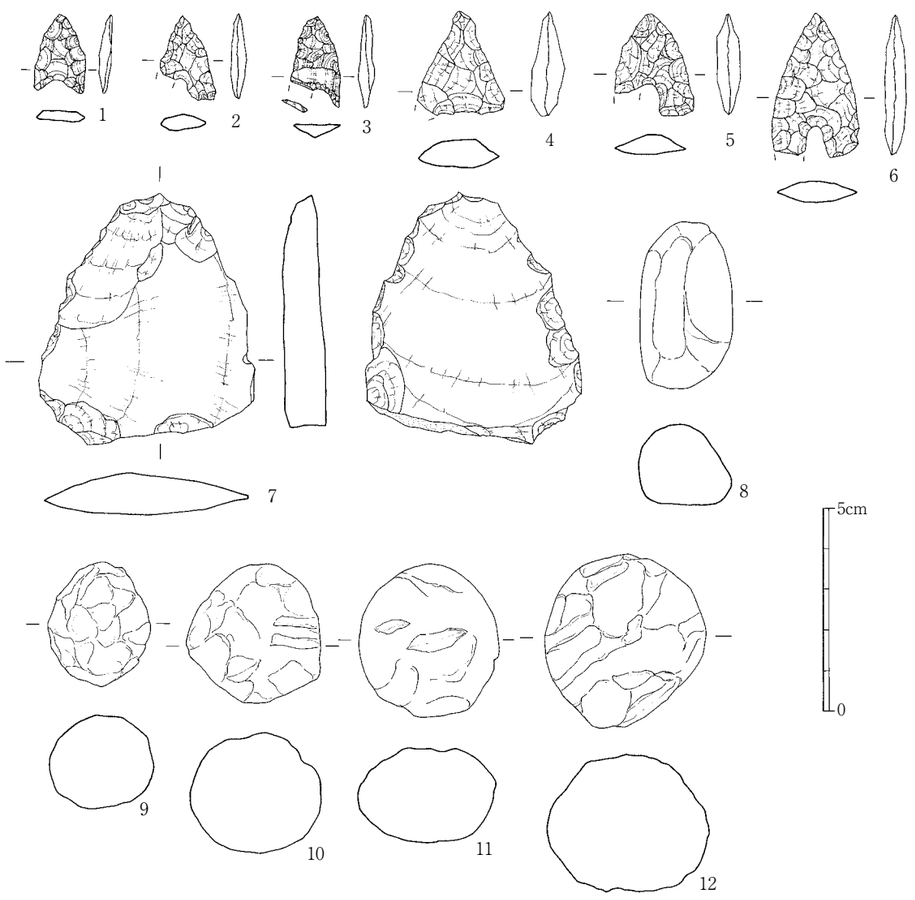
１・２は口縁部で内外面ともに条痕を残す。３・５は外面に二枚貝腹縁によるミミズ状の突線をつくりだしたもの。

石器（図版14、第31図）

１～６は石鏃。基部の抉りがない三角形の４や抉りの深い５・６などがある。７は大形の剥片の二側縁に使用によるものとみられる刃こぼれがある。一部には二次加工を施したものか。８～12は



第30図　ピット・層位等出土縄文土器実測図（1/3）



第31図　出土石器実測図（2/3）

第３表　下伊良原竹の内遺跡Ⅱ区石器計測表

図番号	番号	器種	石材	出土遺構	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（ｇ）
31	1	石鏃	黒曜石（姫島産）	遺構面表採	19.0	13.0	3.0	0.6
	2	石鏃	安山岩	上段遺構面	21.0	13.0	3.0	0.7
	3	石鏃	黒曜石（姫島産）	P25 上層	23.5	12.0	4.0	0.5
	4	石鏃	安山岩	壁面	26.0	21.0	7.0	2.7
	5	石鏃	安山岩	包含層	25.0	18.0	5.0	1.9
	6	石鏃	安山岩	包含層	35.0	20.0	5.0	3.1
	7	使用痕剥片	安山岩	西側石垣落ち込み中	58.0	53.0	10.0	40.9
	8	磨石	安山岩	包含層	41.0	23.0	20.0	24.3
	9	磨石	安山岩	西側周壁	30.0	26.0	22.0	17.5
	10	磨石	安山岩	包含層	34.0	32.0	29.0	35.1
	11	磨石	安山岩	包含層	38.0	34.0	23.0	36.2
	12	磨石	安山岩	落込み埋土中	42.0	39.0	33.0	61.8
36	1	台石	安山岩	土坑３東壁肩部	230.0	(166.0)	58.0	3398.0
	2	石臼	安山岩	土坑５中層	92.0	110.0	66.0	780.0

全面が平滑に磨れている。大きさは3.0～5.0cm。13は台石。表面の側縁に不整方向に細かく鋭利な工具による使用痕が残る。２は上臼の縁部。

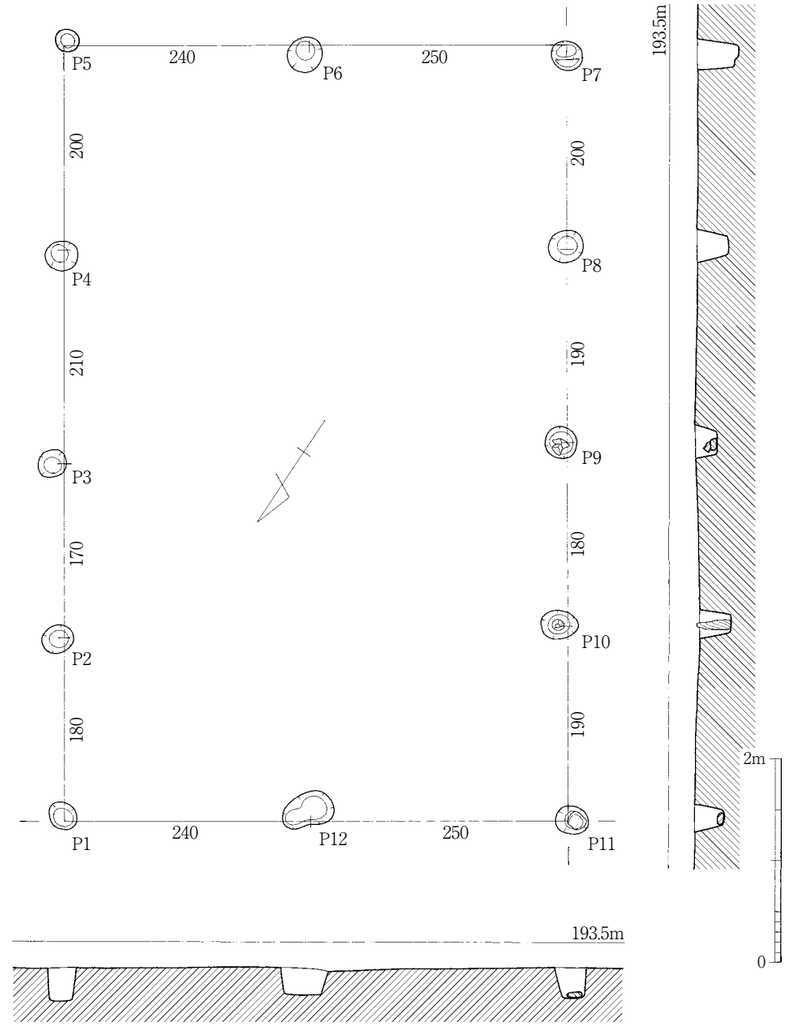
４）中世の遺構と遺物

検出された中世の遺構は、掘立柱建物跡２棟、石垣１基、溝などである。

掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（図版13、第32図）

調査区南端の標高193.3mの遺構面で掘立柱建物跡２棟を検出した。２棟は重複している。

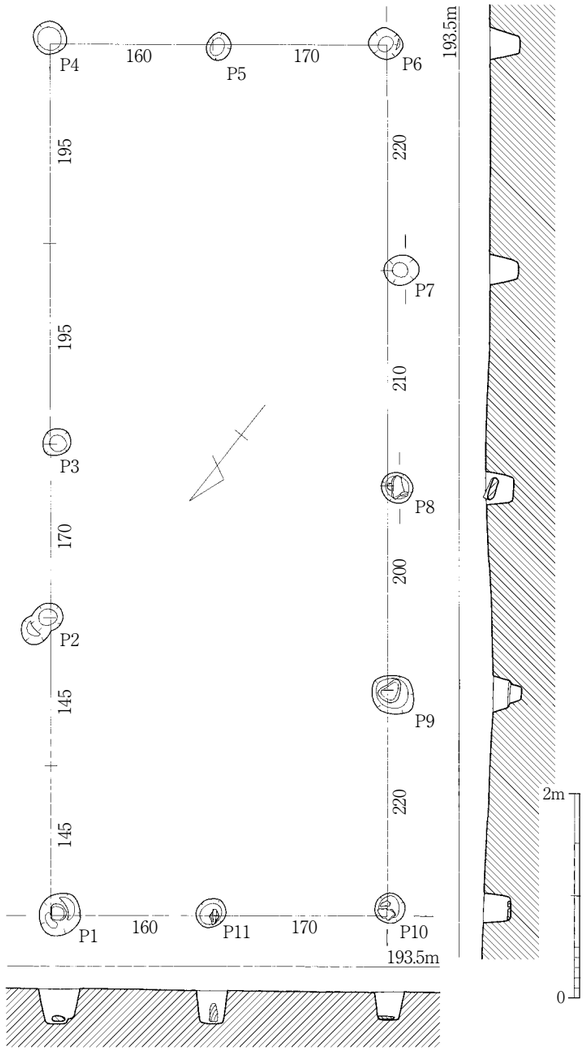


第32図　1号掘立柱建物跡実測図（1/60）

１号掘立柱建物は棟方向をＮ－34°－Ｗに取り、やや西に振れる。建物の規模は梁行２間4.9m×桁行４間7.6m、面積は37.2㎡を測る。柱掘方は直径20~30cmとほぼ均一で、深さは10~42cmとばらつきがある。柱間は170~250cmとばらつきがあり、均等ではない。また、柱穴には扁平な河原石を詰めて根石を据えるもの１、木柱痕を残すものが２個みられる。遺存の良いP－10柱穴でみると、残存長30cm、径10cmで、底面は平坦に調整されている。なお、建物に付属しない木柱が他に２個検出されたが、そのうちの１個の木柱の底面には抉りが入り、他の１個は斜に切り落とされていた。

２号掘立柱建物跡（第33図）

２号掘立柱建物は標高193.3mの遺構面にあり、棟方向はＮ－38°－Ｗと１号建物掘立柱建物同様にやや西に振れる。



第33図　２号掘立柱建物跡実測図（1/60）

建物の規模は梁行２間3.3m×桁行４間8.5mで、面積28㎡を測る。柱穴掘方は直径25~49cm、深さは９~32cmとばらつきがあり、柱穴内には木柱を残したものや、根石を持つものなどがある。柱間は145~220cmと不等間隔である。

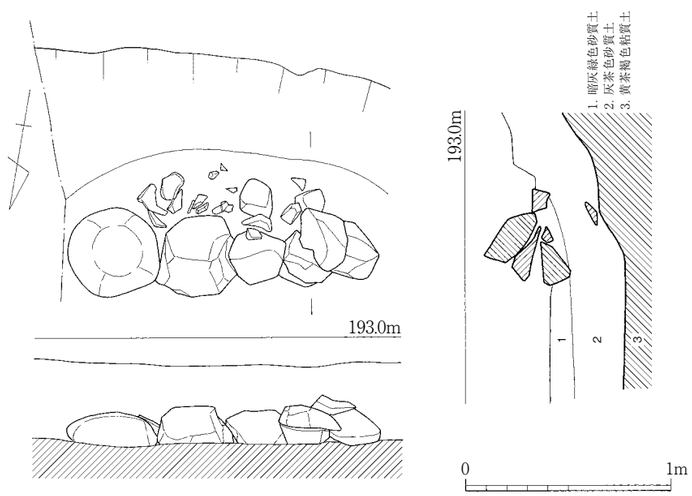
石垣遺構（図版13、第34図）

調査区南端、１・２号掘立柱建物跡の南東側４mの位置で検出された石垣で、建物跡の東を限る段落ちに沿って1.5m分残されている。石垣に用いられた25～45cm大の花崗岩は、５石が一列に並べられている。残存する石積みは３段で、その高さは42cmである。石列の背面には裏込めとしていくつかの石が埋め込まれている。

なお、調査区東周縁肩部で、近世の落込みが数カ所確認された。

出土遺物（図版14、第35図）

１～３は土師器の小皿。１は口径9.0cm、底径7.0cm、器高1.4cm。１・２は糸切り。４は土師器の高台杯。５は瓦器椀。調整は内外面ともミガキ。６は龍泉窯系青磁椀。灰色の胎に緑色釉薬を施す。外面には鎬連弁を片彫りする。７・８は瓦質土器の火鉢。７は内外面ともナデ調整、８は外面がミガキ調整、内面はナデ調整。９･10は染付。９は碗。白色の胎に透明釉を施す。外面には草花文と思われる文様を呉須で描く。10は高台皿。白色の胎に透明釉を施す。見込みにコンニャク印を押す。

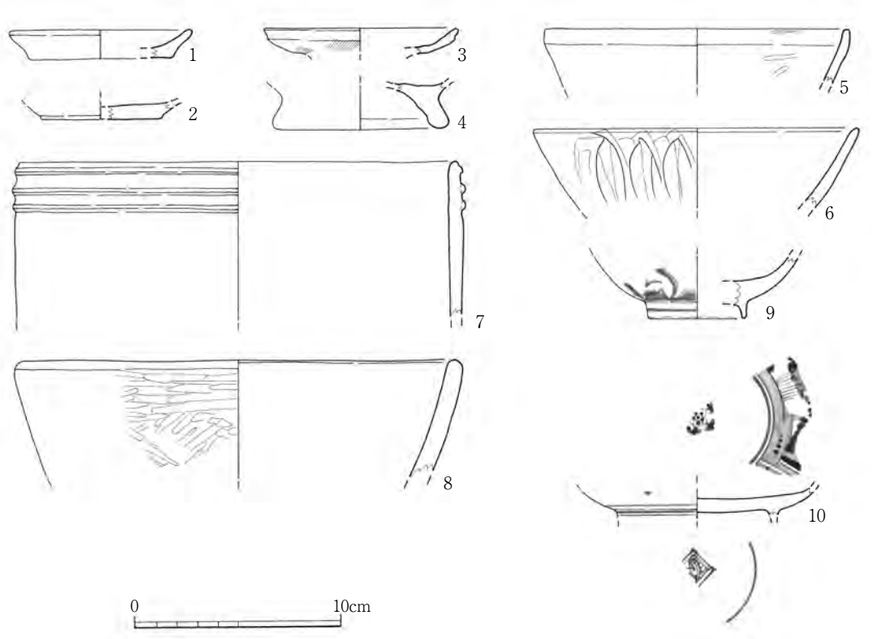


第34図　石垣実測図（1/30）

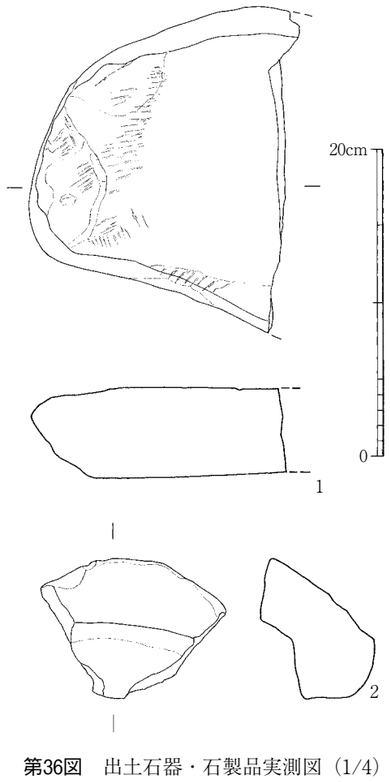
５）小結

竹の内遺跡Ⅱ区においては、縄文時代の包含層、中世、昭和期の遺構を確認した。

縄文時代では、６基の土坑を確認した。このうち２号土坑から出土した中期の完形の春日式深鉢が特筆される。遺構の性格については明確ではないものの、遺物の出土状況などから墓である可能性も考えておきたい。３号土坑は前期に属し、他の土坑からの出土遺物はなかったものの、その埋



第35図　中世以降の出土土器・染付等実測図（1/3）



第36図　出土石器・石製品実測図（1/4）

土が３号土坑に近似するため、同時期の所産とみられる。

中世では２間×４間の掘立柱建物跡を２棟確認した。規模・構造が異なるものの、同一建物の建て替えとみられる。これらの建物は、建物規模や柱掘方の規模からみると、この時期の一般的な建物とくらべて突出したものではない。

遺構としては確認していないが近世の染付なども出土しており、近隣に当該期の屋敷地が存在したものと思われる。

Ⅲ区

１）調査の概要

下伊良原竹の内遺跡Ⅲ区は、京都郡みやこ町犀川下伊良原80に所在する。祓川の右岸丘陵上に立地し、現地は旧伊良原小学校の校舎部分にあたる。因みに、校舎は昭和23（1945）年竣工、県内最古の木造校舎として、CMや映画の撮影などにも使用された風情のあるものであったが、平成24（2012）年、中学校に移転することによって、惜しまれつつ64年の歴史に幕を下ろした。

平成24年に調査を実施した南西側に隣接するⅣ区の調査成果から、今回の調査地点にまで遺構の広がりがあることは確実と予想された。標高約192m、調査面積約2,500㎡、調査期間は平成28（2016）年５月12日～翌３月17日である。

調査は、旧校舎の撤去作業等を待って、５月12日から重機による表土掘削作業を開始した。現地は校舎が撤去されて更地となっていたため、まず３箇所に南北方向の試掘溝を掘り、Ⅳ区との境を確認したうえで、山側である東側から表土を除去していった。東半部では、表土の直下で遺構面と考えられる黄灰色土あるいは灰褐色土を検出したが、先述の通り旧校舎の存在した場所であるために、建物基礎とこれに伴うゴミ穴等の攪乱が一面に広がっており、一方でそれ以外の遺構は確認し得なかった。西半部では、旧地形が川側である西側に徐々に低くなっており、この部分から土坑、小穴等の多数の遺構を検出した。結果、本来全体がなだらかに東側から西側に傾斜する地形であったものが、小学校校舎を建設する際の整地に伴う掘削によって、調査区の東側過半部の遺構面は失われたものと判断できた。

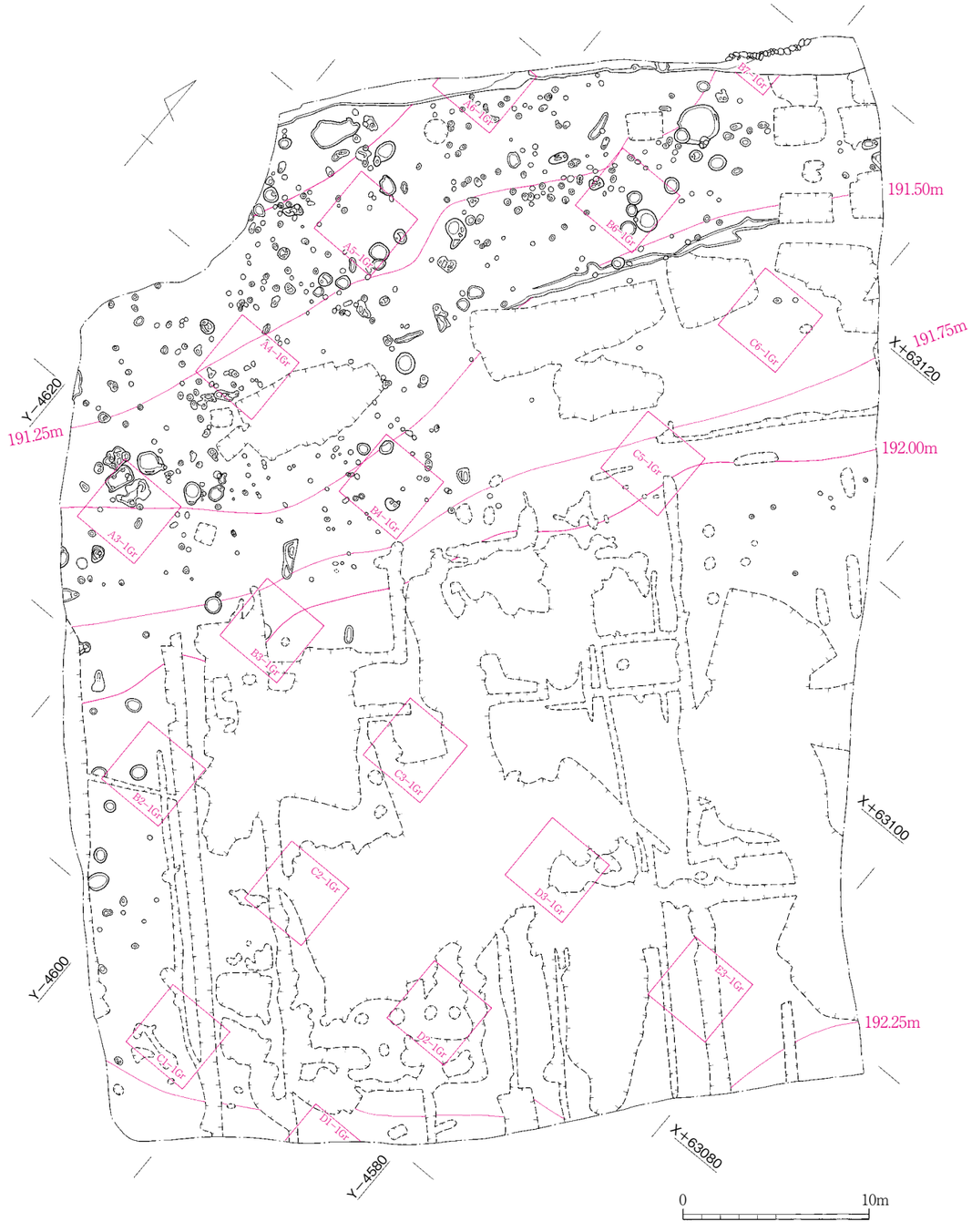
８月12日から作業員による手作業での遺構検出作業を開始し、遺構の掘削が終了した11月10日にドローンでの上空からの全体写真撮影を行った。同日からは、調査区内に４ｍグリッドを等間隔に18箇所設定して、順次手作業での掘削を開始し、下層の遺物包含状況を確認していった。調査終盤の翌年３月８日に足場を組んでの全体写真撮影を行い、15日には現地でのすべての作業を終了し、17日に機材の撤収を行った。

２）遺構と遺物

縄文時代包含層調査（図版16～25、第38図）

隣接するⅣ区の調査で、中世遺構面の下層が縄文時代遺物包含層となっている状況が確認されていたため、Ⅲ区でも中世の遺構の調査が終了した段階で、グリッドを設定して下層の遺物包含状況を確認した。グリッドは、世界測地系による座標での10mグリッドごとに各１箇所の４ｍグリッドを設定し、遺物の出土状況などを見ながら、順次手作業で掘り下げた。

近現代の攪乱の激しい部分などを除いた18箇所のグリッドを、深さ0.5～1.5mまで掘削した。土層の堆積状況は場所によって相違しているものの、基本的には上層から、黄灰色土あるいは黄灰色シルト質土または暗灰褐色土、灰褐色砂質土、黒灰色あるいは黒褐色などの黒色系土、灰褐色または暗灰褐色土の順で検出し、各層は全体に山側の南東から川側の北西に向かってなだらかに低く傾斜している状況が確認できた。合計で68点の土器片、石器類が出土し、そのうちの半数以上の36点が最上層の黄灰色系土から出土している一方で、下層、あるいは最下層からも遺物の出土があった。また、Ｅ－３で１点、Ｃ－１～Ｃ－３、Ｄ－１～Ｄ－３の各グリッドは０点と、山側ではほとんど遺物を含まない状況であった。また、出土した土器は無文の細片が多く、図示できるものは少ない。



第37図　Ⅲ区遺構配置図（1/300）

出土遺物（図版52、第38図）

A５－１Gr

１は下層の黒～黒灰色粘質土出土、それ以外は最上層の黄灰色シルト質土から出土した。５点とも無文で、１はナデ調整、２～５は内外面二枚貝条痕による調整である。

B２－１Gr

６は中層の灰褐色砂質土から、７は上層のアカホヤ火山灰と思われる橙色シルト質土を含んだ暗灰褐色土から出土した。６は細い工具による縦方向の刺突文の上に、斜めに粘土紐を貼り付けて刺突を施す。早期のものであろう。７は轟B式のもので、口縁部下に２条の隆起帯文が確認できる。８は無文でナデ調整、外面には煤が付着し、一部剝離している。

16は石鏃、凹基式で脚部の先端が鋭く尖る。姫島系の黒曜石製。長さ2.2cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、重さ0.5ｇ。

B６－１Gr

９は最上層の黄灰色砂質土から出土した。轟B式で、内外面二枚貝条痕、外面には１条の隆起帯文があり、下位は煤が付着している。

C５－１Gr

10は最上層の暗灰褐色土から出土した。外面は撚糸文による斜格子が表現されており、また内面には炭化物が付着している。早期後葉のものであろうか。

その他出土の縄文時代遺物（図版52、第38図）

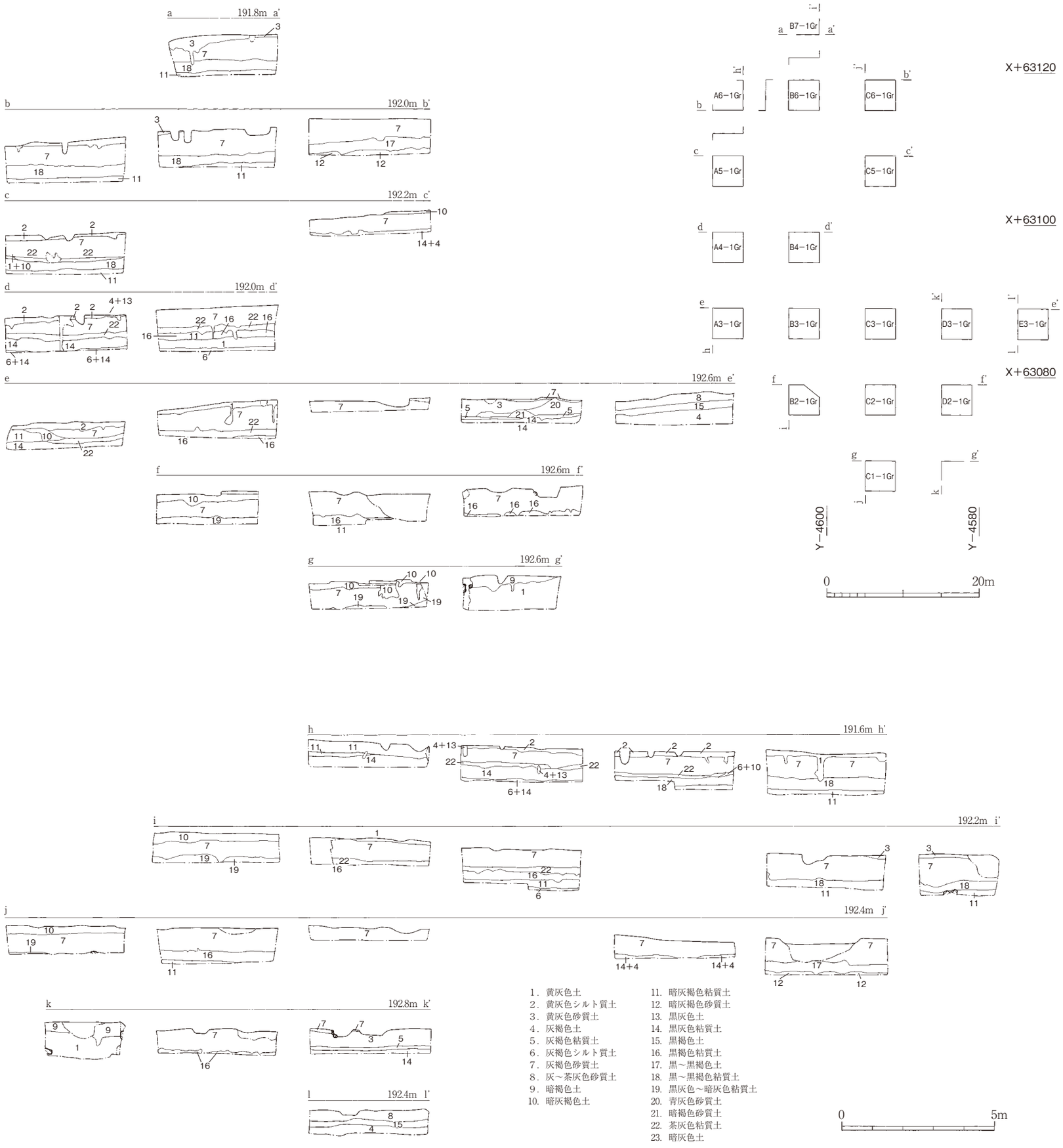
中世の土坑、遺構検出面等から出土した。11～13は轟B式土器で、11は断面三角形の隆起帯が大きく間隔も広く、13は小さくて間隔も狭い。14は胎土に滑石を含み、外面は横方向の沈線文の上位に刺突文を施す。曽畑式のものであろうか。15は無文で、内外面二枚貝条痕で仕上げる。

17～23は石鏃で、17・18・20・21は姫島系黒曜石製、19は腰岳系黒曜石製、22・23は安山岩製である。17～19・22・23は凹基式、20・21は平基式だが、21は大きさ、剝離の状況から未製品である可能性が高い。18・19・21～23は先端部、18・20は基部の一部を欠失する。（17）長1.7cm、幅1.2cm、厚0.3cm、重0.4ｇ、（18）長（1.3cm）、幅（1.1cm）、厚0.4cm、重（0.3ｇ）、（19）長（1.8cm）、幅1.7cm、厚0.3cm、重（0.7ｇ）、（20）長2.5cm、幅1.7cm、厚0.4cm、重（1.4ｇ）、（21）長（2.5cm）、幅1.8cm、厚0.5cm、重（2.6ｇ）、（22）長（2.1cm）、幅1.4cm、厚0.4cm、重（0.6ｇ）、（22）長（1.8cm）、幅1.6cm、厚0.5cm、重（1.0ｇ）。

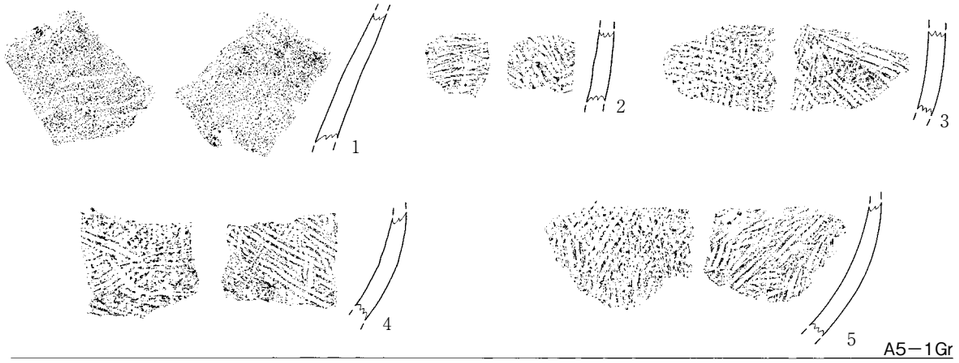
土壙墓

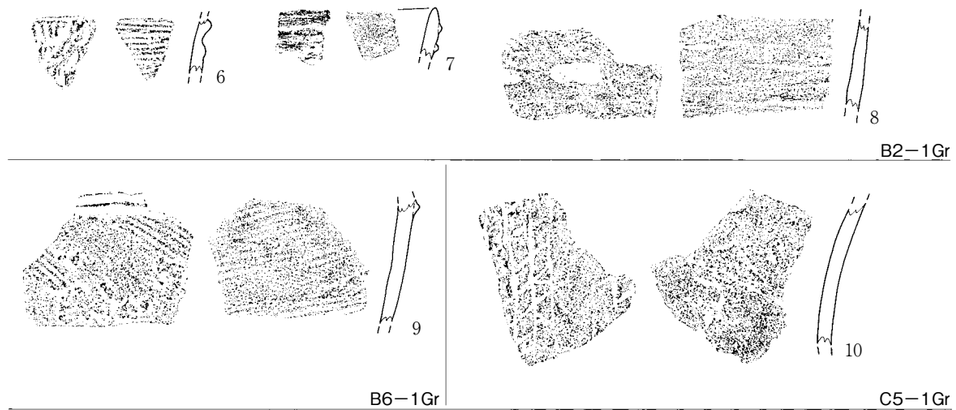
１号土壙墓（図版27、第40図）

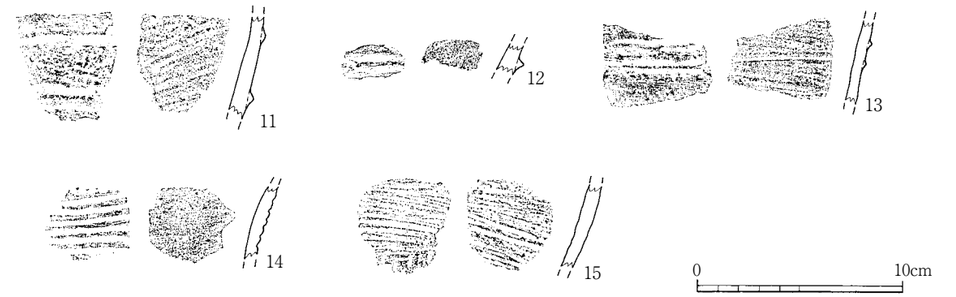
調査区の南西端部付近で検出した。遺構の南隅部をはじめ数箇所に小穴が付属しているが、周囲の状況から別遺構である可能性が高い。平面形は隅丸長方形で、主軸方位はN－16°－E、長軸長150cm、短軸長90cm、深さ20cmで、底面はほぼ水平となる。埋土は暗褐色粘質土の一層で、平面的にも断面土層観察でも木棺の痕跡等は確認できなかった。遺物は南側に集中しており、南壁沿いに切先を東に刃を北に向けて短刀を、東壁沿いには先端部を南に向けて鉄鏃を置き、西側では土師器皿４点が口縁部を上にして出土している。遺体は残存していないが、遺物の出土状況から頭位は南

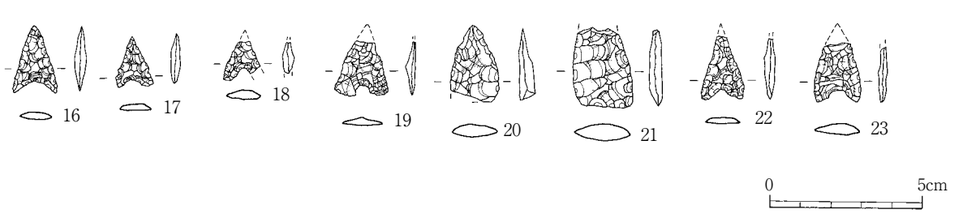


第38図　グリッド土層実測図（1/150・1/600）

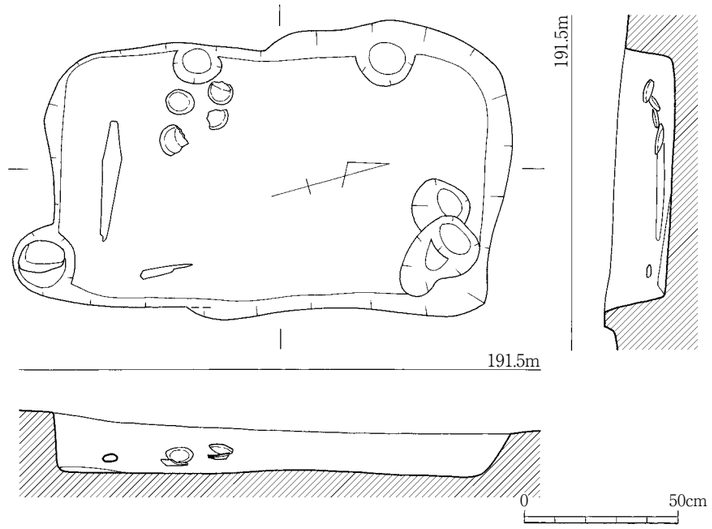








第39図　出土縄文時代遺物実測図（1/3、1/2）



第40図　１号土壙墓実測図（1/20）

側であろう。

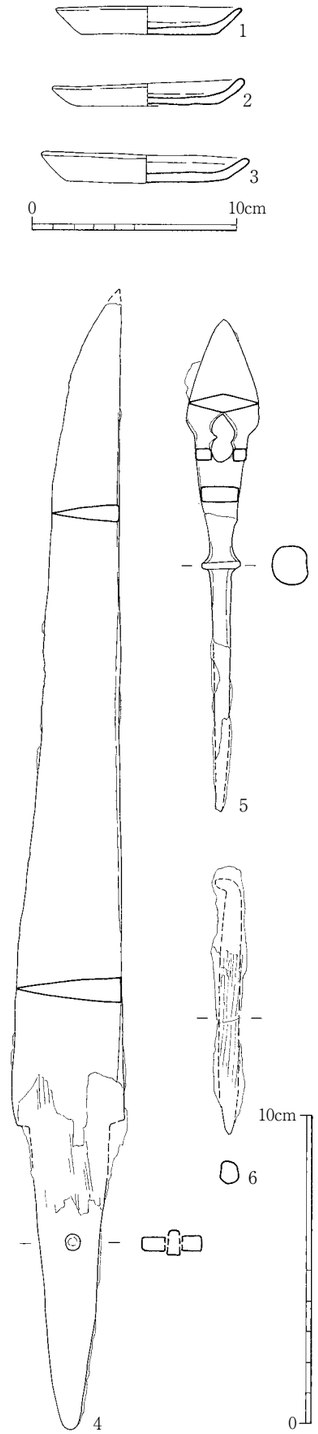
出土遺物（図版52・53、第41図）

１～３は土師器皿。皿は４点出土したが、うち１点は現在所在不明である。図示した３点とも、口縁部内面をやや肥厚させて丸味をもち、底部は糸切りで、内面をナデており、外面には板状圧痕が残る。１は完形で、口径9.2cm、底径6.7cm、器高1.3cm。２は復元口径9.5cm、復元底径7.1cm、器高1.4cm。３は復元口径10.3cm、底径8.0cm、器高1.5cm。

４は短刀で平造りである。切先をわずかに欠失し、全長36.7cm、刃長26.8cm、区部幅3.7cm、厚さ0.8cmで、反りはほぼ無い。茎は長さ9.8cm、最大幅3.0cm、厚さ0.5cmで茎尻は丸い栗形となる。目釘孔は区寄りにあり、目釘が錆着している。区部の前後に木質が残存しており、２cmほど刀身にかかる。５は鉄鏃で、全長15.9cm。鏃身部は平根形でナデ関、両丸造りで、長さ3.6cm、幅2.3cm、厚さ0.5cm。頸部との境には透かしがあって、瓢形である。頸部は長さ4.3cm、厚さ0.6cmで、断面長方形、篦被は円盤状で径1.3cm。茎部は断面長方形で、長さ7.7cmである。６は鉄釘で、原位置では検出していない。角錐状の釘の末端をL字形に曲げて頭部としており、長さ8.3cm、太さ0.8×0.7cm程度。先端部から6.2cmには木質が残る。

土坑

調査区の東半部は、旧伊良原小学校建設の際の整地で、中世の



第41図　１号土壙墓出土遺物実測図（1/3、1/2）

遺構面は削平されており残存していない。逆に旧地形が徐々に低くなっていく西半部は盛土されており、中世の遺構を多く検出し、多数の小穴と共に40基以上の土坑を確認した。ほとんどの土坑は円形あるいは楕円形の平面形状で、深さ５～20cmと浅いものが多く、埋土は暗褐色から黒褐色あるいは黒灰色の一層であるものがほとんどであった。また、規則的に配置された様子は認められず、用途は不明である。

１号土坑（図版28、第42図）

調査区北西端部で検出した。２号土坑と切り合い関係にあると思われ、埋土はともに暗灰褐色土と黄灰色土（地山）ブロックの混合土であるが、土層断面観察では２号土坑に切られている。平面形は隅丸長方形に近く、205×185cm程で、深さは５～15cmと浅く、底面はほぼ水平となる。南東辺と南西辺の形状が乱れているのは別遺構あるいは崩れであろう。

出土遺物（第47図）

１～３は瓦器椀である。１は口縁部で、ほぼ直線的であり、粗いミガキ痕が残る。胎土は精良で、比較的堅緻、灰色で口縁部内外面は重ね焼きのため灰黒色化している。２・３は底部で、２は外底部には板状圧痕が残り、断面逆三角形の高台が付き、復元高台径6.0cm。焼成はやや軟質で、暗灰色を呈する。３は外底部に糸切り痕が残り、高台はごく小さい。焼成は軟質で、白色となる。

２号土坑（図版28・29、第42図）

１号土坑と重複し、土層観察では１号土坑を切っている。平面円形で、径80cm、深さ20cm。埋土は暗灰褐色土と黄灰色土（地山）ブロックの混合土の一層である。

出土遺物（図版53、第47図）

４・５は土師器。４は坏で、底部は段を持って切り離され、板状圧痕が残り、底径8.9cm。成形は粗く、内底部にはナデの痕跡が明瞭に残り、歪みもある。５は椀で、口縁部がやや内湾しており、復元口径15.0cm。体部下位にはケズリ調整痕が残り、内外面粗いミガキ調整であろうか。体部内面と口縁部外面の一部に煤が付着する。６は瓦器椀の口縁部で、焼成はやや軟質、灰白色を呈し、口縁部外面は重ね焼きのため暗灰色化している。

３号土坑（図29、第42図）

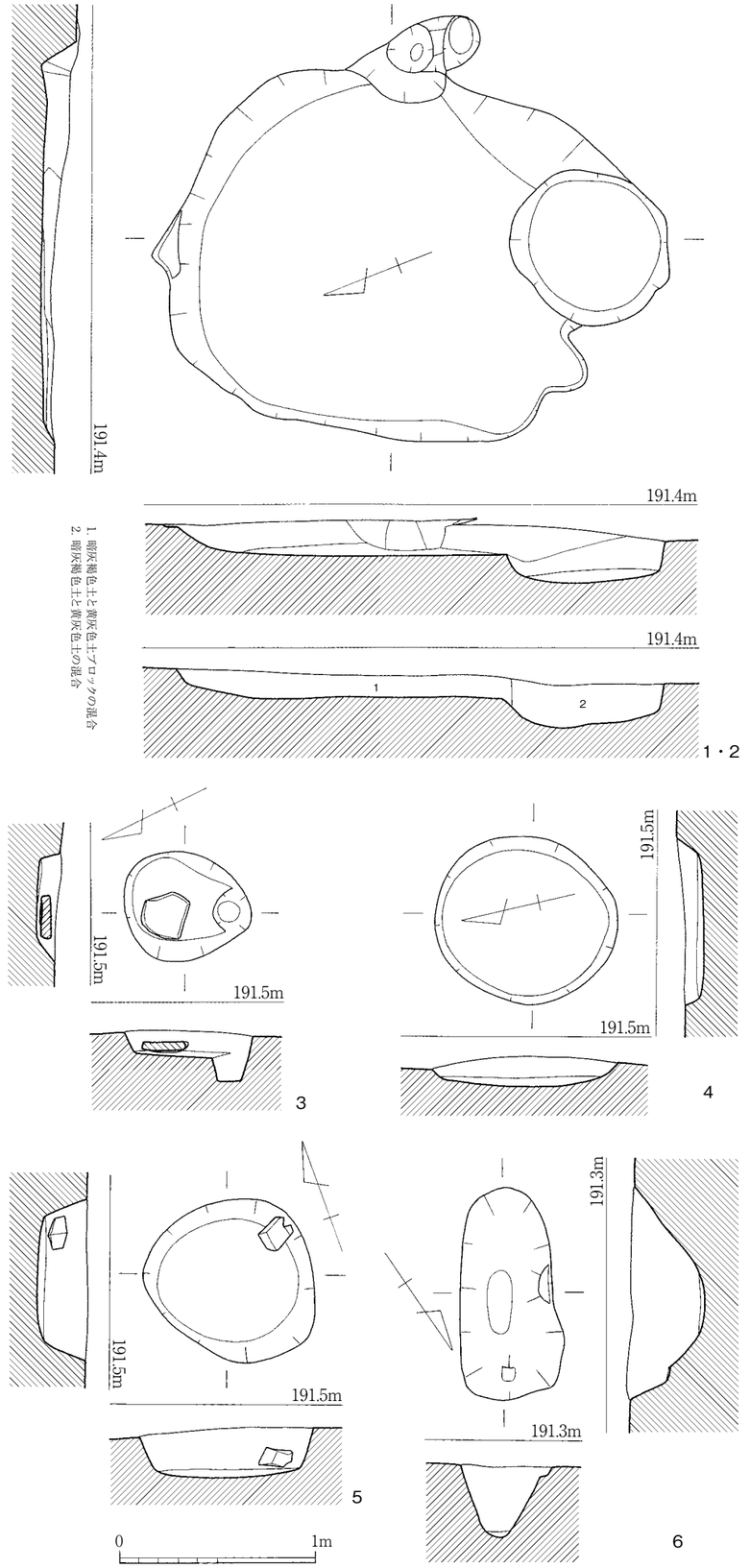
平面形は円形に近い楕円形で、65×55cm。深さは約10cmで底面はほぼ水平である。底部の南西隅部にさらに径20cm、深さ15cm程の小穴を穿つ。また、底面に接して径20cm、厚さ５cm程の扁平な自然石を検出した。

４号土坑（図版29・30、第42図）

平面形は円形で、径85～95cm、深さ約10cmで、底面はほぼ水平となる。埋土は灰褐色土の一層で、黄灰色土（地山）ブロックと暗灰褐色土ブロックを含む。

出土遺物（第47図）

７・８は瓦器椀の口縁部で、ミガキ痕が残り、７は回転ミガキか。２点とも焼成はやや堅緻で、灰白色、口縁部外面は重ね焼きのため暗灰色化している。



第42図　１～６号土坑実測図（1/30）

５号土坑（図版30、第42図）

平面形は円形に近く、径80～85cm、深さ25cmで、底面は水平に近い。遺構内の北西隅部で径15cm程の自然石を検出した。埋土は、上層から地山ブロックを含んだ暗灰褐色土、暗灰褐色土、暗灰褐色土と地山ブロックの混合土の３層に分かれる。

出土遺物（第47図）

９は土師器坏で、口縁部下で湾曲する。器面は風化しているが、ヨコナデ調整か。10は土師器甕であろう。口縁端部を細く上方に摘み上げる。内外面ヨコナデ調整。11・12は瓦器椀である。11は口縁部で内外面ミガキ調整で、外面は回転ミガキ調整。焼成は堅緻で、灰色、口縁部内外面は重ね焼きで暗灰色化している。12は底部で、高台は逆三角形、焼成は軟質で、灰白色を呈する。内面には煤が付着している。

６号土坑（図版31、第42図）

平面形は楕円形で、105×50cm、深さ35cm。壁面は緩やかな傾斜で、北東部と北西部にわずかなテラスを持ち、底部との境も明瞭ではない。今回検出した土坑では、形状がやや異例である。

７号土坑（図版31、第43図）

平面形は隅丸長方形に近いが、北西辺を楕円形にさらに掘り窪めた形状で、底部もやや凹凸がある。75×65cm、深さは20cmで北西の最深部で30cm。埋土は暗灰褐色～黒灰色土で地山ブロックを含む。

出土遺物（第47図）

13は土師器椀の底部で、高台は断面逆三角形、胎土は精良である。

８号土坑（図版32・33、第43図）

平面形は円形に近く、径70～75cm、深さ５cmとごく浅く、底面はほぼ水平となる。埋土は灰褐色～黒灰色土で、地山ブロックを含む。

９号土坑（図版32・33、第43図）

平面形は円形に近い楕円形で、60×50cm、深さ５cmと浅く、底面は水平となる。埋土は暗灰褐色で、地山ブロックを含む。

10号土坑（図版32・34、第43図）

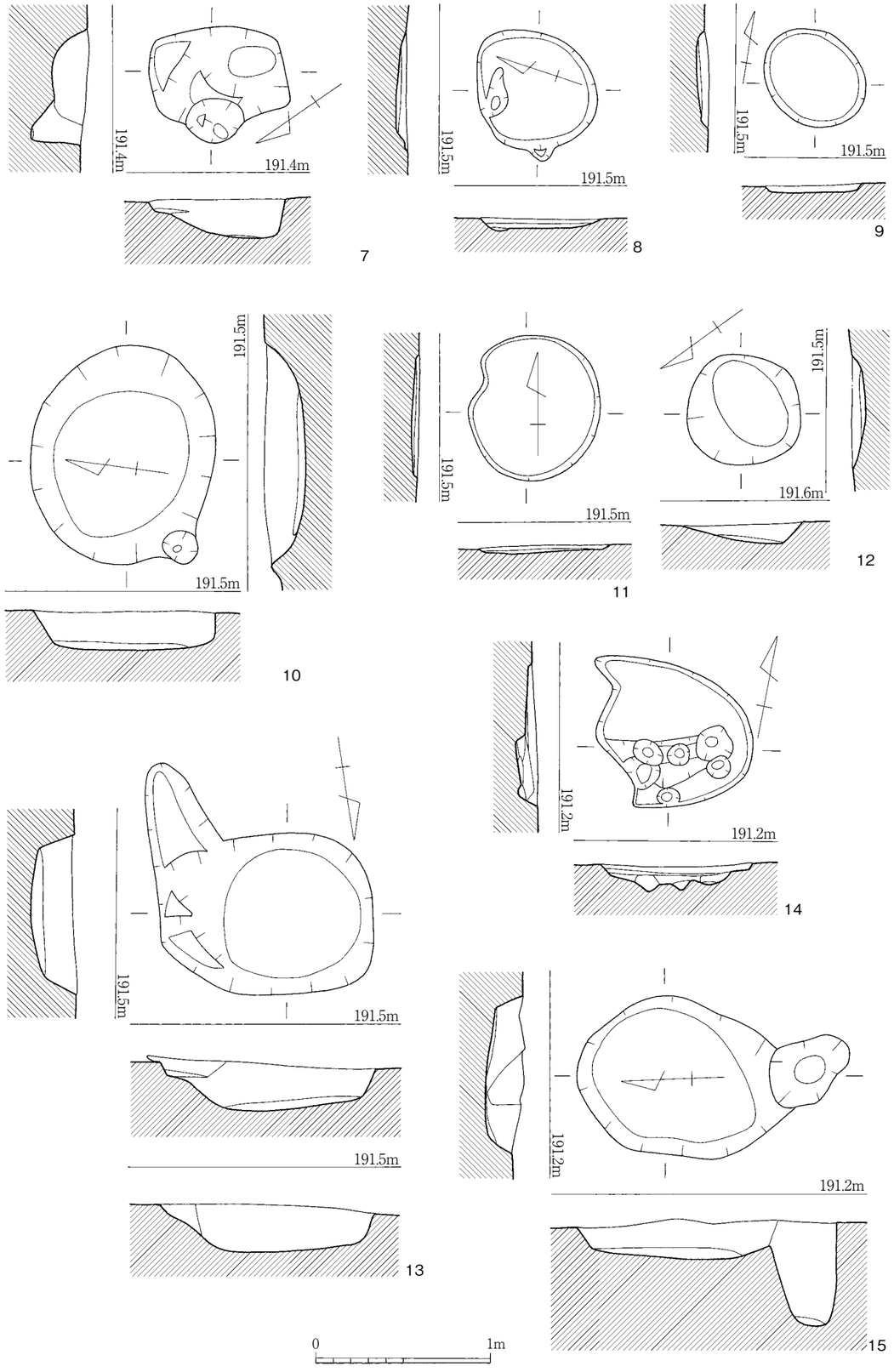
平面形は楕円形で、125×105cm、深さ20cmで、底面は水平に近い。遺構の南西辺には径20cm深さ15cmの小穴がある。埋土は黒灰色土。

出土遺物（第47図）

14は瓦器椀で、高台の断面は逆三角形、焼成はやや堅緻で、灰色を呈する。

11号土坑（図版32・34・35、第43図）

平面形は一部が乱れた楕円形で、75×85cm、深さは５cm以下とごく浅く、底面は水平となる。埋土は一層、暗褐色土で地山ブロックと炭化物粒を含む。



第43図　７～15号土坑実測図（1/30）

12号土坑（図版35、第43図）

平面形は円形で、径65cm、深さ10cmで、底部は南西側が低い。埋土は一層で、暗褐色土、地山粒と炭化物粒を含む。

13号土坑（図版35・36、第43図）

楕円形と三角形を組み合わせたような平面形状であるが、土層断面の観察では２つの遺構の重複で、楕円形の土坑が切っているようである。楕円部分で120×90cm、深さ25cmで、底面は中央部がやや低い。埋土は暗灰褐色土の一層である。

14号土坑（図版36、第43図）

平面形はD字形に近い不整形で、105×85cm、深さ５～10cm程度であるが、底面の南半部には細かな凹凸がみられる。形状からは遺構とすることにやや躊躇するが、埋土は地山ブロックを含んだ暗灰褐色土一層であり、他の土坑と同様であった。

15号土坑（図版37、第43図）

平面形は、楕円形の土坑に同じく楕円形の小穴を組み合わせた形状で、本来別遺構と見るべきであろう。125cm程度×90cmとなり、深さ20cm、底面は水平に近い。埋土は暗灰褐色土で、黄灰色土（地山）ブロックを含む。

出土遺物（第47図）

15は瓦器椀。内外面に粗いミガキ調整痕が残り、焼成はやや軟質、灰白色で、口縁部内外面は重ね焼きのために黒灰色化している。

16号土坑（図版37・38、第44図）

調査区西隅部の崖に面した位置で検出した。平面形は不整形で、265×155cm、深さは最大10cmで底面は水平に近いが、北西の崖側が浅くなる。埋土は黒灰色粘質土で、黄灰色土（地山）ブロックと炭化物を含む。

出土遺物（図版53、第47図）

16・17は土師器で、底部は糸切り。16は皿で、残存率がやや不足しているが、復元口径9.0cm、復元底径7.4cm、器高1.2cm。17は坏であろう。体部と底部の境に若干の段があり、ヘラ状の工具痕が残る。18～20は瓦器椀。18は口縁部で、外面は風化しているが、内面にはミガキ調整の痕跡が残る。焼成は比較的堅緻で、灰色、口縁部内外面は重ね焼きのために暗灰色化している。19は底部であるが、茶灰色を呈し、あるいは土師器である可能性もある。高台は断面逆台形となる。20は内外面を比較的密なミガキ調整で仕上げ、焼成は良好で、灰色、口縁部内外面には重ね焼きの痕跡を明瞭に残す。また、内外面には墨が付着している。口径15.8cm、高台径5.8cm、器高5.7cm。

17号土坑（図版38、第44図）

平面形は円形で、径60～65cm、深さ10cmで、底部の一部を小穴状に更に10cm程掘り下げる。埋土は一層、灰褐色土で、黒褐色粘質土ブロックと炭化物を含む。

18号土坑（図版39、第44図）

平面形は円形で、径80～85cm、深さ15cmで、底面は水平、周壁は緩やかな傾斜となる。遺構の北隅部を径25cmの小穴状にさらに25cm程掘り下げる。埋土は黒灰褐色土と黒灰色土の混合土で、地山ブロックと炭化物粒を含む。

19号土坑（図版39、第44図）

平面形は楕円形に近い不整形で、110×50cm、底部も凹凸が激しい不整形であり、深さは最大部で30cm。

出土遺物（図版53、第47図）

21・22は土師器で、底部は糸切り。21は皿で、底部には板状圧痕が残り、また胎土には金雲母を多く含む。復元底径7.6cm。22は坏で、体部と底部の境に段を持つ。復元底径9.6cm。23･24は瓦器椀。23は底部で、高台の断面は逆三角形。復元高台径7.6cm。24は、高台は高さのある断面逆三角形で、内面はミガキ調整、外面下位はケズリ調整、上位はヨコナデ調整後に口縁部周辺は回転ミガキともとれる胎土の砂粒の動く強いヨコナデ調整で仕上げる。焼成は堅緻で、淡灰色から灰色を呈する。口径16.6cm、高台径6.8cm、器高6.2cm。

20号土坑（図版40、第44図）

平面形は楕円形で、80×65cm、深さ10cmでテラス状となり、南西半部は更に深くなっており、最深部で35cmとなる。埋土は一層で、暗褐色土である。

21号土坑（図版40・41、第44図）

22号土坑と重複しており、22号土坑が切る。平面円形で、径90～100cm、深さ10cm弱で、底面は水平となる。埋土は黒褐色土。

22号土坑（図版40・41、第44図））

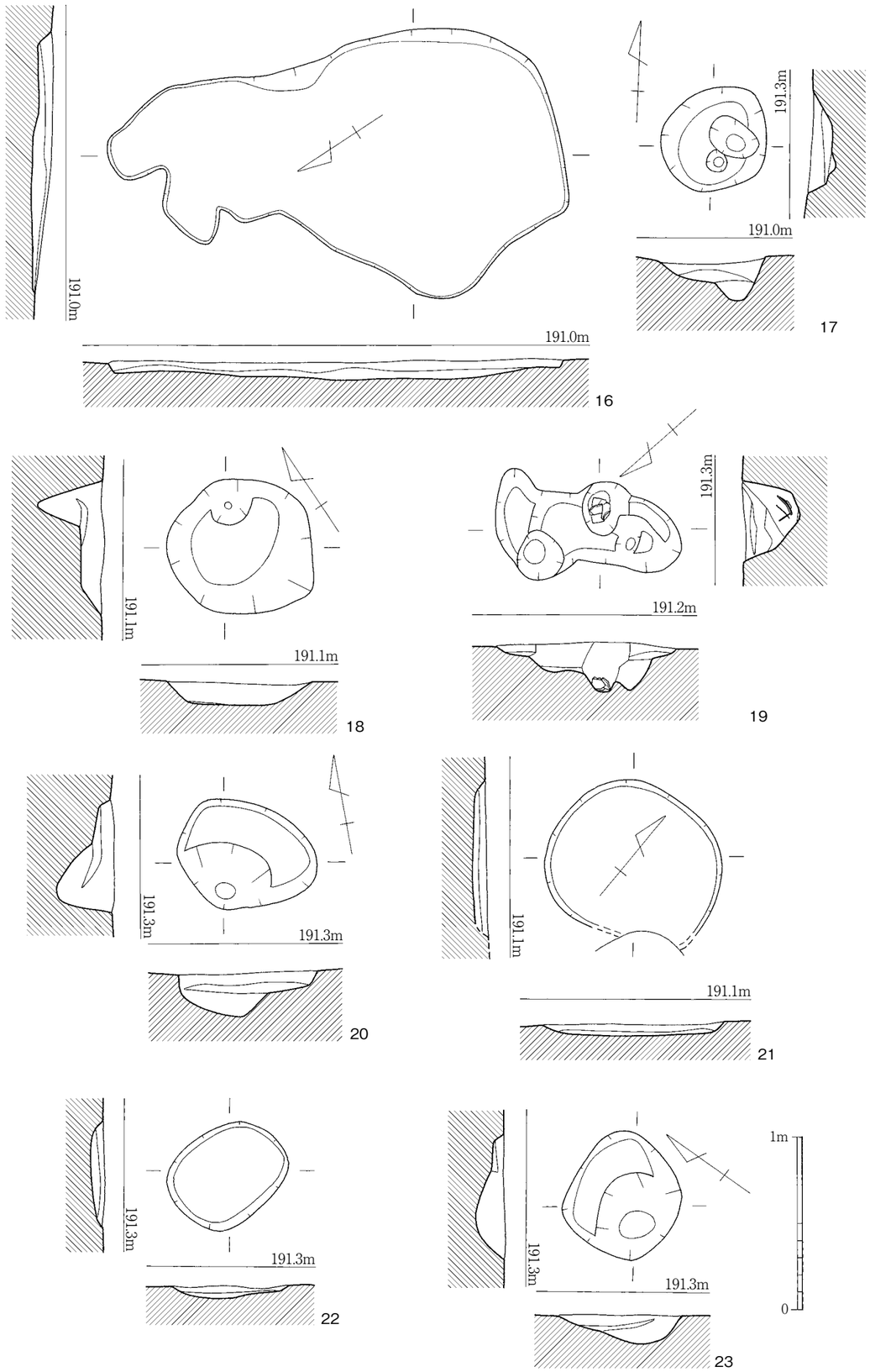
21号土坑と重複しており、21号土坑を切る。平面形は円形に近い楕円形で、65×55cm、深さ10cm弱と浅く、底面は中央部がやや低い。埋土は灰褐色土である。

23号土坑（図版41・42、第44図））

平面形は円形に近い楕円形で、75×70cm。二段掘り状で、北半部は深さ５cmでテラス状になり、南半部は深さ15cmまで掘り込む。周壁の傾斜は比較的緩やかで、底部との境は不明瞭である。埋土は一層で、灰褐色土、暗灰褐色土と炭化物粒を含む。

24号土坑（図版42、第45図）

平面形はやや変形の楕円形で、80×75cm、深さ20cmで、底部の中央がやや低い。埋土は一層で、黄灰色土（地山）ブロックと炭化物を含む。



第44図　16～23号土坑実測図（1/30）

25号土坑（図版43、第45図）

平面形は円形で、径110～120cm、深さ20cmで、底面は水平となる。埋土は一層で、黒褐色粘質土。

出土遺物（第47図）

25は土師質土器鍋で、内外面ヨコナデ調整で、外面には煤が付着している。

26号土坑（第45図）

平面形はやや変形の楕円形で、80×65cm、深さ10cm。

27号土坑（第45図）

平面形はやや変形の楕円形で、60×55cm、深さ10cm弱。

出土遺物（第47図）

26は土師器皿。底部は糸切りで、極めて薄い。復元口径9.4cm、復元底径8.0cm、器高1.2cm。27は白磁椀で、口縁部は外方に折り曲げて上部が水平となる。胎土は白色、釉はやや緑がかった灰色。

28号土坑（第45図）

平面形はやや変形の楕円形で、75×50cm、底部は二段掘り状で東側が低く、深さ30cm

29号土坑（図版43・44、第45図）

形状からは土坑と小穴が重複しているようだが、平面観察では区別できなかった。平面形は円形に近い楕円形で、80×70cm、深さは土坑部は20cm、西側の小穴部は45cm。埋土は二層に分かれ、中央部上層は灰色粘質土、下層は黒灰色土。

出土遺物（第47図）

28は瓦器椀で、高台が欠失している。焼成はやや軟質で、灰色を呈する。29は土師質土器鍋で、口縁部は内面に稜をもって屈曲して開く。内外面ヨコナデ調整だが、内面には縦方向のハケメ状のナデが残る。外面は全面に煤が付着している。

30号土坑（図版44、第45図）

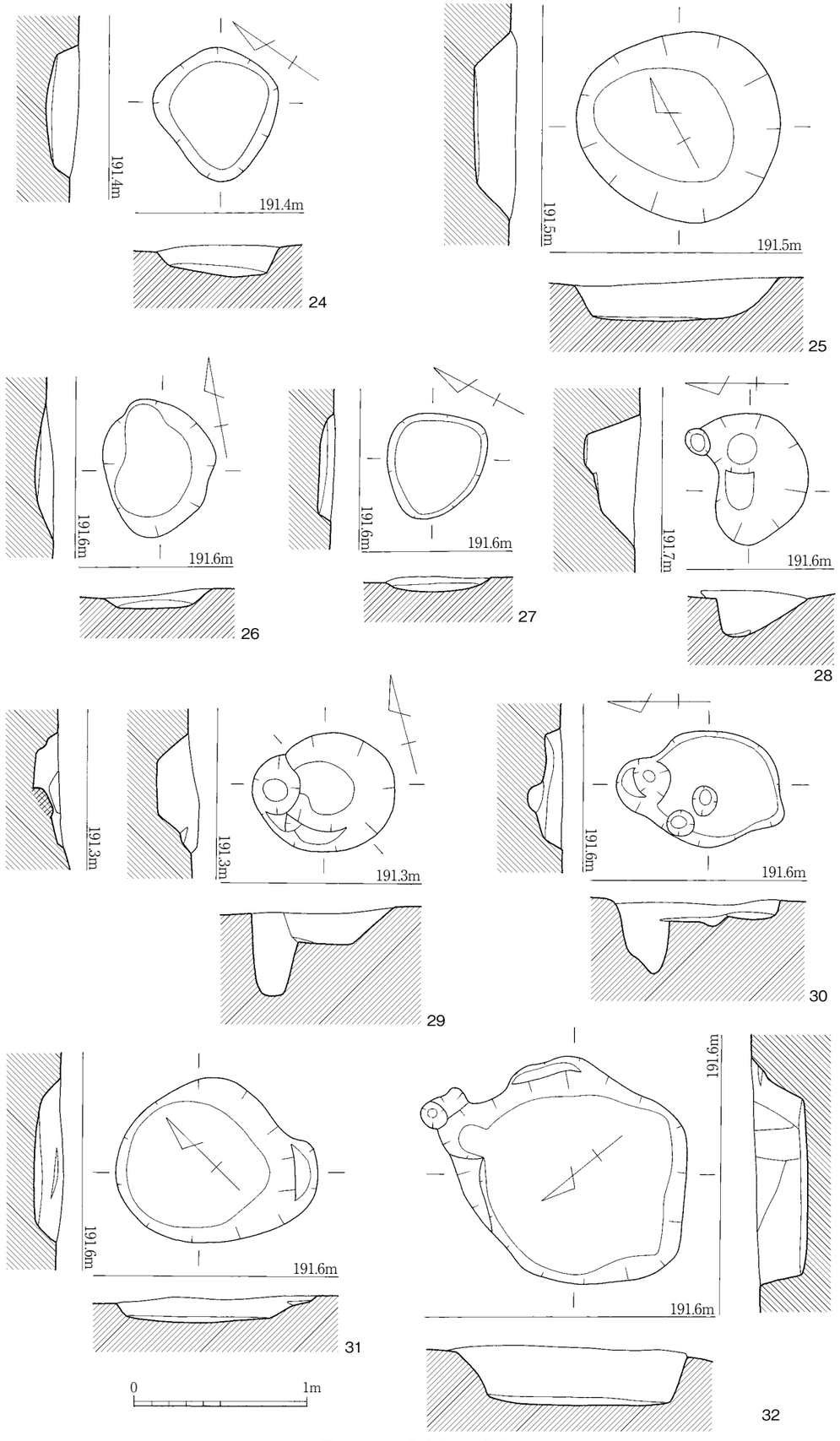
形状的には土坑と小穴が重複しているようだが、平面観察では区別できなかった。平面形はやや変形の楕円形で、95×65cm、深さは土坑部は10cm、小穴部は40cm、土坑部の底部は水平となるがやや凹凸がある。埋土は黒褐色土で、断面観察でも切り合い関係は不明であった。

出土遺物（第47図）

30は土師器皿で、底部に板状圧痕が残り、復元底径7.2cm。31は小片であるが、同安窯系の青磁椀であろうか。内面は体部と見込の境に段を有し、外面には縦方向の櫛目文がある。胎土は灰色、釉は緑灰色。

31号土坑（図版45、第45図）

平面形は円形に近い楕円形で、115×95cm、深さ15cmで、底部は中央がやや低い。埋土は一層で、暗褐色土、黄褐色土（地山）ブロックと炭化物粒を含む。



第45図　24～32号土坑実測図（1/30）

32号土坑（図版45・46、第45図）

平面形は隅丸方形に近いが、遺構の北東と南東側に形状の乱れがあり、170×125cm、深さ30cmで、底面は水平となる。埋土は暗灰褐色土で、炭化物を含む。

出土遺物（図版53、第47図）

32は土師器皿で、全体に器壁が薄く、底部には板状圧痕が残る。復元口径8.4cm、復元底径6.0cm、器高1.0cm。33は土錘で、長さ5.9cm、最大径0.9cm、重さ5.7ｇ

33号土坑（第46図）

平面形は不整形で、145×105cm、底部も凹凸が激しく、最深部で深さ50cm。一個の遺構として認められるかには疑問も感じる。

34号土坑（図版46、第46図）

平面形は円形で、径85～90cm、深さ15cmで、底面は北西側が低い。埋土は暗灰褐色粘質土、黒灰色土小ブロックを含む。

出土遺物（第47図）

34は黒色土器か。高台は「ハ」字に開き、復元高台径7.4cm。現状は外面のみ黒灰色だが、内面は風化が激しく器壁が失われている。

35号土坑（図版47、第46図）

平面形は円形に近く、径55～65cm、深さ15cmで、底部には凹凸がある。埋土は一層で、灰褐色土、黒褐色土と黄灰色土（地山）ブロックを含む。

36号土坑（図版47・48、第46図）

調査区の南西端にあり、遺構の約半分は調査区外にある。平面形は径90cmの円形の北西側に半径15cmの半円形が付属した形状かと思われる。深さ25cmで、底面は水平に近い。埋土は暗褐色土。

37号土坑（図版48、第46図）

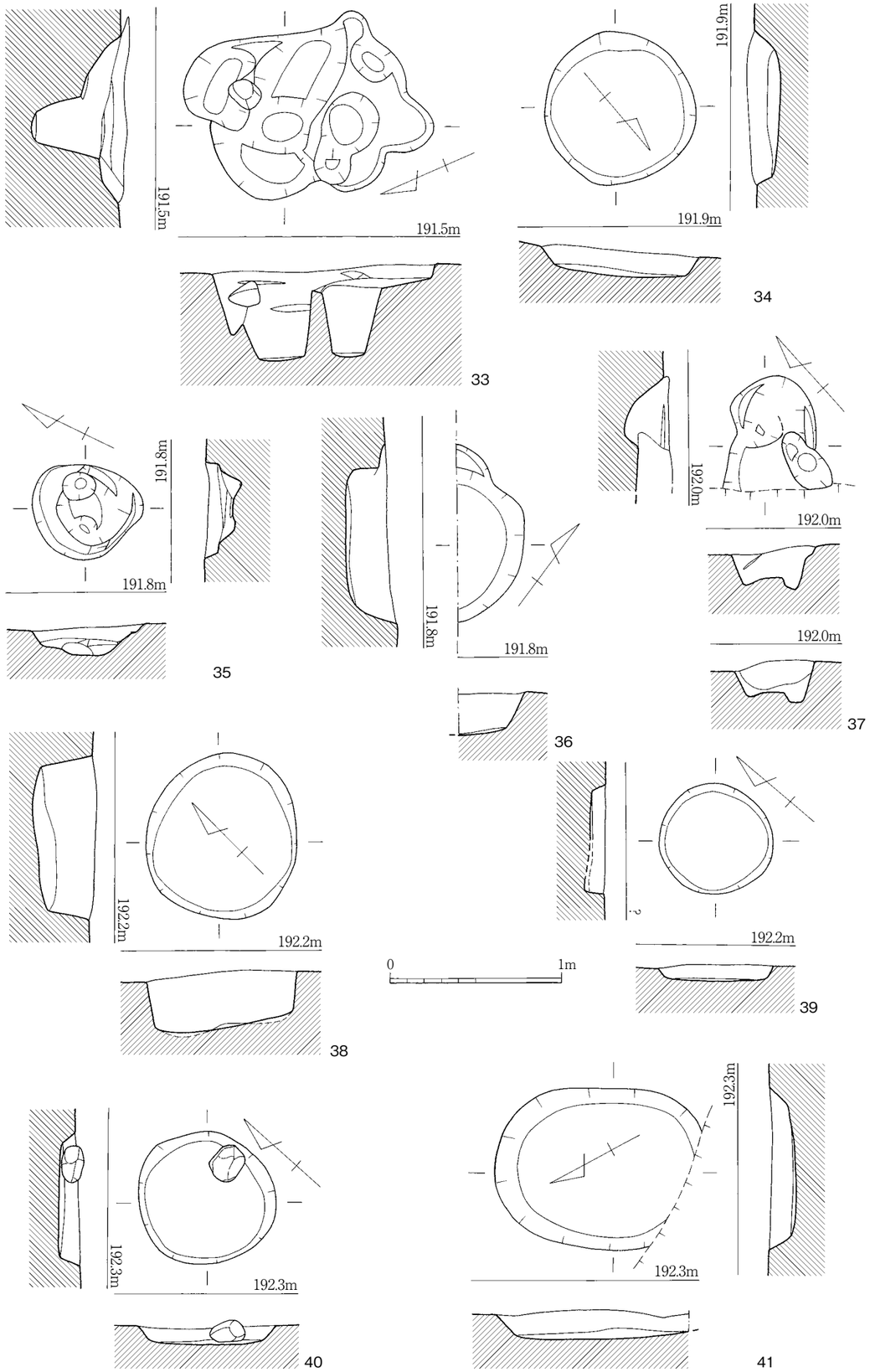
調査区の南西端にあり、遺構の一部はⅣ区調査区にある。平面形は楕円形に近いと思われ、長軸長は検出部分で65cm、短軸長65cm。底部は凹凸が激しく、最深部で深さ25cm。埋土は二層に分かれる。

38号土坑（図版49、第46図）

平面形は円形に近い楕円形で、95×85cm、深さ35cmで、底面は北側が低い。埋土は灰褐色土、黒褐色土ブロック、黄灰褐色土（地山）ブロックの混合土。

39号土坑（図版49・50、第46図）

平面形は円形で、径65cm、深さ10cmで、底面は水平となる。埋土は黒褐色土で、赤褐色粘質土ブロックを含む。



第46図　33～41号土坑実測図（1/30）

40号土坑（図版50、第46図）

平面形は円形で、径80cm、深さ10cmで、底面は水平となる。遺構の東隅底部に接して20cm大の自然石を検出した。埋土は黒褐色土で、地山ブロックを含む。

41号土坑（図版51、第46図）

調査区の南西端にあり、遺構の一部はⅣ区調査区にある。平面形は楕円形で、長軸長125cm程、短軸長95cm、深さ15cmで、底面はほぼ水平となる。埋土は黒褐色土で、黄褐色土ブロックを若干含む。

出土遺物（第47図）

35は土師器皿で、器壁が薄く、器高も低い。36は陶磁器皿と思われるが、詳細は不明。器壁は薄く、内面の口縁部と見込の境に段を有し、外面は境が不明瞭。胎土は灰色で細砂粒を含み、内面と口縁部外面には黄褐色釉がかかるが、風化が激しい。

ピットその他出土の中世遺物（図版53、第48図）

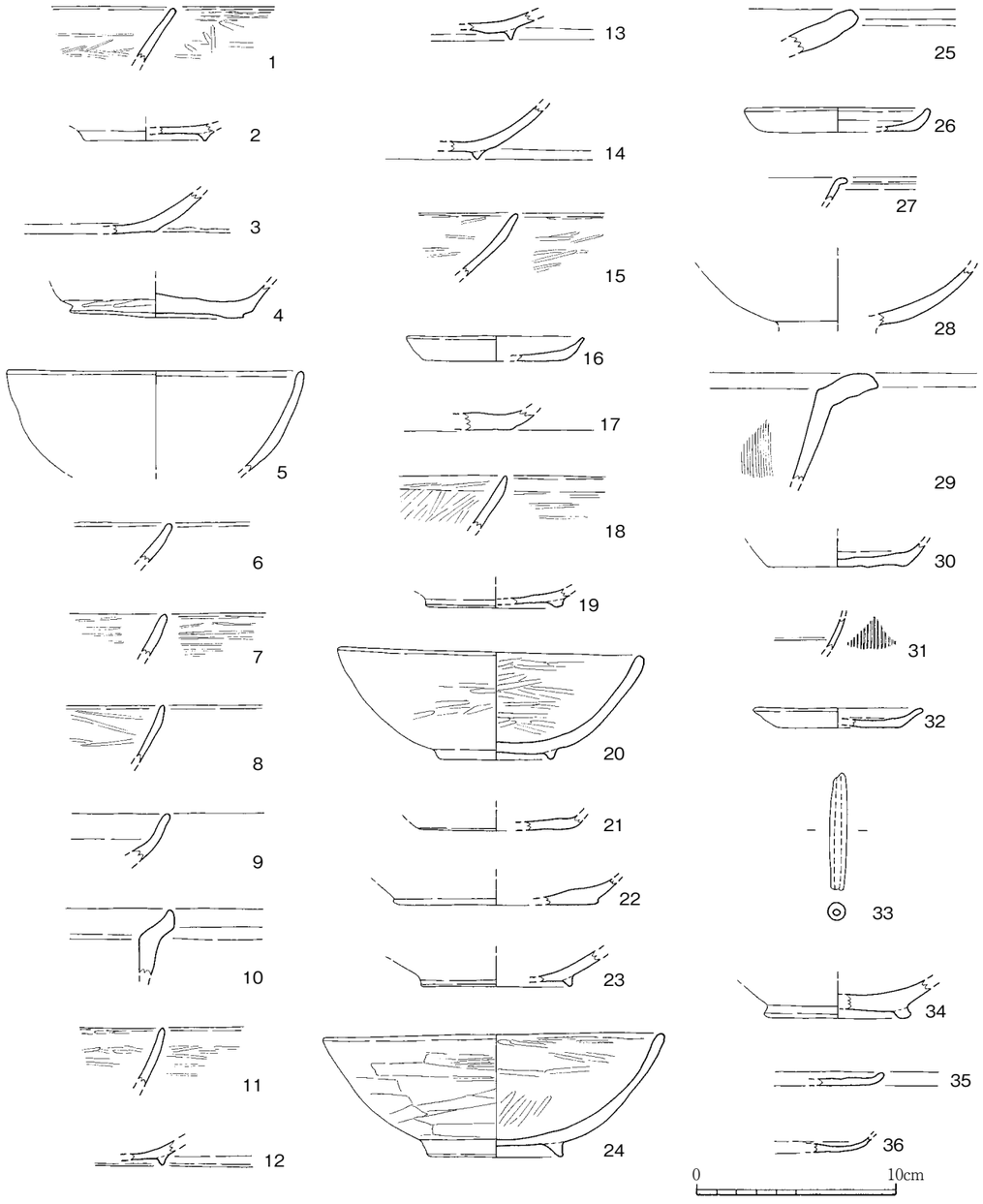
１～10は土師器で、底部は全て糸切り。１～６は皿。３は口縁部と底部の境に段があり、内底部には指ナデの痕跡が明瞭に残り、３・６の底部には板状圧痕が残る。２・４～６は口縁部と底部の境が不明瞭で、６は底部が小さい。（１）口径8.3cm、底径5.8cm、器高1.5cm、（２）口径8.3cm、底径6.0cm、器高1.1cm、（３）口径8.6cm、底径6.5cm、器高1.3cm、（４）口径8.9cm、底径7.1cm、器高1.0cm、（５）底径5.8cm、（６）口径9.5cm、底径6.2cm、器高1.6cm。７～10は坏。７は体部と底部の境に段があり、７・10の底部には板状圧痕がある。７・10は橙褐色、８・９は暗灰褐色を呈する。また、10は胎土に金雲母を多く含む。（７）復元底径10.0cm、（９）復元底径9.0cm、（10）復元口径15.8cm、復元底径10.8cm、器高2.5cm。

11は土師質土器鍋で、口縁部が屈曲して開く。外面は煤で黒褐色化している。

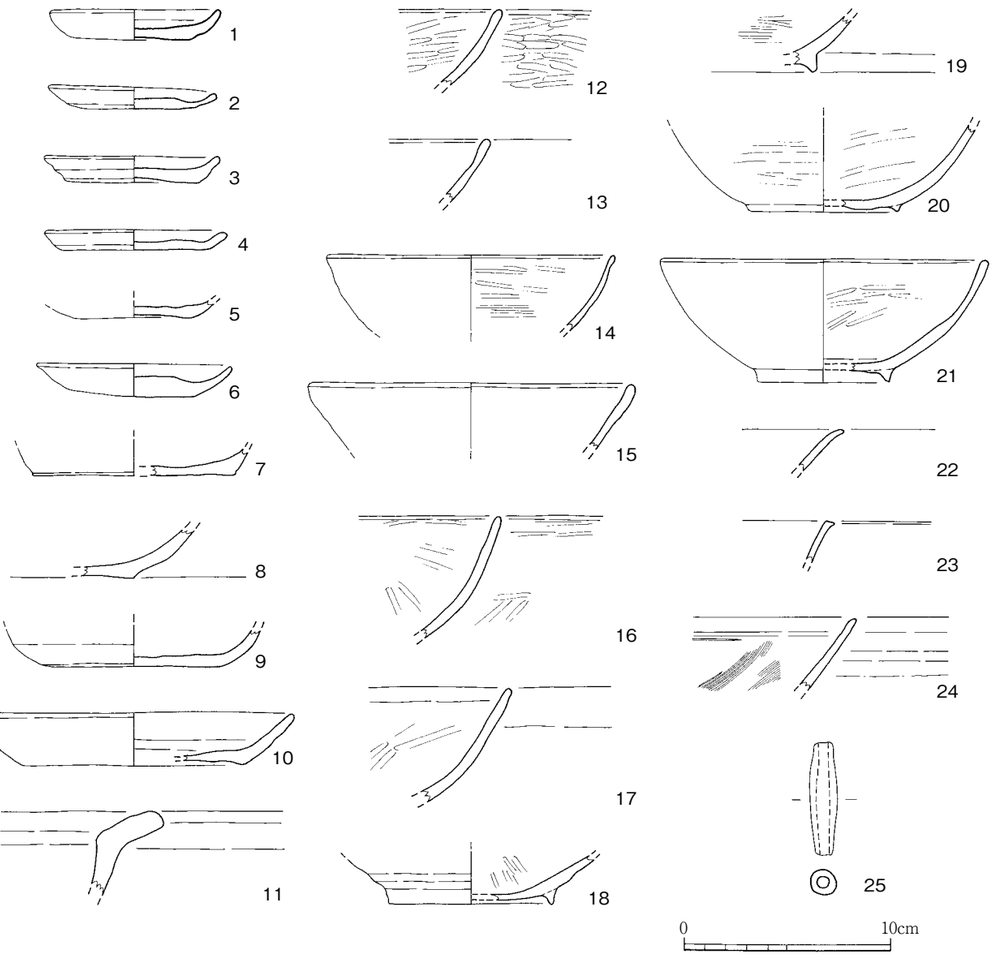
12～21は瓦器椀。12は内外面を丁寧に磨き、口縁部内面から外面全体が黒色化しており、黒色土器のようでもある。13は外面はロクロを使用した回転ミガキ調整、内面も磨いているようであるが、器面の風化が激しい。外面茶褐色、内面灰色で、口縁部内面は重ね焼きの黒色化が見られる。14は内面はヨコナデ後に粗いミガキ調整、外面はヨコナデ調整、灰白色で、口縁部の一部が黒灰色化している。復元口径14.0cm。15～17は内面は粗いミガキ調整、外面ヨコナデ、ナデ調整で、灰色～灰白色を呈し、15・16は口縁部外面のみ、17は口縁部内外面に重ね焼きの痕跡が残る。18～21の高台は全て断面逆三角形であるが、18・19は大きく安定感があり、逆に20は小さい。４点とも内面はミガキ調整、外面はヨコナデ・ナデ調整で、18・20・21は灰色、19は茶灰色、21は口縁部内外面に重ね焼きの痕跡が残る。20は復元高台径7.4cm、21は復元口径16.0cm、復元高台径6.4cm、器高6.0cm。

22～24は白磁。22・23は椀で、22は口縁部を短く外反させる。23は口縁端部の内面に稜を持って屈曲させて上方に水平面をつくり、先端を尖らせる。２点とも胎土は白色、釉は透明である。24は内面をわずかに肥厚させる直口縁で、内面は口縁部下に沈線を巡らせ、体部には櫛目文がある。胎土は灰白色、釉は緑灰色で、内面から外面上位まで施釉する。

25は土錘。長さ5.5cm、中央部が太く最大径1.3cm、孔径0.45cmで、6.5ｇ。胎土は精良で黄灰色から灰褐色。



第47図　土坑出土遺物実測図（1/3）



第48図　ピットその他出土中世遺物実測図（1/3）

3）小結

竹の内遺跡Ⅲ区の調査地点は、これまで伊良原小学校の校舎が建っていた場所であり、調査は小学校移転後も倉庫として利用されていた校舎の撤去作業を待って開始した。結果的に、10年以上続いた伊良原ダム関係の埋蔵文化財発掘調査の最後の地点となった。現地は小学校建設の際に大規模に造成されて特に山側の旧地形は削平を受けて、その部分の中世の遺構面は既に失われており、また校舎建物の基礎やゴミ穴等の攪乱が全面に残存している状況であった。調査はこれらの隙間を縫うようにして進めた。検出した主な遺構は、縄文時代遺物包含層と、中世の土壙墓１基、土坑41基以上等である。

縄文時代遺物包含層については、グリッドを調査区全体にほぼ均等に設定して掘り下げた結果、土層の堆積状況から山側の南東から川側の北西に向かってなだらかに低く傾斜している本来の地形の状況が確認され、各層から縄文時代遺物が出土したが、遺構等は検出できなかった。出土した遺物の数量は決して多くはなく、しかも無文の粗製土器細片がほとんどであったが、確認し得る資料によると早期から前期の遺物といえる。また調査範囲内でも山側からはほとんど出土がないことから、丘陵の縁辺部に活動の痕跡が主に分布していた状況が確認できた。

中世では、土坑が特徴的である。41基を報告したが、平面形は円形か楕円形で底部が水平になり、径60～90cm程度、深さ５～20cm程度、埋土は黒色系土の一層であるものが多く、主に丘陵の縁辺部付近で密集して検出した。形状が比較的単純でごく浅いものが多く、短期間で埋没した様子が窺えるが、一方で配置に規則性等は認められず、他にこれらと関連する遺構も存在しないことから、土坑群の用途については現段階では不明と言わざるを得ない。

以上、土壙墓を除いては具体的な活動にまでは言及し得ないが、祓川右岸の丘陵上での、縄文時代と中世の人々の土地利用の在り方の一端を窺うことはできたと言えよう。

作業状況

Ⅳ区

1）調査の概要

下伊良原竹の内遺跡は京都郡みやこ町下伊良原に位置している。Ⅰ・Ⅱ区は旧伊良原小学校北側、Ⅲ区は小学校下、Ⅳ区は小学校グラウンド部分に当たる。小学校校舎は新校舎建設まで倉庫として利用していたため解体されていなかったが、グラウンド部分に国道の橋脚を建設することから、平成24年度に調査を行った。東側の３分の１ほどは削平のため遺構が確認できず、南側は川に向かって急激に落ちており、安全勾配をつけて表土掘削を行った。

平成24年10月９日よりバックホーによる表土掘削を開始し、10月15日より人力による掘削を開始した。中世の遺構面から掘削を開始し、終了した部分からグリッドを設定し、縄文時代の包含層を掘削した。10月31日にⅡ区と共に空中写真を撮影し、さらにグリッドを掘り進めた。当初は１点ごとに遺物の位置を記録していたが、いくつか掘り進めたところで、上層から古い時期の土器が出土するなど、層位的に正位置を保っていないことが判明したため、以後は層ごとに取り上げを行った。

第49図　Ⅳ区遺構配置図（1/200）

遺物が出土する西側を中心に掘削を進めていき、11月16日にグリッドの掘削が終了したため、全体写真を撮影した。その後ベルトを掘削し11月22日に終了した。

竹の内遺跡Ⅳ区は祓川の右岸丘陵上、旧伊良原小学校グラウンドに位置している。

遺構面は南側に向けて傾斜しており、南側端では２mほどの深さがあり、旧畑地と考えられる石垣並びに段落ちがあり、それより南側では遺構は確認されなかった。

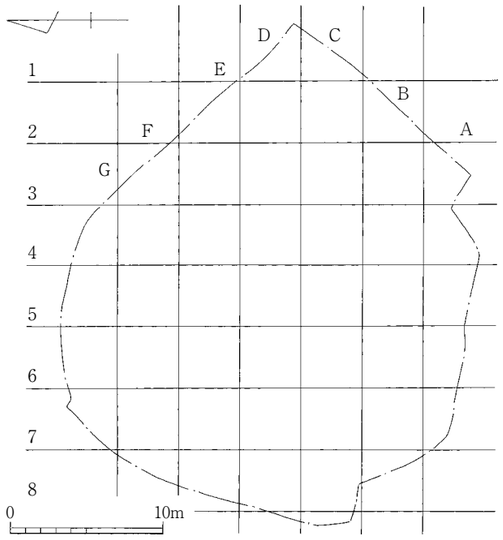
検出した遺構は、中世の土坑・ピットで、下層から縄文土器・石器が出土した。中世の土坑のうち２基は土壙墓と考えられ、１基からは白磁・六花鏡が出土した。縄文土器・石器は斜面の落ち際で比較的多く出土したが、斜面の上方ではほとんど発見できなかった。早～晩期の土器、黒曜石・安山岩製石鏃や剥片などが出土したが、層位的正位置は保っておらず、流れ込みによるものと判断される。

２）遺構と遺物

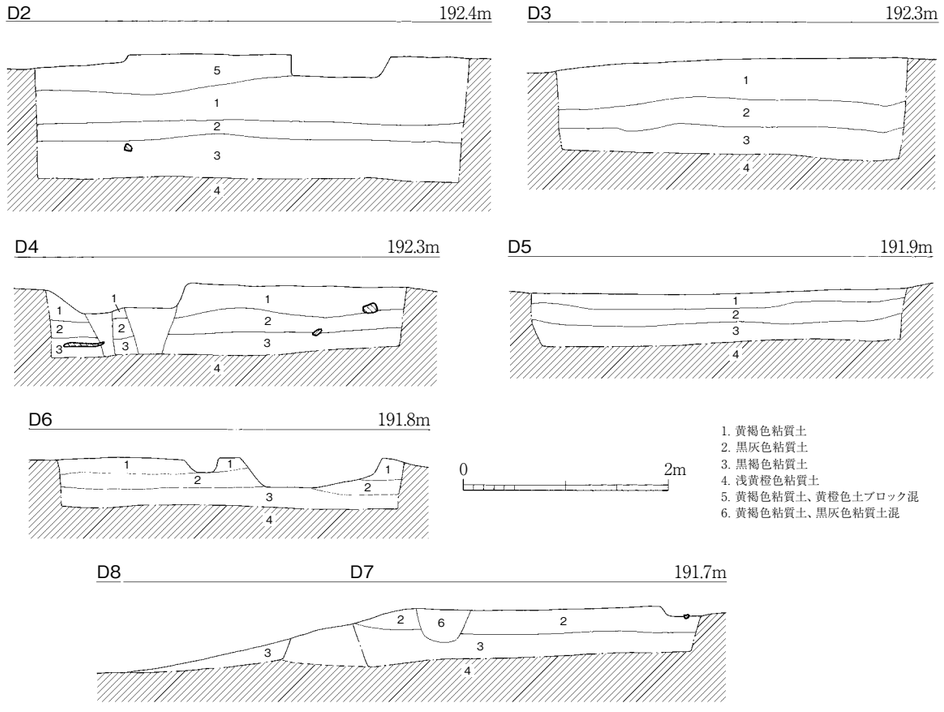
グリッドで掘削を行った縄文時代の包含層及び中世の遺構があるため、別々に報告を行う。

縄文時代のグリッド調査

グリッドは４m四方で設置し、各々0.5mのベルトを設定した（第50図）。中世の遺構掘削時に西側の標高が低い部分からより多くの縄文土器が出土していたことから､西側から順に掘削していき、ほとんど遺物が出土しなくなった時点で掘削を終了した｡包含層下から遺構は検出されなかったが、G－７グリッドでは条痕文土器がまとまって出土したため、図化している（第52図）。以下に、包含層出土土器を報告するが、先に述べたように、層位的正位置は保っておらず、流れ込みによるものと判断されるため、出土位置は記していない。



第50図　縄文グリッド配置図（1/400）



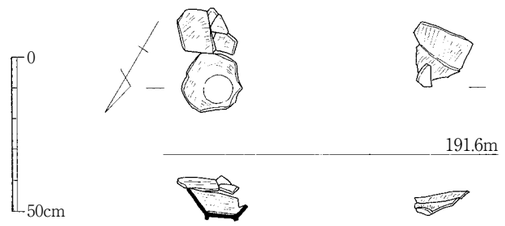
第51図　縄文グリッド北壁土層実測図（1/60）

基本土層（図版54、第51図）

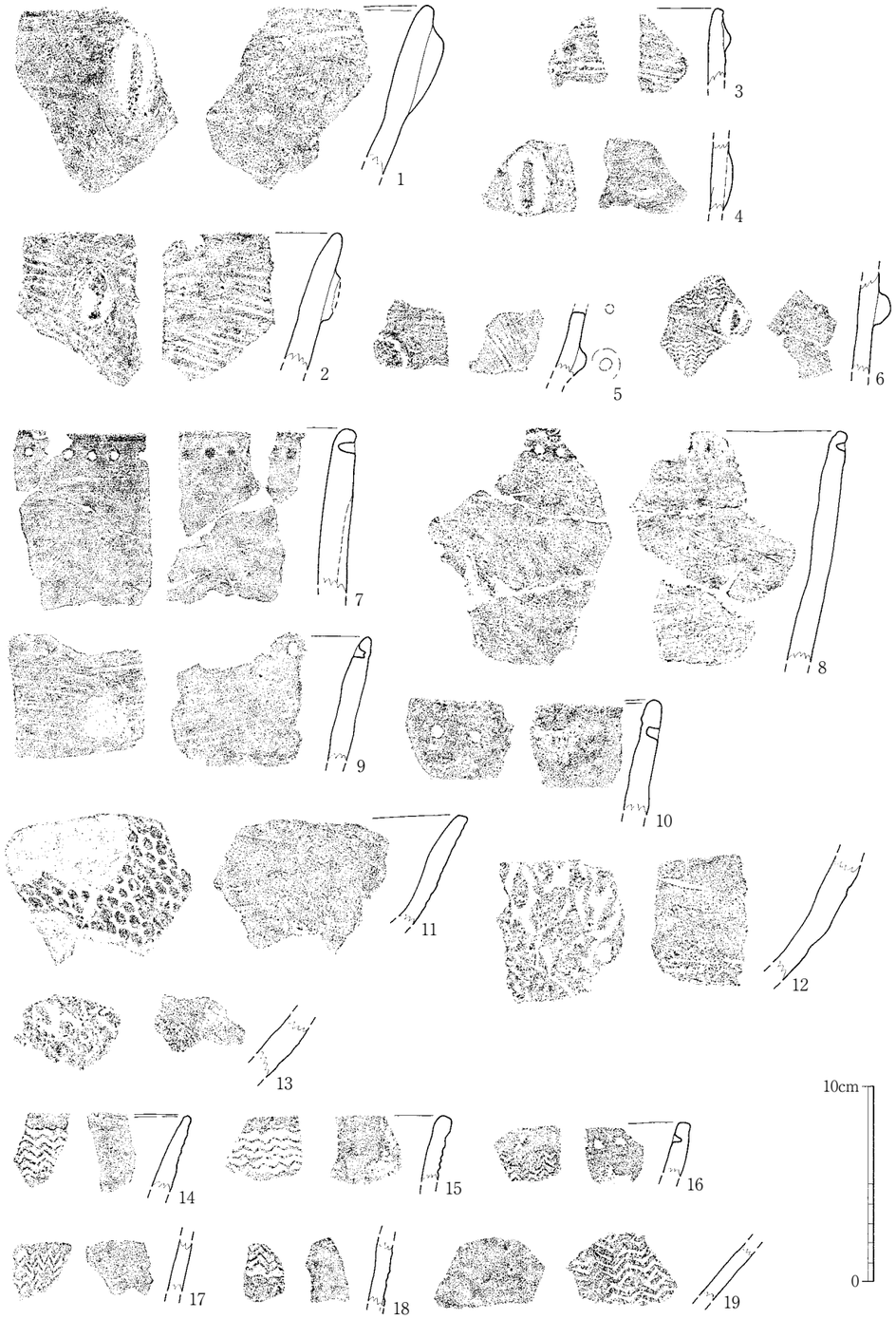
各グリッドについて壁面の土層を記録したものの、先述のように層位的な正位置は保っていないため、調査区中央のDグリッドのみ基本土層として報告する。調査区北側では上層の黄褐色粘質土がより厚く堆積しており、その下位に黒灰色粘質土、黒褐色粘質土、浅黄橙色土がほぼ同じ厚さで堆積する。他のグリッドも同様の堆積状況を示しており、地形に沿って、山側から傾斜堆積する状況が認められる。

出土遺物（図版55～58、第53～57図）

１～６は瘤状の突起を持つものである。内外面はナデもしくは条痕を施す。１は内外面ナデ､２･３は内外面に条痕が明瞭に見られる。６は外面の瘤状突起の上下に山形の押型文を施す。縄文早期



第52図　包含層土器出土状況実測図（1/20）



第53図　縄文土器実測図１（1/3）

の柏原式と考えられる。

７～10は口縁部に刺突文を持つものである。７・８・10は外面から、９は内面から刺突し、貫通しない。７・８は内面、９は外面に刺突による隆起が見られる。９は外面条痕後ナデ、他はナデを施す。

11～13は楕円形の押型文を施すものである。11は楕円の径が小さい。内面はいずれもナデを施す。いずれも器壁が厚い。

14～23は山形の押型文を施すものである。おおむね内面はナデを施す。14～16は口縁部片である。16は内面から刺突文を施し、貫通しない。19は内面に押型文、外面はナデを施す。22・23は起伏の緩い山形の押型文の上下に格子の押型文を施す。

24～35は口縁部の破片である。29の外面は条痕を施し、他はナデを施す。24～26・29は口縁部直下に外面から刺突文を施し、貫通しない。29は内面に刺突による隆起が見られる。30は口縁部に僅かにススが付着する。33は口唇部にキザミを施す。35は内外面から焼成後に穿孔を行っており、補修痕跡と考えられる。

36は沈線文を持つ口縁片である。内面に屈曲点をもって大きく外反し、外面には横方向の平行沈線文の後、山形の沈線文を施す。内面はナデを施し、口唇部にはキザミを施す。縄文早期の塞ノ神式と考えられる。

37・38は沈線文を施すものである。37は口縁部片と体部片に分かれているものの同一個体と考えられる。外面に縦方向と横方向の沈線文を施し、内面は条痕後ナデを施す。38は外面に縦方向と横方向の沈線文を施し、内面はナデを施す。外面にわずかにススが付着する。

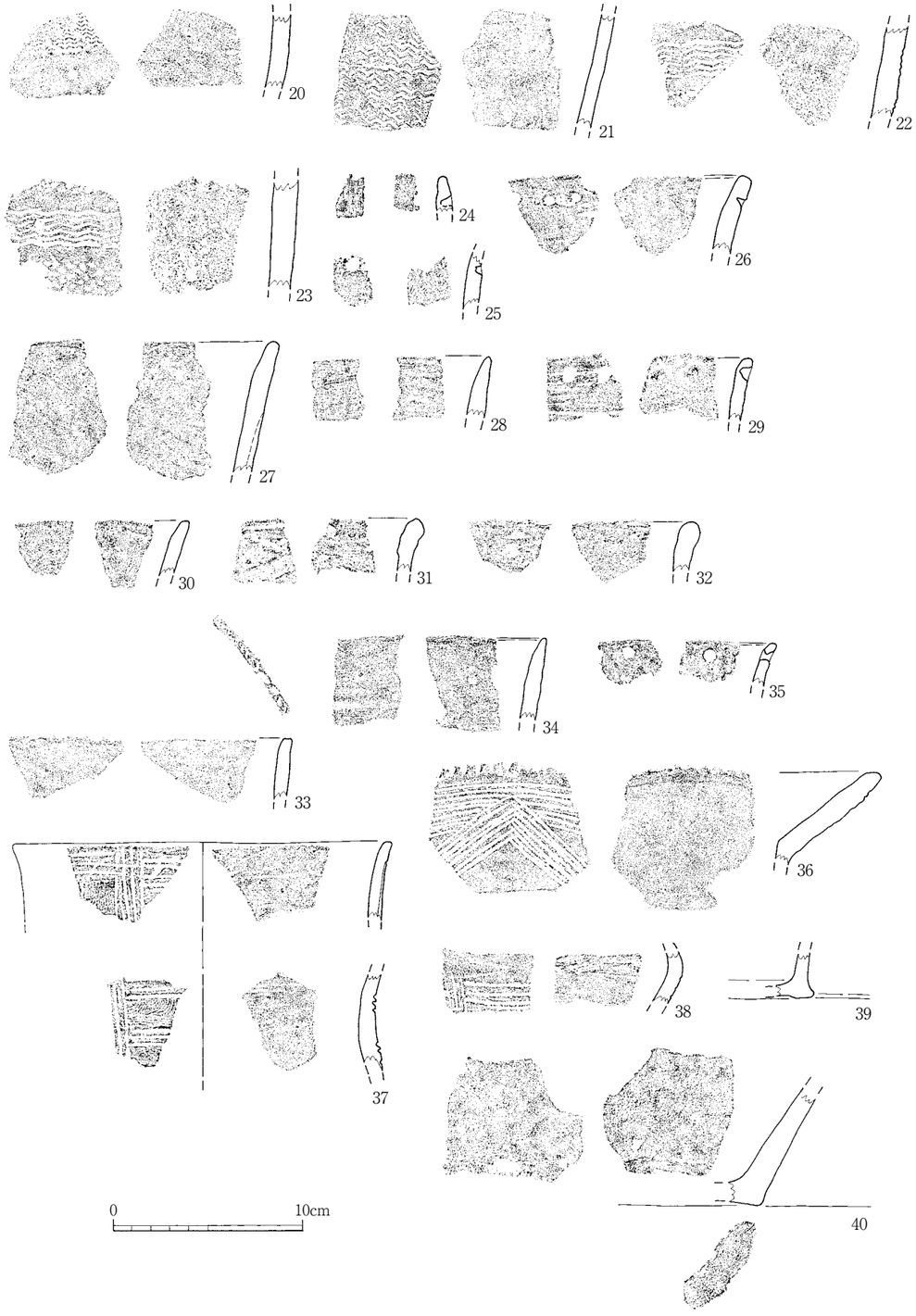
39・40は底部の破片である。いずれもナデを施す。縄文中期～後期の所産である。

41～55は条痕を施す土器である。41・42は包含層内でまとまって出土した（第52図）。41は体部で内外面共に条痕を施す。外面にススが付着する。42は底部～体部で内外面共に条痕を施し、底部外面は条痕､内面及び高台状の部分にはナデを施す。出土状況からは同一個体と考えていたものの、復元の結果、体部が接合せず別個体としている。縄文中期～後期の所産である。43～46は口縁部の破片である。43は外面条痕、内面はナデを施す。器壁の厚さから早期に属する可能性がある。44は内面条痕後一部ナデを施す。45は外面から刺突文を施し、内面には刺突による隆起が見られる。47～55は体部片である。47は外面にススが付着する。49は内外面に縦方向の条痕を施し、内面の上部は条痕後にナデを施す。53は内面に条痕後一部ナデを施す。54は体部が屈曲するもので、内外面共に条痕後ナデを施す。55は内外面共に条痕を施し、焼成後補修のための孔が穿たれる。

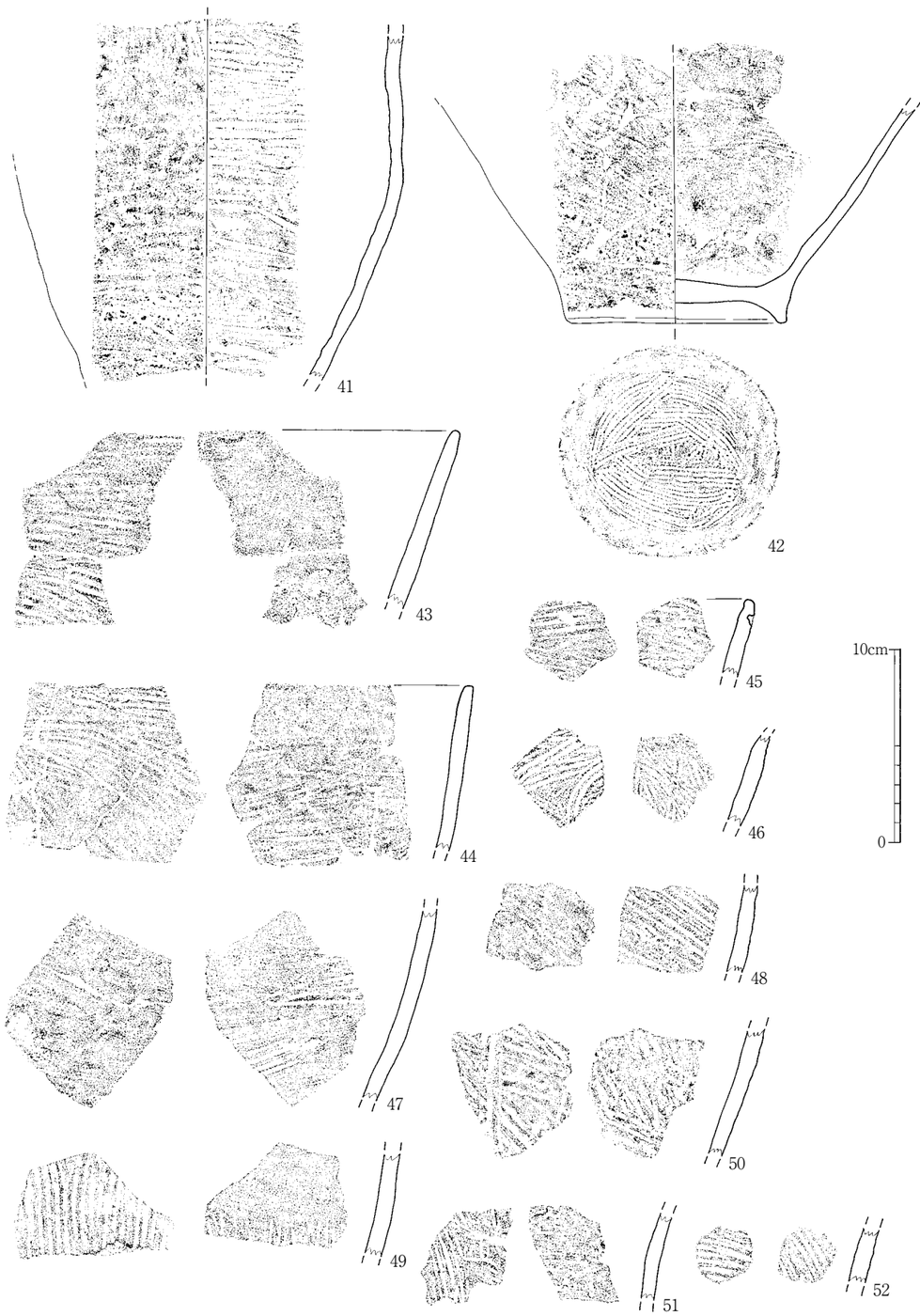
56～67は条痕後ナデを施すものである。56～62は口縁部の破片である。57は口縁部先端がやや細まっており、外面には比較的丁寧に条痕後ヨコナデ、内面ナデを施す。59･62の内面はナデを施す。63～67は体部片である。63はやや細めの条痕が見られる。67は底部付近の破片である。

68は内外面共に条痕後一部ナデを施す。外面には突帯を貼り付け、先端にはキザミを施す。外面にはススが付着する。

69～71は口縁部に孔列文を施すものである。69は外面から穿孔を行い、貫通する。４孔が遺存する。内外面共にナデを施す。70･71は内面から刺突文を施し、外面には刺突による隆起が見られる。共に内外面共に条痕を施し､口唇部にはキザミを施す。70は復元口径17.6cmを測る。１孔のみ貫通し、５孔が遺存する。71は３孔が遺存する。縄文晩期の孔列文土器であろう。

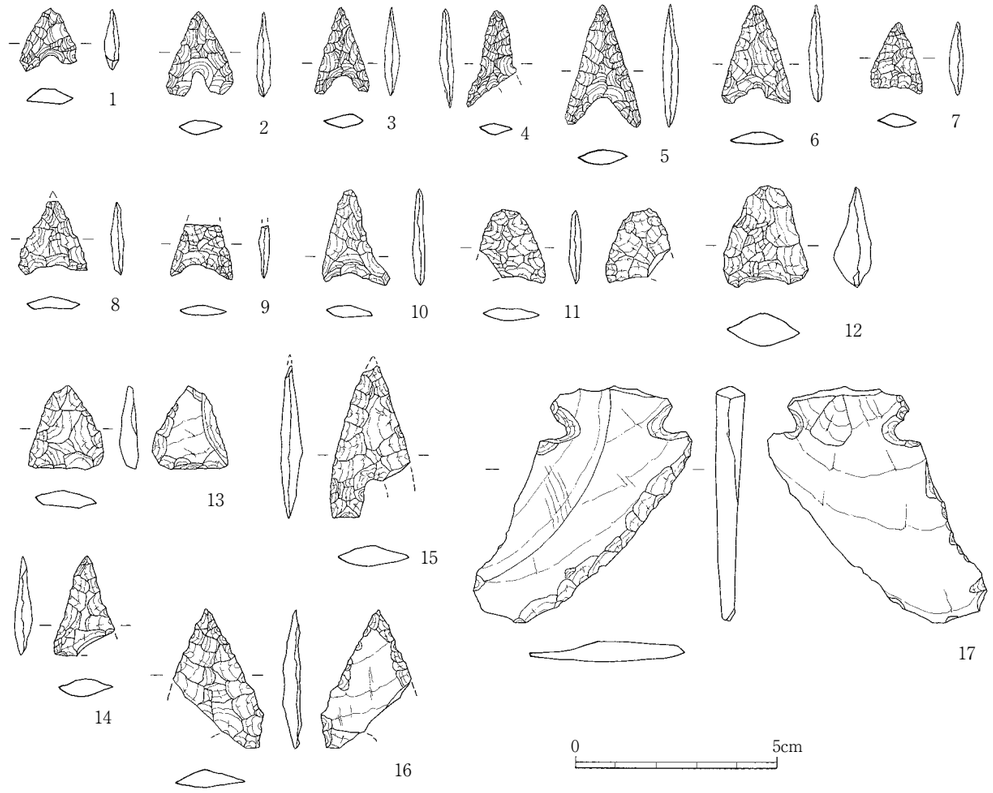


第54図　縄文土器実測図２（1/3）



第55図　縄文土器実測図３（1/3）

第56図　縄文土器実測図４（1/3）



第57図　石器実測図（2／3）

特殊遺物（図版58、第57図）

１～16は打製石鏃である。１～５は黒曜石製、16はチャート製、他は安山岩製である。１は長さ1.5cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ0.6ｇを測る。凹基式で抉り0.35cmを測る。２は長さ2.05cm、幅1.65cm、厚さ0.35cm、重さ0.7ｇを測る。凹基式で抉り0.55cmを測る。３は長さ2.1cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ0.5ｇを測る。凹基式で抉り0.45cmを測る。４は長さ2.35cm、残幅1.2cm、厚さ0.35cm、残重0.4ｇを測る。凹基式で抉り0.5cmを測る。細かい剥離を施し、刃部が鋸歯状を呈する。５は長さ３cm、幅1.85cm、厚さ0.4cm、重さ1.2ｇを測る。凹基式で抉り0.65cmを測る。細かい剥離により刃部を形成する。６は長さ2.4cm、幅1.65cm、厚さ0.35cm、重さ1.0ｇを測る。凹基式で抉り0.4cmを測る。７は長さ1.75cm、幅1.25cm、厚さ0.35cm、重さ0.4ｇを測る。凹基式で抉り0.15cmを測る。８は残長1.8cm、幅1.65cm、厚さ0.3cm、残重0.7ｇを測る。凹基式で抉り0.25cmを測る。先端が僅かに欠損する。９は残長1.4cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、残重0.4ｇを測る。凹基式で抉り0.4cmを測る。10は長さ2.3cm、幅1.65cm、厚さ0.3cm、重さ0.6ｇを測る。凹基式で抉り0.3cmを測る。右側の逆刺がやや歪である。11は長さ1.8cm、残幅1.6cm、厚さ0.3cm、残重0.7ｇを測る。凹基式で抉り0.2cmを測る。12は長さ2.5cm、幅2.1cm、厚さ0.9cm、重さ3.2ｇを測る。凹基式で抉り0.25cmを測る。剥離が粗く未成品の可能性もある。13は長さ2.05cm、幅1.85cm、厚さ0.5cm、重さ1.7ｇを測る。平基式である。裏面に主要剥離面を残し、先端が尖らないことから、

未成品の可能性もある。14は長さ2.45cm、残幅1.5cm、厚さ0.45cm、残重0.9ｇを測る。平基式である。15は残長3.7cm、残幅1.9cm、厚さ0.55cm、残重2.5ｇを測る。凹基式で抉り0.95cmを測る。大型の鏃形鏃である。16は長さ3.4cm、残幅2.25cm、厚さ0.45cm、残重2.2ｇを測る。凹基式で抉り0.4cmを測る。裏面に主要剥離面を残す。裏面も刃部には剥離を施していることから、未成品ではなく剥片鏃と考えられる。いずれも包含層出土。17は石匙である。縦5.7cm、横5.4cm、厚さ0.65cm、重さ14.2ｇを測る。縦長剥片を利用し、上部が打点である。両側から大きく剥離を施すことで抉りを形成する。右側面には刃潰しのための剥離を施し、左側面には使用痕が認められる。包含層出土。

中世の遺構

土坑

調査区内で２基の土坑が検出された。

１号土坑（第58図）

調査区の北西端に位置する。規模は直径0.9m、深さ0.2mの円形土坑である。北東側が径0.2m、深さ0.15mのピット状に凹む。調査区外に延びるため不明確だが、出土遺物から墳墓の可能性が高いものと考えられる。

出土遺物（図版58、第59図）

１は土師器の皿である。口縁部が僅かに歪む。底部には板圧痕及び糸切りの痕跡が残る。口径９cm、器高1.5cmの完形品である。２～５は青磁碗である。２・４は龍泉窯系、３・５は同安窯系である。２は接合しないものの４と同一個体の可能性がある。４は口径16.6cm、器高6.9cmで６割が遺存する。内面に輪花文を施す。５は口径16.6cm、器高7.2cmで８割が遺存する。外面に櫛目文、内面に花文と点描文を施す。

３号土坑（第58図）

調査区の中央に位置し、規模は1.7×0.6m、深さ0.2mの長楕円形土坑である。北側から青磁碗の破片、中央で石礫が共に床面から0.1mほど浮いた状態で出土している。墳墓であった可能性もある。

出土遺物（第59図）

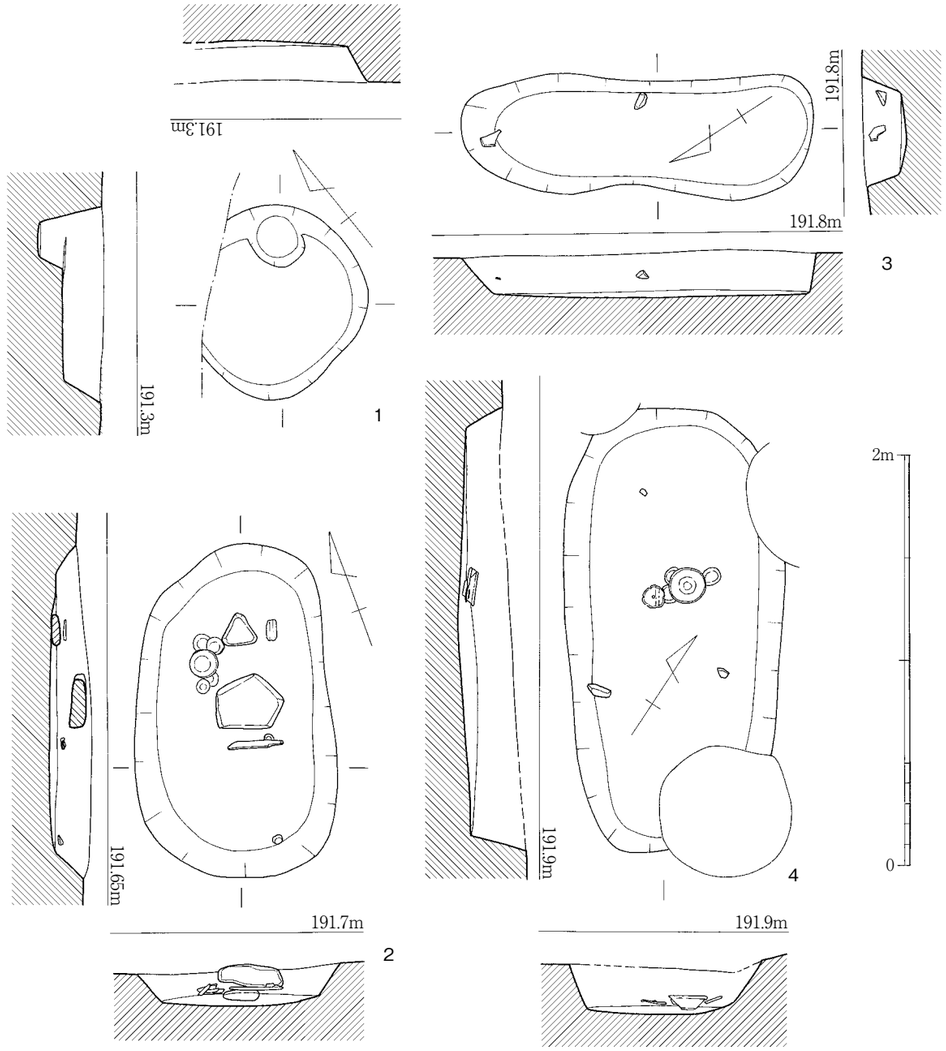
６は青磁碗である。復元口径16cmで２割が遺存する。外面に輪花文を施す。

墳墓

調査区内で２基の土壙墓が検出された。

２号土坑（図版55、第58図）

調査区西寄りに位置し、規模は1.65×１m、深さ0.2mの隅丸方形土坑である。北側中央では床面に平面三角形の石が置かれており、枕と考えられる。その東側では鉄分、西側では土師皿が出土した。墓壙中央からは床面より0.1mほど浮いた状態で、0.3m四方ほどの石が出土しており、遺体の上部に置いていたものと考えられる。石の南側からは刀子が出土した。



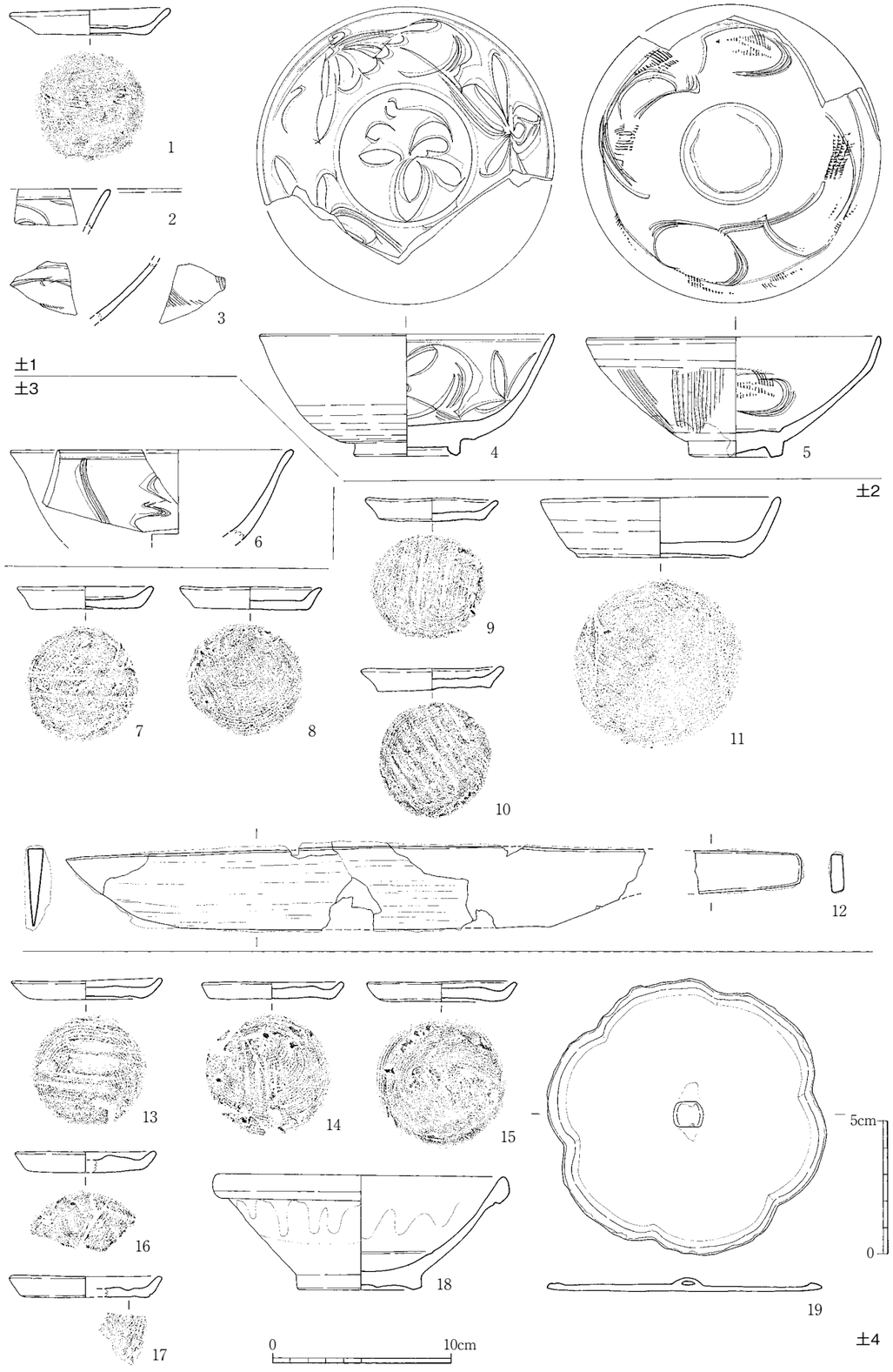
第58図　１～４号土坑実測図（1／30）

出土遺物（図版58・59、第59図）

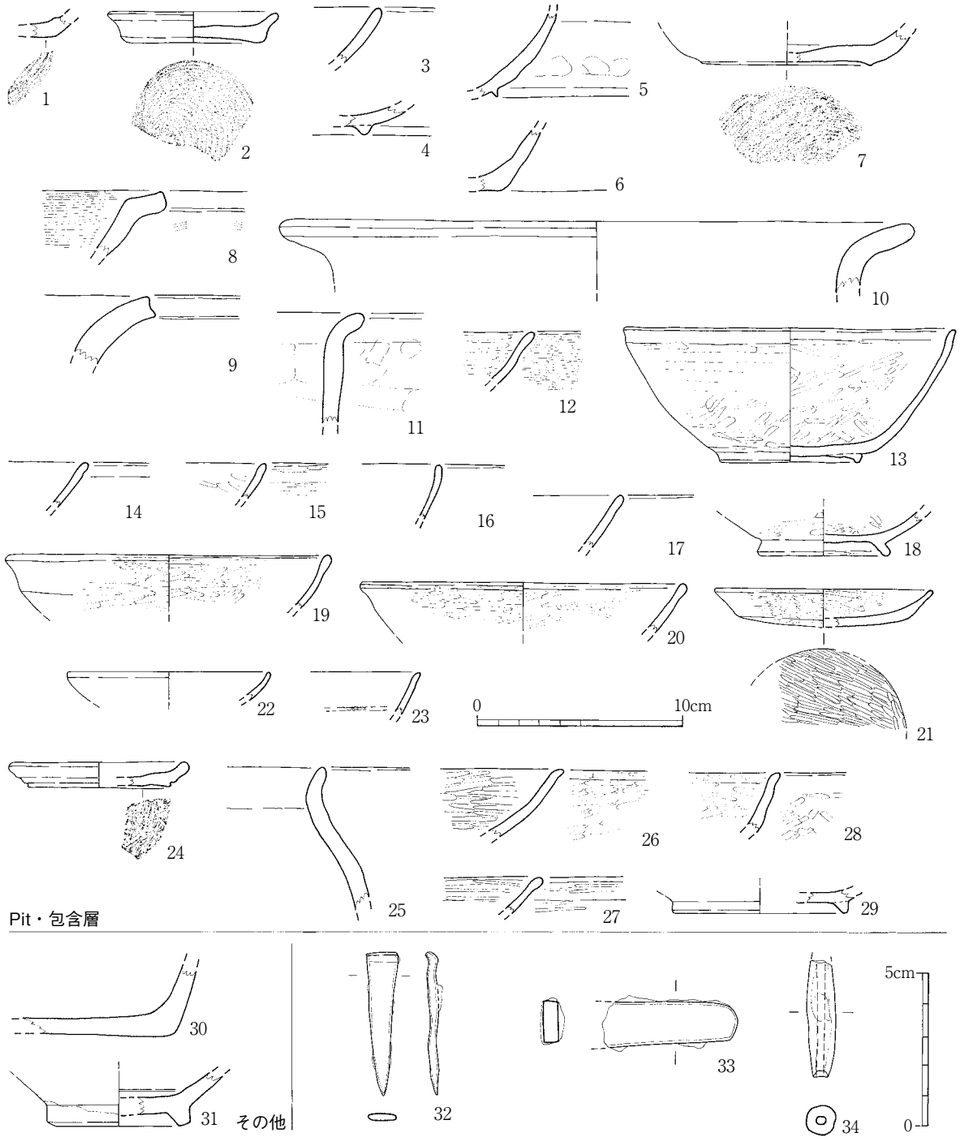
７～10は土師器の皿である。いずれも糸切りで板状圧痕の痕跡が残る。口径は7.5～8.0cm、器高は1.3～1.4cmですべて完形品である。11は土師器の坏である。口径13.4cm、器高3.4cmで完形品である。底部には糸切りの痕跡が残る。12は刀子である。刃部長18.2cm、幅3.1cm、残重73ｇで８割が遺存する。刀身には全体的に木質が遺存しており、鞘に入っていたことがわかる。

４号土坑（図版55、第58図）

調査区の中央に位置し、規模は2.15×1.05m、深さ0.25mの隅丸方形土坑である。墓壙の中央やや



第59図　中世遺物実測図１（12・19は1/2、他は1/3）



第60図　中世遺物実測図２（33・34は1/2、他は1/3）

北寄りの位置で、土師皿、白磁碗、六花鏡が出土した。六花鏡直下では、人骨がわずかに残存しており、太さから前腕骨の可能性がある。土層観察からは、木棺の痕跡はなく、土壙墓と考えられる。頭部を北にし、腹部付近に副葬品が配置されていたと推測される。埋土は灰褐色砂質土で、炭化物を少量含む。

出土遺物（図版59、第59図）

13～17は土師器の皿である。口径8.0～8.6cm、器高1.0～1.2cmで、16は４割、17は２割が遺存し、他は完形品である。13は白磁の南側、14は西側、15は北側から出土した。18は白磁の碗である。口径16.6cm、器高6.5cmで完形品である。玉縁の口縁を持ち、胴部下半から底部にかけては露胎となる。

19は青銅製の六花鏡である。完形品であるが、状態が悪くいくつかの剥離が見られる。径10.3cm、厚さ0.2cmで、重さは55.5ｇである。鈕部分は1.1×0.9cm、高さ0.5cmで、0.5cmの孔が通る。

その他の遺構・出土遺物（図版59、第60図）

ピット等出土遺物

１・２は土師器の皿である。共に糸切りの痕跡が残る。２は復元口径8.4cm、器高1.5cmで、６割が遺存する。共にP－42出土。３～５は土師器の椀である。いずれも摩滅し、５は外面に指頭圧痕が見られる。３はP－42、４はP－56、５はP－55出土。６・７は土師器の坏である。内外面ナデを施し、底部に糸切りの痕跡が残る。６はP－41、７はP－19出土。８は土師器の鍋である。内面はハケメを施し、外面は摩滅するが僅かにハケメが残る。P－７出土。９～11は土師器の甕である。９・10は口縁部が大きく外反し、ナデを施す。11は体部に削り状のナデを施す。９はP－31、10はP－４、11はP－24出土。12～20は瓦器椀である。16･17は摩滅するものの、いずれもミガキを施す。12・20はヘラミガキ、ほかはやや幅の広いミガキである。13は復元口径16.2cm、器高6.5cmで、５割が遺存する。体部上半外面は横方向のミガキ、外面の底部付近には一部ケズリが残る。19は体部に僅かに段を持つ。12・19はP－31、13はP－57、14・15はP－46、16はP－49、17はP－３、18はP－33、20はP－41出土。21は瓦器皿である。外面には底部までヘラミガキ、内面はやや幅広のミガキを施す。22は白磁の皿か。P－36出土。23は青磁の碗である。P－27出土。24は土師器の皿である。復元口径8.8cm、器高1.2cmで、２割が遺存する。底部には糸切りの痕跡が残る。25は土師器の甕である。口縁部ヨコナデ、他はナデを施す。26～29は瓦器椀である。ミガキを施し、口縁端部が外湾する。29は底部で復元底径8.5cmである。24～26は黒灰色、27～29は黄褐色土出土。30は土師器の鍋か。全面をナデで仕上げる。撹乱出土。31は青磁の碗である。底部内面には掻き取りが見られる。検出面出土。

特殊遺物

32は釘か。頭部がやや曲がる。撹乱出土。33は刀子の柄か。P－21出土。34は土錘である。径0.95cm、孔径0.3cm、重さ3.1ｇを測る。焼成は良好でほぼ完形品である。

３）小結

下伊良原竹の内遺跡Ⅳ区は、縄文時代の包含層と中世の遺構が確認された。遺跡全体の評価は４区に分けて報告をしているためおわりに譲ることとし、ここではⅣ区の特徴を簡潔にまとめておきたい。

縄文時代は、包含層のみが検出された。この包含層は層位的な正位置を保っていないことから、より上方からの流れ込みによる２次堆積と考えられる。土器は早期の柏原式や塞ノ神式が出土しており、時期が判別できるものの中では最も多く出土している。前期段階の土器は明確に判別できるものはないが条痕文の土器の中に含まれているものと考えられる。中期～後期段階では底部片が出土している。晩期段階では孔列文土器も一定程度出土している。伊良原地区内の他の遺跡の出土土器等を考慮すると、伊良原の地域内では縄文時代を通じて生活の痕跡があったことが想定される。本区で検出された縄文土器も遺跡全体及び地域全体のコンテクストの中で評価すべきであろう。そのことから、本区のまとめとしては、早期、中期～後期、晩期の土器が出土しているという指摘のみに留めておきたい。

中世は､土坑並びに土壙墓が検出された。土坑は形態や出土遺物から土壙墓となる可能性があり、その場合本調査区では、狭い範囲ながら４基の墳墓が営まれていたこととなる。時期は12世紀中頃～後半の貿易陶磁が出土しており、土師器等からも13世紀前半には造営されたものと考えられる。墳墓は六花鏡や刀子が副葬されており、さらに貿易陶磁が出土していることからも、地位の高さを示唆するものである。ピットもいずれも中世に属するものであるが、掘立柱建物となるものは判別できなかった。中世の遺構面も東側の川に向かって緩やかに傾斜しており、集落であったとしても縁辺部に位置づけられる。いずれにしても、縄文時代と同様、遺跡全体及び地域全体の中で評価すべきものであることから、ここでは中世前期において集落の縁辺と考えられる場所で墳墓が検出されているという事実を指摘するのみに留めておきたい。

２．下伊良原宮久保遺跡

１）調査の概要

この遺跡は国道496号線が祓川と交わる荒戸橋の南西に迫り出した丘陵上に位置する。それまでの協議の過程で、試掘調査を要する場所として20工区（地点）と仮称していたところである。伐採作業が進んだということで伊良原ダム建設事務所から現地確認を依頼され、平成26年９月30日に踏査を行ったところ、すぐに巨石とそこへ向かう石階段が目に入った。また、地形測量図で見る以上になだらかな尾根線が長く続いていて、関連するあるいは別種の遺構の存在も推測されたことから、改めて本調査の対象として設定したものである。

発見時のスナップ（20140930）

また、この調査の過程で、南側山裾に小型の炭焼窯があることを知り、このダム建設予定地内では炭焼窯の調査をあまり行っていないこともあってこれも調査対象に加えた。

ここには構造物は計画されておらず、緊急性を要しなかったことから発掘調査には翌年度、平成28年１月22日に着手した。休憩場所を設営した山麓から平坦に近い尾根の先端付近までの比高は約40ｍを測る。かなりの急傾斜であるため伐木搬出路を利用して重機で登攀路を仮整備、その後は人力で階段を掘削したが、それでも一気に登った後は息が切れるほどであった。

祭祀遺構の発掘調査は３月25日に一端終了したが、南麓の炭焼窯の調査を次年度に計画していたことから、図面等の記録作成も最終的には翌29年度に完結することとなった。

炭窯の調査は５月13日から着手した。炭窯にたどり着くには祭祀遺構付近まで上り、さらに急傾斜の斜面を下りる必要があるため、そのアクセスの整備、窯内部に堆積した枝葉の除去、地形測量から開始し、最終的に調査を終了したのは６月17日であった。

２）祭祀遺構および周辺の調査

尾根線上に露出する花崗岩の立石とその前面に築かれた基壇、そこへ至る石階段を確認した。立石には加工痕といったものはなく、さらに尾根線上にも小振りであるが岩脈といったものが現れたことなどから、この立石は人為的なものではないと判断された。

細長く続く尾根線上にトレンチあるいはグリッドを設定して尾根線上を広く表土掘削したが、他の遺構はまったく存在せず、表土あるいは表土下の風化土層中から若干の縄文土器および土師器の出土を見たのみである。また、表土中にビール瓶が一部露出していて、祭祀行為の終末を暗示する遺物となった。

なお、地山は花崗岩由来のいわゆる真砂土である。

立　石

正面となる南東から見ると、最大幅１ｍほどの巨石が南側へ傾いて、1.8ｍほどの高さで露出、その周りに接するような形でやや小振りとなる石材が立つあるいは傾いて位置する。石材はいずれも花崗岩で、加工痕は認められない。特に、正面に並び立つように見える３つの花崗岩は、本来同一であった岩が割れたように思われた。岩そのものあるいはまたその間隙を信仰の対象としたものであろう。

基　壇

立石の間の間隙の直前に上面を水平にした自然石を階段状に２つ置いて祭壇としたようである。この花崗岩は幅0.4ｍ前後、厚さ0.2～0.3ｍほどの大きさで、角張っていて川原石ではないが、かといって明らかな加工痕といったものは認められない。角張った石材を選別したのであろう。

この祭壇に接するような位置で、幅２ｍ、高さ0.5ｍ前後の２～３段の直線的な石組を置く。これも主として角張った花崗岩を用い、特に最上段の４つの石材は上面を水平にしようとしたように見受けられる。また、この石組の南端は花崗岩の転石、北端はその下位が地山に潜り込む自然石に接するように組み上げている。

この石組の南東部には、現況地形測量図でも窺えるように東西幅1.5ｍ、南北幅5.5ｍほどの三日月形のテラスが作られ、立石の正面となるその中央付近で石階段が頂部を覗かせていた。このテラスの先端北側には１～２段の石列が弧状に置かれていたが､石階段から南側には認められなかった。崩落したと想定しても、それだけの石材を検出していないことから、本来的に北側だけに設けた構造物と考えている。また、このテラス内の表土を除去したところ、特に北側で人頭大以下の花崗岩角礫が多く現れたが、南側にはそれがないことから敷石といった物ではなく、地山に含まれる自然の礫であったと考えている。

石階段

上記弧状の石列を西端として、現況でも処々で石材が覗いていて、直ぐに石階段の存在が知られた。西端の石段を１段目とすると、３段目は主要な石材を全て失っており、２段目を除いていずれも一部を失っているようである。

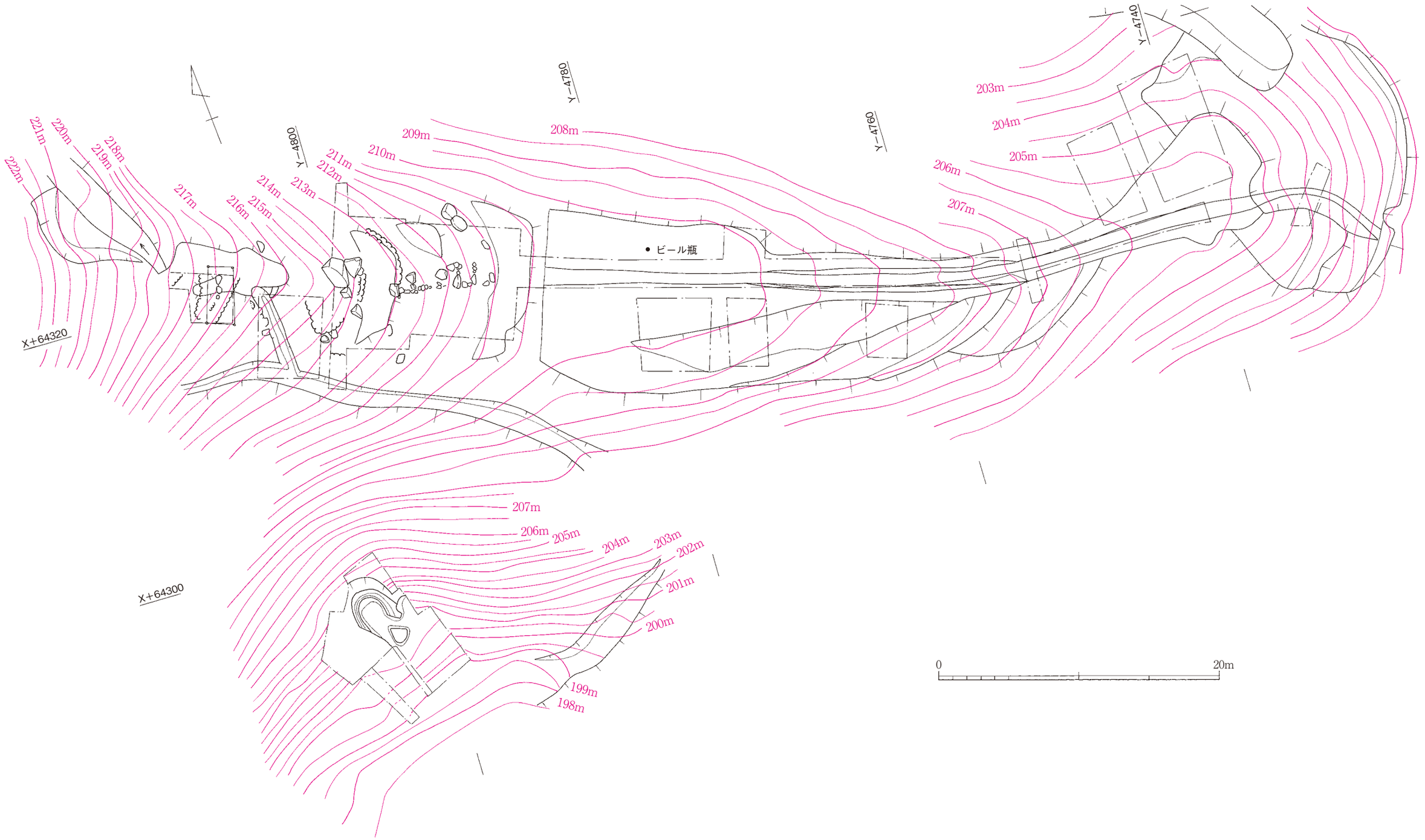
３段目の東西および４・５段目間は南北両側に並べられた小礫がほぼ残存していて、これらから石階段の幅は1.8ｍほど、石段の間はそれぞれの東端付近で測って1.0～1.2ｍほどである。最東端の６・７段間は1.3ｍほどとやや長くなっている。１～７段間の延長は6.8ｍ、石段上面で比較して比高差はほぼ2.0ｍである。

なお、石階段を敷設するにあたって、部分的に小規模な掘り込みを伴うが、側石などは腐葉土の上に置かれたものもあって、簡易な構造物といってよい。

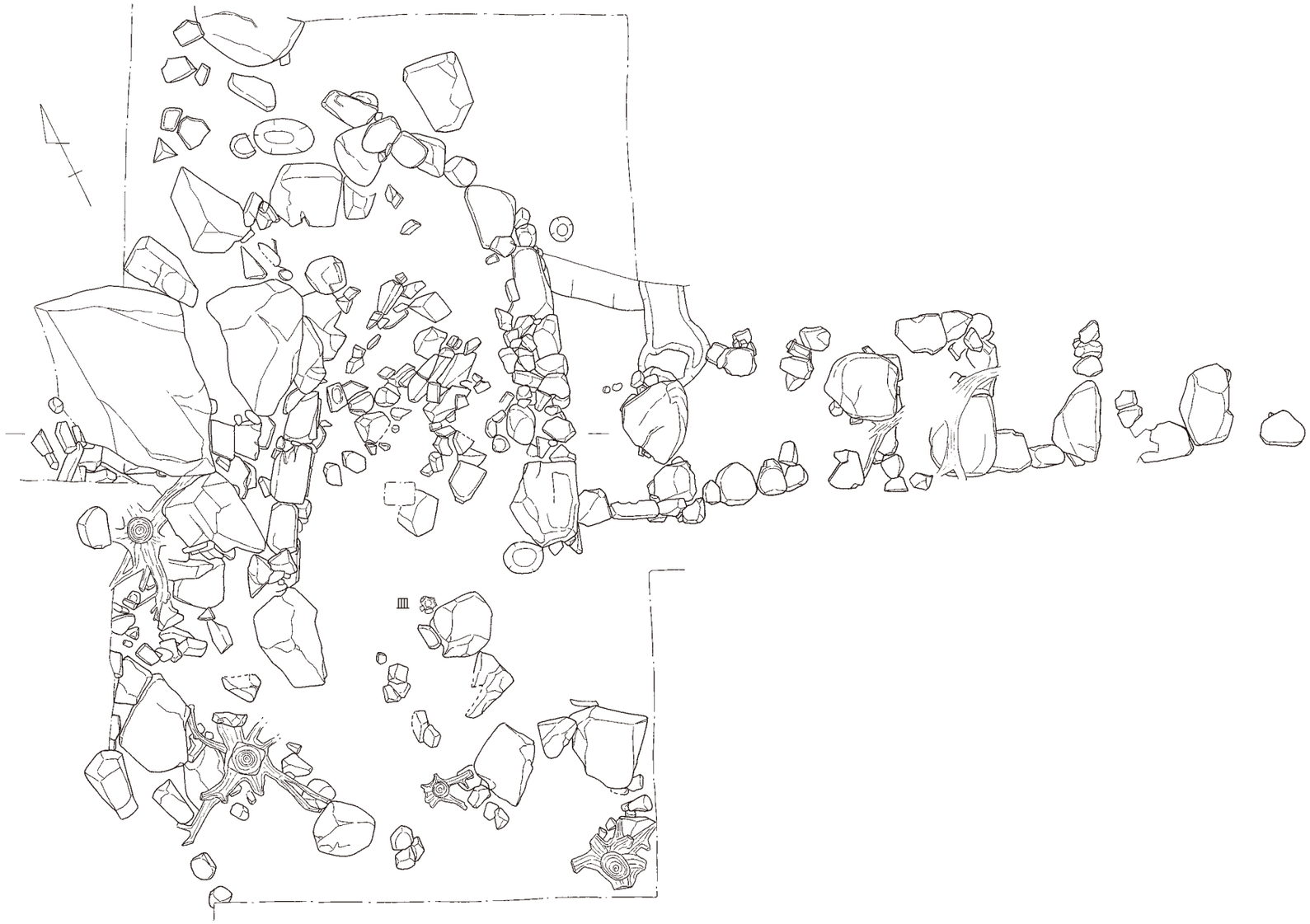
立石の西立石は狭い尾根線上にあり、南北両側は急勾配で落ちていく。その西側は勾配を急にした尾根線が続き、立石背面10ｍほどまでの表土を除去したが、その中でも転石とともに部分的に風化していない花崗岩脈が部分的に現れた。大きく露出する岩脈は他に認めていないが、この立石が自然に生じた構造であるとの確信を強くした。

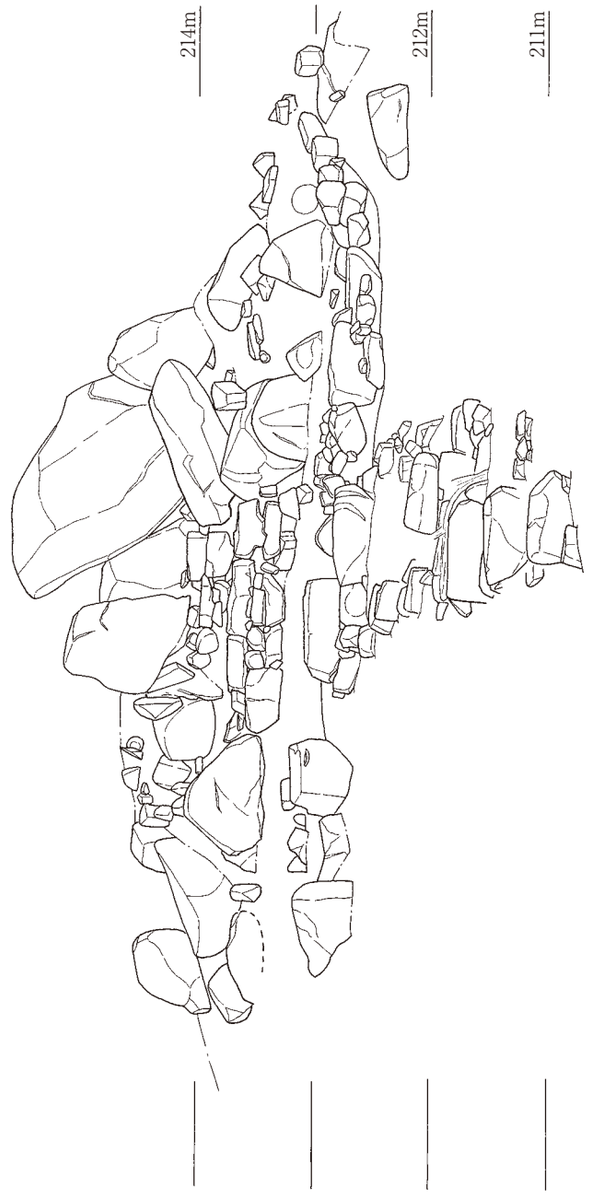
出土遺物

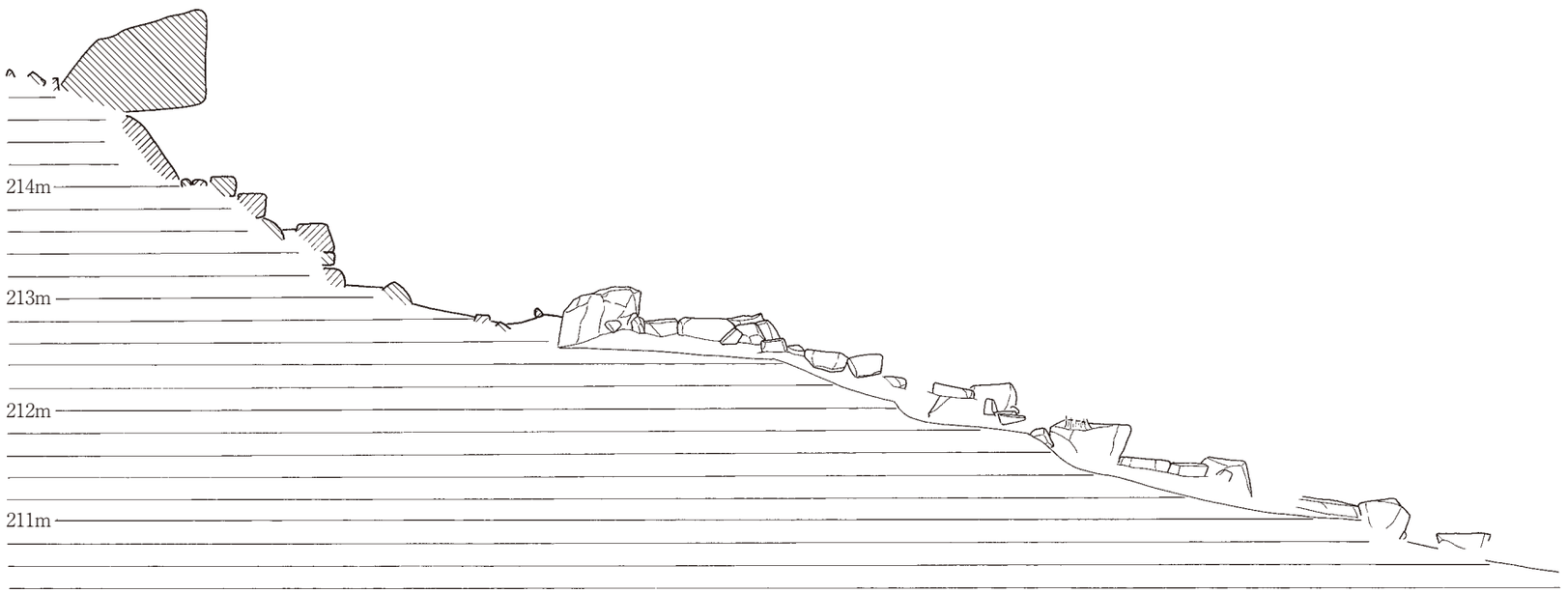
立石前面の直線的な石組の上、祭壇の周辺で２の染付が、また、その東のテラス面に相当する範囲内の南側で完形に近い土師器皿（杯）が出土した。また､石階段付近から東側のトレンチ･グリッドでも若干の出土遺物があり、ここでまとめて紹介する。

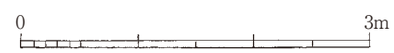


第61図　下伊良原宮久保遺跡地形測量図（1/300）









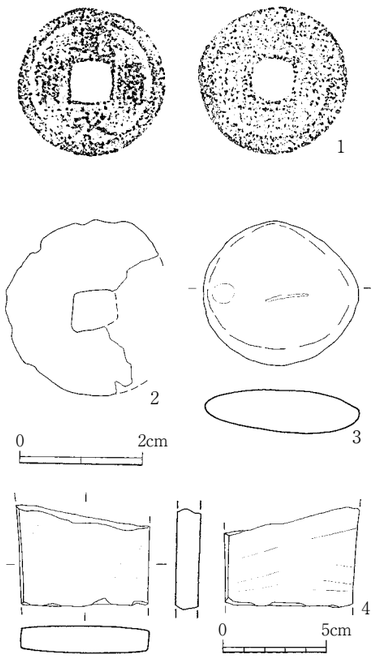
第62図　立石およびその周辺実測図（1/60）

銅銭・鉄銭（図版66、第63図１・２）

１は「基壇前面地山上」出土の寛永通寶。外径2.4cm、縁の厚さ１㎜で薄手の感がある。文字・郭・縁ともに甘くなる。２は弧状石列の西側背面出土の鉄銭。外径2.9cm、縁の厚さ２㎜で、Ｘ線ＣＴスキャナーで見たが文字や郭・縁の膨らみがない。

石製品（図版66、第63図３・４）

３は直径2.3～2.5cm、最大で0.7cmの厚さをもつ碁石。平面的には歪みをもって正円ではなく、灰黒色を呈する。「基壇上」とあり、弧状基壇の内側からの出土。４は石英粒を噛む灰白色～灰色の石英斑岩で、図上下両側で折損するが、表裏・左右両側面ともに非常に滑らかとなる。仕上げ砥であろう。「石階段付近表土」からの出土である。



第63図　出土銭貨および石製品実測図（1/1、1/3）

土器（図版66、第64図）

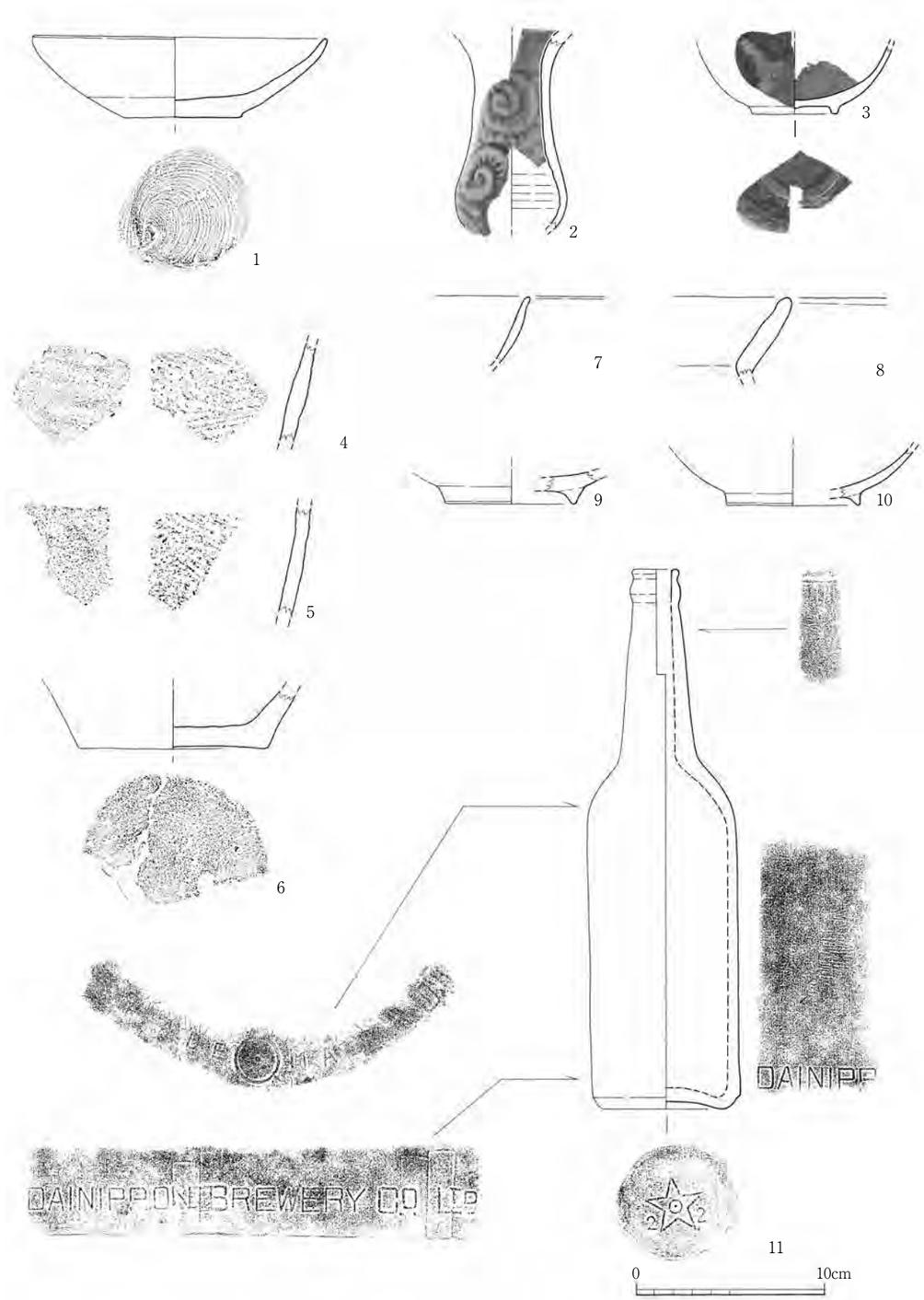
１は立石前面のテラス中、南半部から出土した土師器皿あるいは杯である。底部は完存、口縁部の１/２弱が残存する。復元口径15.7cm、底径6.0cm、器高4.2cmを測る。外底面は細かい回転糸切り痕がよく残り、体部外面は下端にやや粗い横撫でが見えるものの、それ以上は丁寧な横撫でで仕上げる。内面では底部の器表が荒れているが、体部はごく弱い横撫で痕が連続する。器形を見ると、口縁部をわずかにつまんで内彎気味とするが、それ以下は直線的になる。微砂粒を含むが胎土は精良といってよく、全体に雑な作りといった感がある。

２は蛸唐草で飾る染付瓶で、体部の張りが弱い。残存部上端に２条、蛸唐草施文部の上端にも１条の圏線を巡らせ、発色は灰青味、緑味が強い。内面は露胎で、体部の膨らむ付近には水挽き痕が明瞭に残り、それ以上では絞り痕が薄く見える。施文は渦巻き状に描いた線の外側に短い単線を付した、この種の文様としては最も単純化したものといってよかろう。

３は陶器椀の１/４の残片。胎土は精緻で、削出高台を含めて器形は整い、高台内中央に削り残しの小さな突起部がある。釉は薄い部分で茶褐色に、厚い部分は茶黒色に発色する鉄釉が全体に掛かるようであるが、内底面には藁灰釉が掛けられて灰白色となる。畳付だけが露胎、高台内まで施釉する（杭６付近出土）。

４・５は縄文土器小片。いずれも粗製土器で、外面に横方向の篦削りが顕著で、内面は撫でのようである。６は１/２強が残存する底部片。明瞭な調整痕は判然とせず、また胎土は良好というべきであるが縄文土器片と思われる。外面全体が火熱によると思われる赤味をもつ。

７は端部がわずかに外彎する土師器椀の口縁部小片。胎土精良で調整も丁寧だが、外面の一部に煤が付着する。９は断面が三角形となる低い貼付高台をもつ土師器椀底部片で、胎土は精良で器表が荒れる。内外面ともに灰黄褐色を呈したようであるが、外面が赤味を帯びる。10も９に似た器形の土師器椀底部小片であるが、胎土に２㎜前後の石英粒などが目立つことから異なる個体と思われる。これは器表が荒れていて、高台付近が赤変する。



第64図　出土土器・ガラス瓶等実測図（1/3）

８は長く伸びて端部に面取りを施す土師器鍋の口縁部小片。全体に淡灰褐色といった色調となり、胎土は良好といってよいが黒色・白色の微砂粒を多く噛む。残存部は全体に横撫でのようである。

ガラス瓶（図版66、第64図）

11は濃い茶褐色半透明の麦酒ビン。肩部に「ＴＲ｜ＡＤＥ⊙ＭＡ｜ＲＫ（ＤＢのロゴ）」、底部から0.6cm上に段があり、その1.5cm上に下端を揃えて、「ＤＡＩＮＩＰＰＯＮ｜ＢＲＥＷＥＲＹ　ＣＯ｜ＬＴＤ」と浮き彫りが施される。上段の文字は突出度が弱く不鮮明。また、それぞれに挿入した「｜」は型の合わせ目の位置を表現したものであるが、合わせ目の下端両側には幅1.2～1.5cm、高さが4.7・4.4cm、4.4・3.9cmと異なるそれぞれ長方形のわずかな凹みが見られ、型を合わせるための工夫であろう。底にも円形に１条の凸線が巡り、中に星形、その内部に中央に珠点をもつ円文を置き、星形の左右にそれぞれ「２」を配する。この星形と肩部の⊙との間に規則性はない。また、底部の圏線は中心を外れている。

ガラスに気泡は見えないが、表面に微細な凹凸が連続する部分が見られる。

３）炭窯の調査

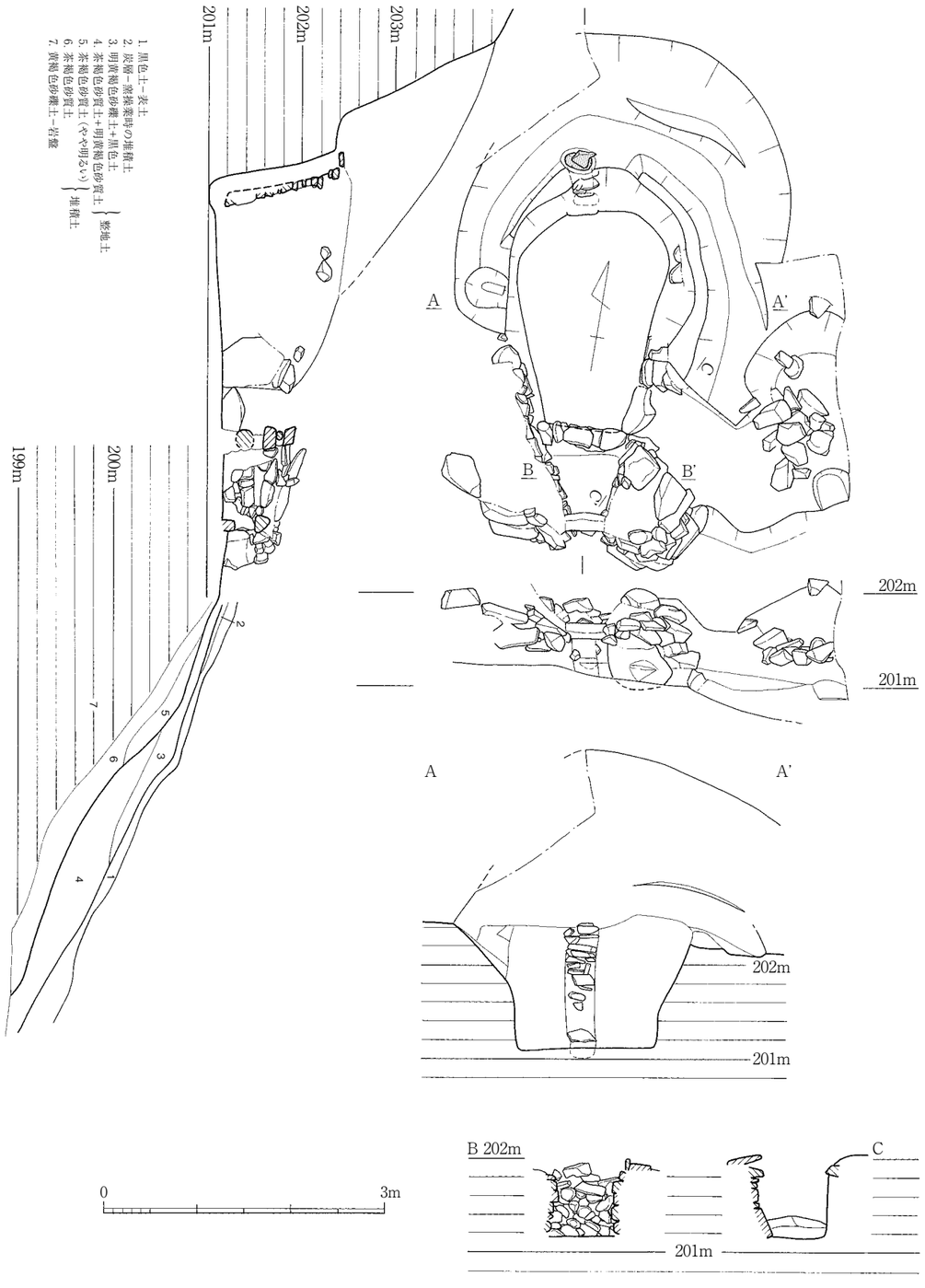
炭窯は、祭祀遺構が存在する西側から東側に向かって延びる丘陵南側斜面の谷に面した部分（標高200.5～204.5m）において１基を確認した。窯内部は１/３ほどが埋没しており、堆積土の上層から板状の鉄片が出土したものの、ほかに窯の存続時期を具体的に示す遺物は出土していない。窯の構造や形状からみる限りにおいては現代（昭和期）に構築され廃れた可能性が高い。

炭窯本体は、斜面の堆積土とその下層の基盤層である花崗岩バイラン土を二段に掘り込んで作られ、その際に生じた排土は谷側（焼成部側）に盛土整地されていた。窯本体の平面形は杓文字形で、全長5.8m、最大幅3.6m、深さ1.3mを測り、壁の周囲には下端幅15～25cmの排水溝をまわしている。炭窯本体は安定した岩盤が掘削されているため素掘りのままであり、盛り土される斜面下方の焼成部付近は盛土と積石、煙道部分には積石が伴う。

焼成部の床面と壁面はともに熱を受け黒く硬化している。床面には天井を構成した焼けた粘土塊が、製造された炭を搬出した後に落ち込んでいる状況であった。煙出しは奥壁中央に掘り込まれ、煙道の手前側に厚さ５～10cmの角礫を積みつつ粘土で充填して煙道を構築している。煙道の径は約20cmを測る。また、煙道の煙出し部分は雨水の浸入を防ぐため、長さ16cm、厚さ５cmの蓋石で塞がれていた。窯本体の右側壁の焚口寄り（南東部）には素材・炭の搬出入用の幅80cm、長さ1.2mの通路が設けられる。窯を操業していた際にこの通路を塞いでいた不整形の角礫は、通路につながる窯の東側の土坑内に集積されている状況であった。

燃焼部の焚口は土と石積みで築かれ、開口部は幅25cm、高さ26cmを測り、框石と楣石を伴う。平面形状は最大幅75cm、奥行60cm、高さ80cmの逆台形状で、基本的に角礫を積んで形成されるが、右側壁は堆積土である茶褐色土が露出している。また燃焼部の奥壁は径７～10cmほどの団子状の粘土塊を積み上げて形成し、部分的に角礫を混入させて作り上げている。

焚口の前面表土下とその下位の茶褐色砂質土（堆積土）の間には、①明黄褐色砂礫土と黒色土が混じった厚さ10cm～20cm層、②茶褐色砂質土に明黄褐色砂質土が混じった厚さ20～50cmの層が存在し、いずれも炭窯を築く際の整地層とみられる。また、これらの整地層上の、焚口から80cm下方までは操業時に掻き出した炭層（厚さ１～４cm）が存在する（第65図）。



第65図　炭窯実測図（1/60）

4）小　結

遺跡の性格　巨大というほどでもないが、自然の立石に向かう石段、そして祭壇や基壇といった構成から自然石に対する祭祀遺跡であることは容易に理解される。巨石を神籬・依り代として祭る遺跡は、今般世界遺産となった沖の島（福岡県宗像市）など全国各地に所在するのであろうが、ことさら著名な遺跡を持ち出すまでもなく、昨年度報告を行った上伊良原高木神社でも拝殿下層で巨石というほどでもない立石の前で焼土や炭が確認されて９世紀前半に比定できる須恵器壺も近接して出土した。今年度刊行する「伊良原Ⅷ－石造物と小堂－」の中でも、山中の自然石の上に置かれた石祠などは、元来は岩そのものを磐座として祀っていたものが時代とともに神とその居場所である社により可視化したものと考えることもできよう。

祭祀の時期　立石直下の祭壇付近から出土した染付瓶は肥前磁器で、渦巻き状に描いた線に短線を付しただけの単純化した蛸唐草文からみて19世紀以降のものと思われる。これは器形からしても祭祀の跡を示す遺物としてよかろう。

また、立石東の円形基壇内部に相当する部分から出土した土師器皿（杯）について、このように口径・底径の寸法が大きく異なる形態の土師器皿は15世紀以降に現れるとされる。ただ、一般的には器壁が薄く、体部から口縁部にかけて直線的あるいはわずかに内彎して立ち上がり、轆轤上で成形時にできる連続的な凹凸が顕著であって、本例のような形態のものは珍しいように思う。過去の伊良原ダム関係の報告書にも掲載されていないようで、この土器の帰属時期の判断は困難である。

大日本ブリュワリー（大日本麦酒株式会社）は明治39年（1906）に大阪麦酒・日本麦酒・札幌麦酒が合併して誕生、昭和24年（1949）に解体されて日本麦酒・朝日麦酒に分割されたという。このビール瓶は立石から20mを隔てた表層に半ば埋もれていたものであり、祭祀行為に用いられたとの確証はない。

縄文土器２点はさておいて、熱を受けて赤変する破片を含む３点の土師器椀、そして口縁部片１点だけが出土した土師器鍋はどうであろうか。ここから出土した鍋片は、下伊良原高木神社境内でも一定の量が出土し、同神社が「宮園」から「貞応年間（1222～24）」に遷座したという伝承を裏付ける遺物として報告したが、本遺跡はその下伊良原高木神社の真北200mほどに位置する。土師器椀も同様の時期に比定できようが、神社が遷座した頃の土器が少量とはいえこの山頂から出土したことは、あるいは当時もこの立石に対する何らかの祭祀的行為がなされた可能性も考えられなくもない。ただし、それは頻繁な、継続的なものではなかったようである。

平成７～10年度に実施されたダム建設に伴う民俗文化財調査では当遺跡は記載されておらず、当時の協力者であった地元の方々の記憶からも漏れていたというべきであろう。わずかな出土遺物から推測して、鎌倉時代そして江戸後期ないしは末期頃には祭祀行為が行われたようであり、昭和20年頃までは存在が認識されていた可能性があるということであろう。

なお、大正８年（1919）刊行の伊藤尾四郎編『京都郡誌』（1975年復刻版を使用）「第八章神社第三説節村社」中の「（下伊良原）高木神社」の項には明治45年（1912）に「伊良原村大字下伊良原」各所の山神社等12所の無格社を「合併」したとして、字名・地番を記すが、その中にこの字名「宮久保」、「1560・1561番地」は見えない。

Ⅳ　おわりに

本報告は、平成24年度から平成28年度の間に調査を実施した、下伊良原竹の内遺跡Ⅰ～Ⅳ区と、平成27・28年度実施の下伊良原宮久保遺跡の記録である。

下伊良原竹の内遺跡は、祓川右岸の丘陵上の緩傾斜地に立地し、ここは大字下伊良原と上伊良原の境界付近で、下伊良原の最上流域にあたる。周囲は浦向地区と呼ばれ、これまで伊良原小学校を始め、農協支所、郵便局等が集中する下伊良原の中心地でもあった。

調査はダム建設工事の工程上優先順位の高いⅡ区から開始し、Ⅳ区、Ⅰ区と一時二班体制で調査を行い、伊良原小学校校舎部分にあたるⅢ区についてはやや期間を開けて建物の撤去を待って実施した。結果的にこれが伊良原ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の最終地点となった。

調査の結果、縄文時代の集石遺構１基、土坑６基と、各区で遺物包含層を検出した。時期は早・前期を中心とするが、中期から一部晩期の遺物も出土しており、ことに中期の春日式の完形深鉢が出土したⅡ区２号土坑が特筆され、墓である可能性も指摘される。中世では掘立柱建物跡２棟、土壙墓７基、土坑多数等である。また、昭和期の炭窯１基の調査も行った。

縄文時代と中世が遺跡の中心的な時期となることは、伊良原地区にほぼ共通する特徴である。下伊良原竹の内遺跡は、山間部で平地が少ないこの地区ではやや開けた地形であり、近代以降の下伊良原地区の中心地であったことは先述の通りであるが、中世については検出した掘立柱建物跡が１棟分であるなど、生活の痕跡を直接示す遺構がやや少ない印象を受ける。Ⅲ区で確認した多数の土坑は、周囲の遺跡と比較してもやや特殊な遺構と思われるが、性格等についてはひとまず保留とせざるを得ない。

下伊良原宮久保遺跡は、祓川左岸の丘陵尾根上にあたり、谷底の平地からの比高差約40mの高所に立地する。自然石に対する祭祀遺構と、これに近接して昭和期の炭窯１基を確認した。祭祀遺構からは中世前期以来の断続的な遺物が出土しており、地域の人々の信仰の在り方を示すものであるが、この頃に遷座したとされる下伊良原高木神社とは至近の距離であることから、これと関連して考えるべきものかもしれない。

今回報告する下伊良原竹の内遺跡Ⅲ区が、平成18年度以来継続してきた伊良原ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の最終地点であったことは既に述べたが、報告書についても、今年度別冊で報告する『伊良原Ⅷ』と本書で完結する。地区住民の移転前の平成７～10年度に先行して実施した民俗文化財の調査成果（福岡県教育委員会『伊良原　―民俗文化財の調査―』福岡県文化財調査報告書第143集　1999）とも併せて、祓川上流域の狭隘な谷地形で周囲を豊かな自然で囲まれつつも交通の要路でもあった当地で、縄文時代早期以来現代にいたるまで人々が活動的に生活をしてきた歴史の一端を、一定程度は明らかにし得たものと考える。

図　版

１　下伊良原竹の内遺跡遠景
（南西から）

２　Ⅰ区A地点全景（北東から）

３　Ⅰ区Ａ地点全景（南西から）

図版２

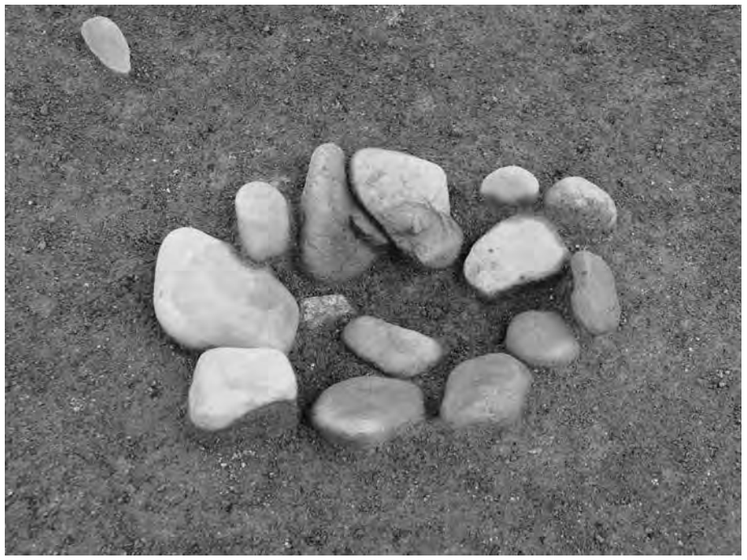
１　Ⅰ区グリット全景（東から）

２　１号土坑（南から）

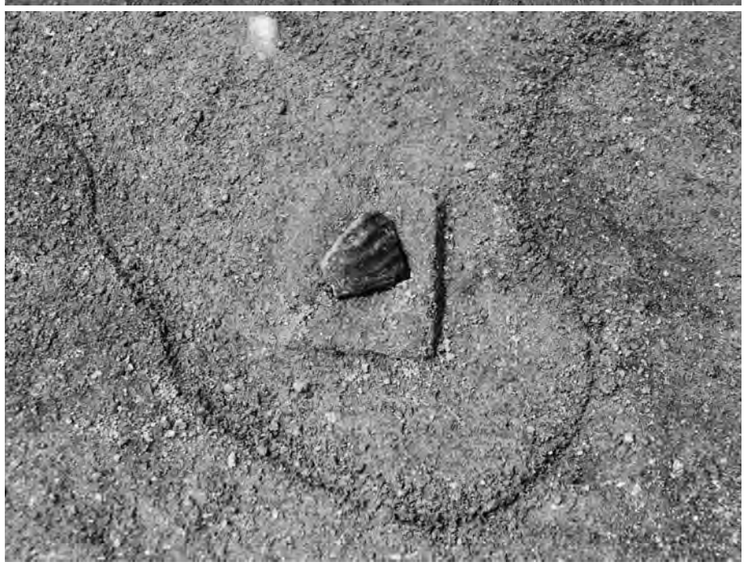
３　３号土坑（北から）

図版３

１　集石遺構（北から）



２　集石遺構（西から）



３　遺物出土状況（南から）

図版４

１　１号掘立柱建物跡（南から）

２　１号土壙墓（北西から）

３　１号土壙墓副葬品出土状況
（南東から）

図版５

１　２号土壙墓土層（南から）

２　２号土壙墓（南から）

３　１号溝（南から）

図版６

１　２号溝（南から）

２　Ⅰ区Ｂ地点全景（北から）

３　炭窯全景（南西から）

図版７

１　炭窯焚口（西から）

２　炭窯奥壁と左側壁（南西から）

３　炭窯の煙道断面（北から）

図版８

第７図

第９図－12

第９図－１～12

第９図－19

第９図－13～23

第10図－27

第10図－24～35

第10図－36

第10図－36～48

第10図－41

出土遺物１

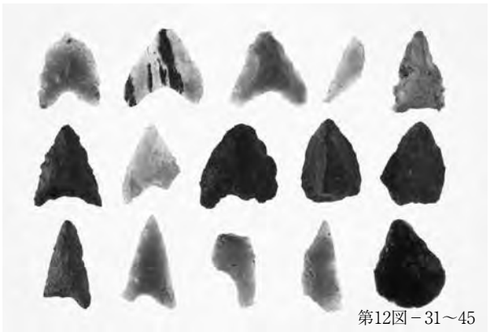
図版９

第12図－１～15

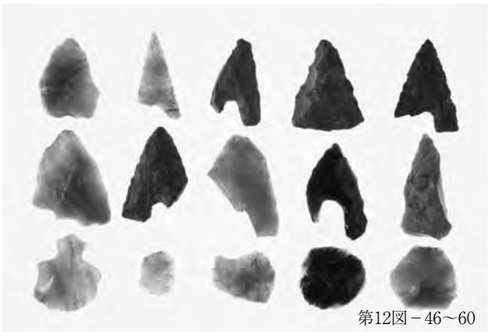
第13図－70～80

第12図－16～30

第14図


第12図－31～45

第17図－１


第12図－46～60

第17図－２

第12・13図－61～69

第17図－３

第17図－４

第17図－５

出土遺物２

第17図－6

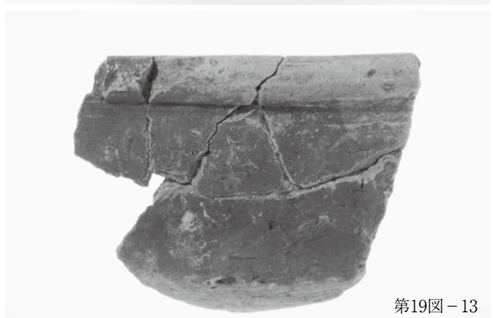
第17図－8

第17図－7

第18図

第19図－10

第19図－15

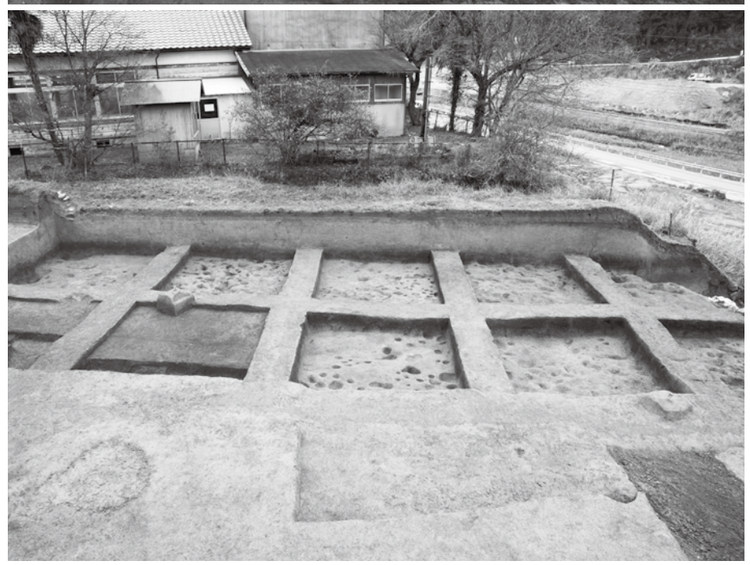


第19図－13

出土遺物３

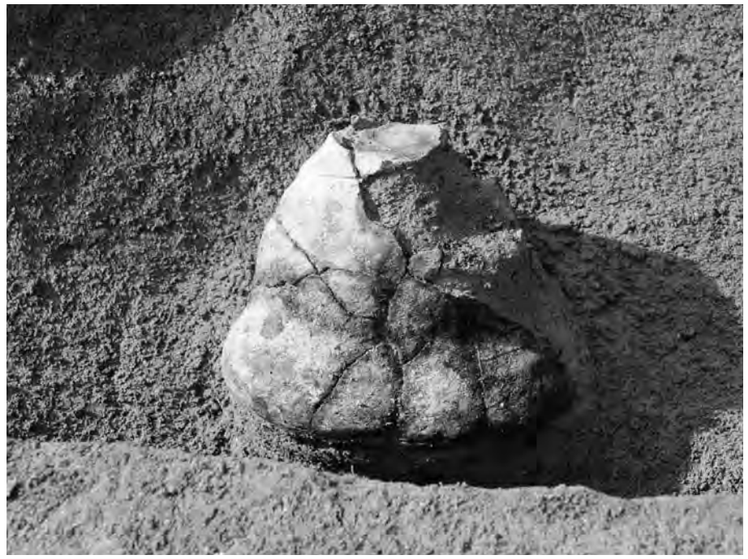
１　Ⅱ区全景（東から）

２　東壁土層（西から）



３　グリット掘り下げ状況
（西から）

図版12



1　２号土坑遺物出土状況
（西から）

2　土坑検出状況
（右下：３号土坑、
左：５号土坑　西から）

3　５号土坑（南東から）

図版13

1　Ⅱ区全景（東から）

2　１号掘立柱建物跡
（西から）

3　石垣（北西から）

図版14

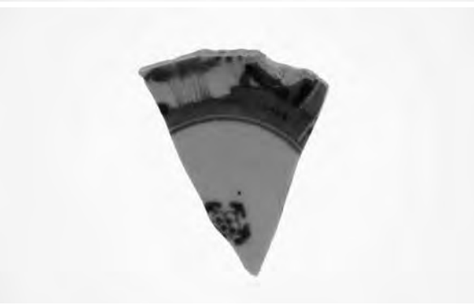
第29図－１・３～11

第31図－１～12

第29図－２

第36図－１・２

第30図－１～13



第36図－10

出土遺物４

図版15

１　Ⅲ区遠景（南上空から）

２　Ⅲ区遠景（北西上空から）

３　Ⅲ区全景（北西上空から）

図版16

1　グリッド全景（南西から）

2　グリッド全景（南から）

3　グリッド掘削作業状況
（南から）

図版17

1　Ａ３－１Gr土層（南から）

2　Ａ３－１Gr土層（東から）

3　Ａ４－１Gr土層（南から）

4　Ａ４－１Gr土層（東から）

図版18

1　Ａ５－１Gr土層（南から）

2　Ａ５－１Gr土層（東から）

3　Ａ６－１Gr土層（北から）

4　Ａ６－１Gr土層（西から）

図版19

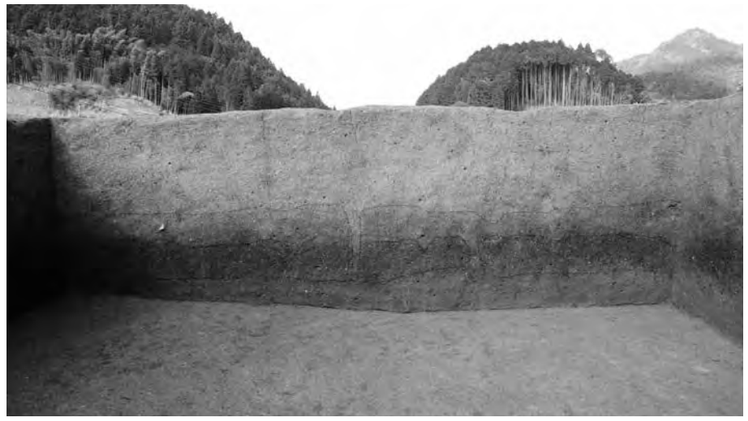
1　Ｂ２－１Gr土層（南から）

2　Ｂ２－１Gr土層（東から）

3　Ｂ３－１Gr土層（南から）

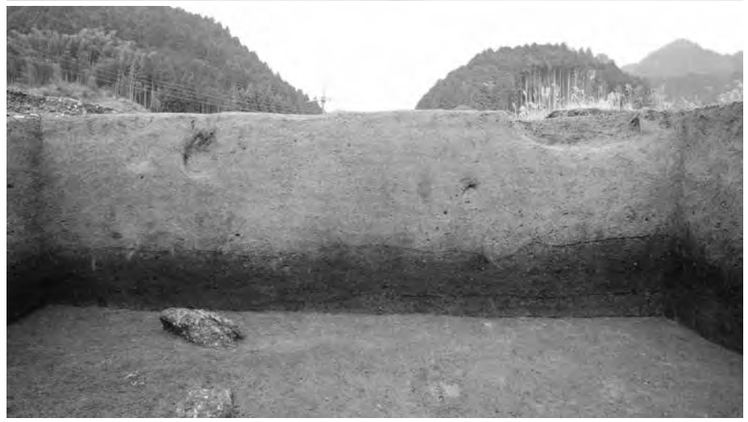
4　Ｂ３－１Gr土層（東から）

図版20



1　B４－１Gr土層（南から）

2　B４－１Gr土層（東から）



3　B６－１Gr土層（南から）

4　B６－１Gr土層（東から）

図版21

1　B７－１Gr土層（北から）

2　B７－１Gr土層（西から）

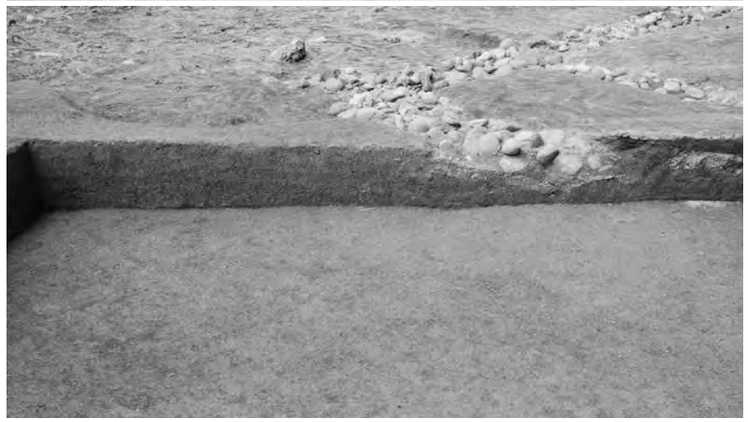
3　C１－１Gr土層（南から）

4　C１－１Gr土層（東から）

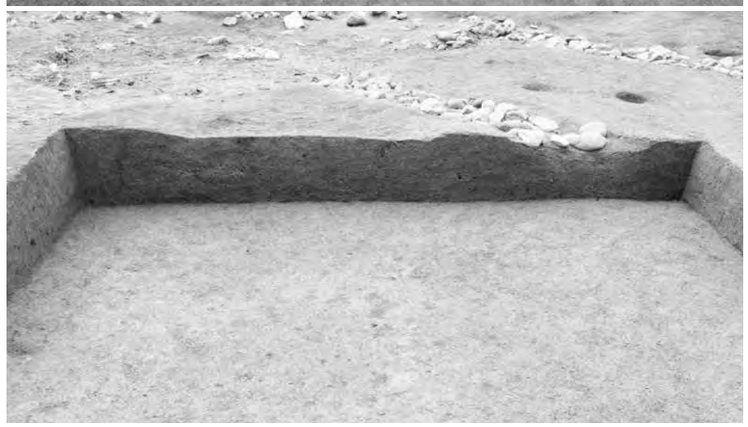
図版22

1　C２－１Gr土層（南から）

2　C２－１Gr土層（東から）



3　C３－１Gr土層（南から）



4　C３－１Gr土層（東から）

図版23

1　C５－１Gr土層（南から）

2　C５－１Gr土層（東から）

3　C６－１Gr土層（南から）

4　C６－１Gr土層（東から）

図版24

1　Ｄ１－１Gr土層（南西から）

2　Ｄ１－１Gr土層（北東から）

3　Ｄ２－１Gr土層（南から）

4　Ｄ２－１Gr土層（東から）

図版25

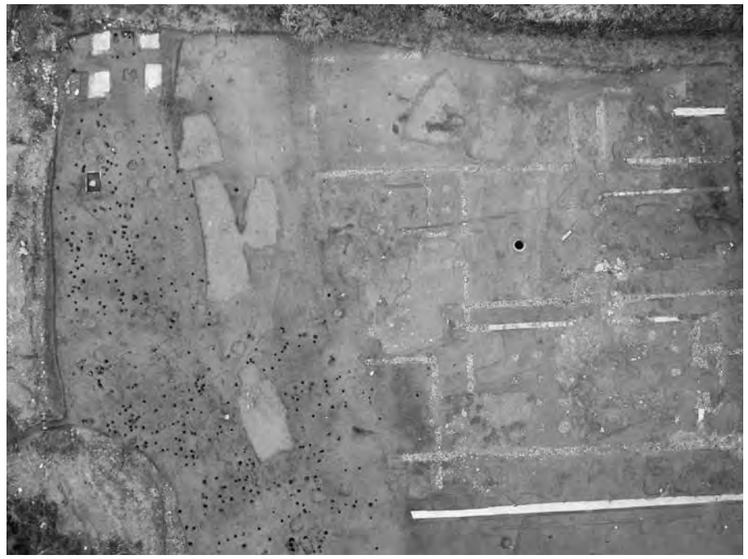
1　Ｄ３－１Gr土層（南から）

2　Ｄ３－１Gr土層（東から）

3　Ｅ３－１Gr土層（南から）

4　Ｅ３－１Gr土層（東から）

図版26



1　土坑群全景（上空から）

2　土坑群全景（上空から）

3　土坑検出状況（北東から）

図版27

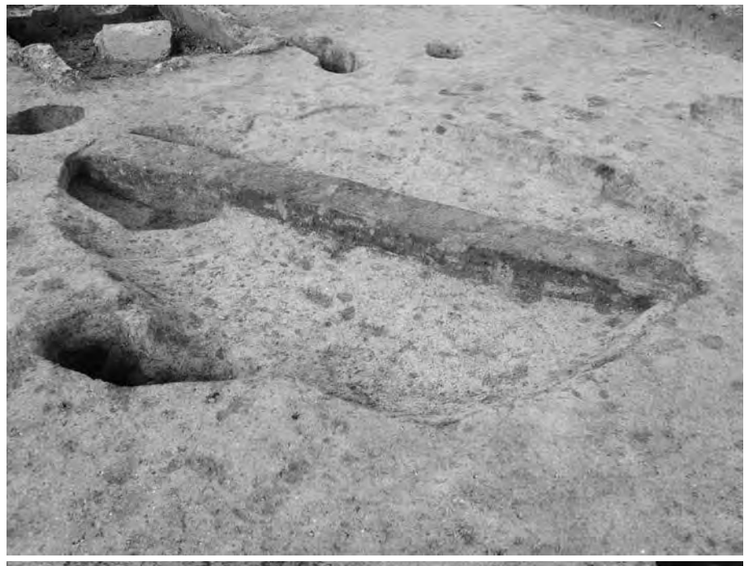
1　1号土壙墓（南西から）

2　1号土壙墓（北西から）

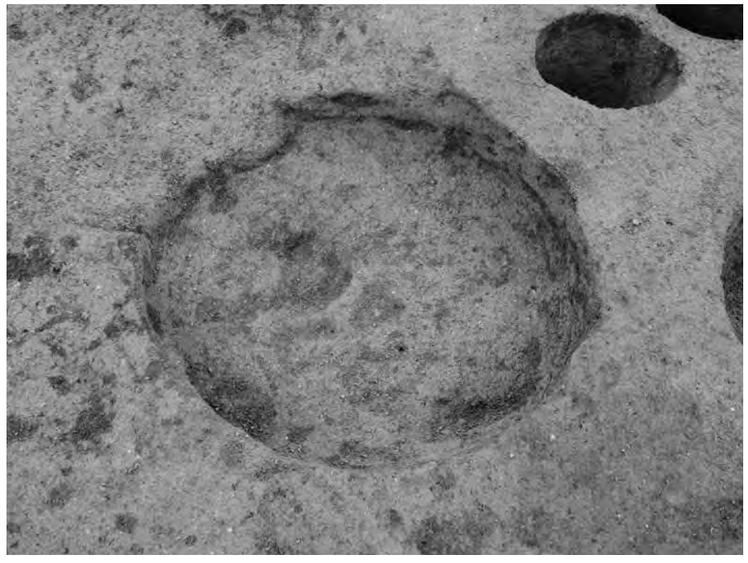
3　1号土壙墓土層（北東から）

図版28

1　1・2号土坑（西から）

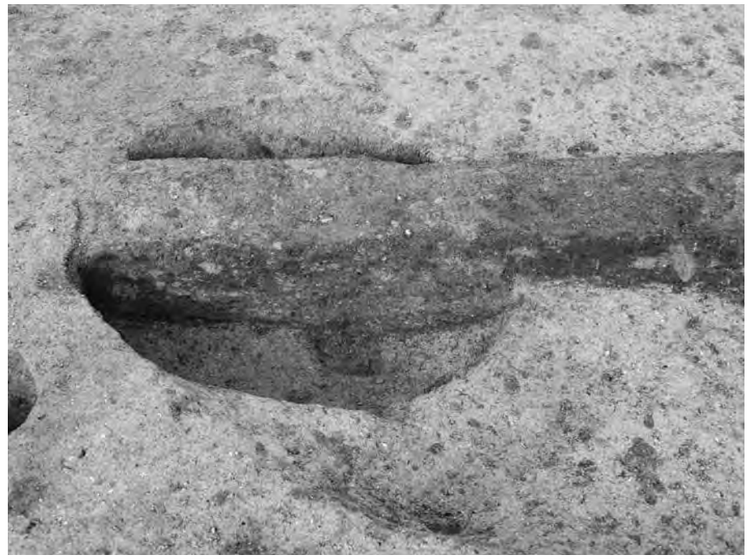


2　1・2号土坑土層（東から）



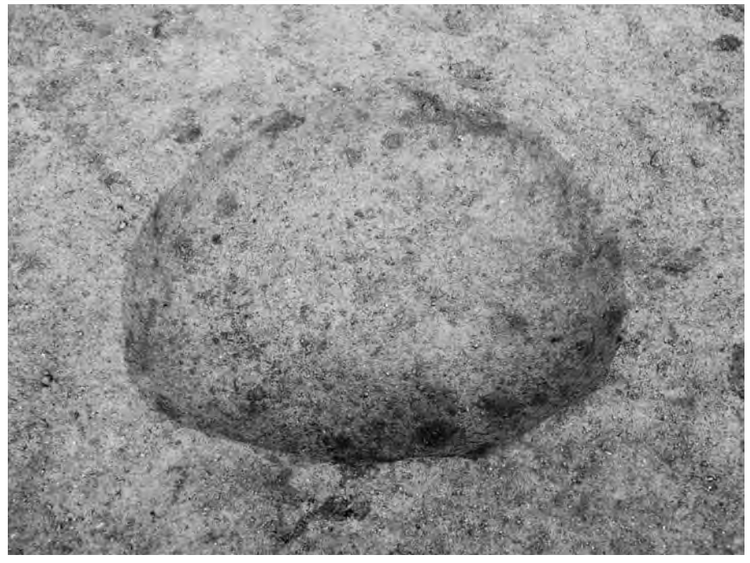
3　2号土坑（西から）

図版29



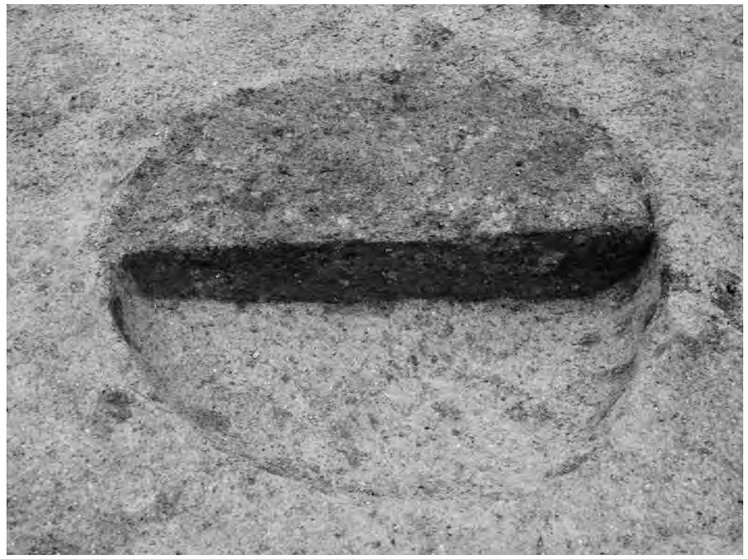
1　2号土坑土層（南東から）

2　3号土坑（南東から）



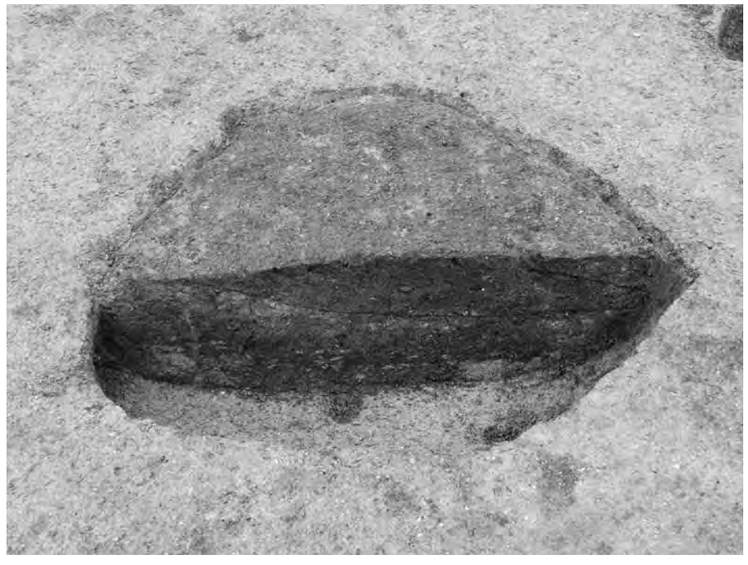
3　4号土坑（南東から）

図版30



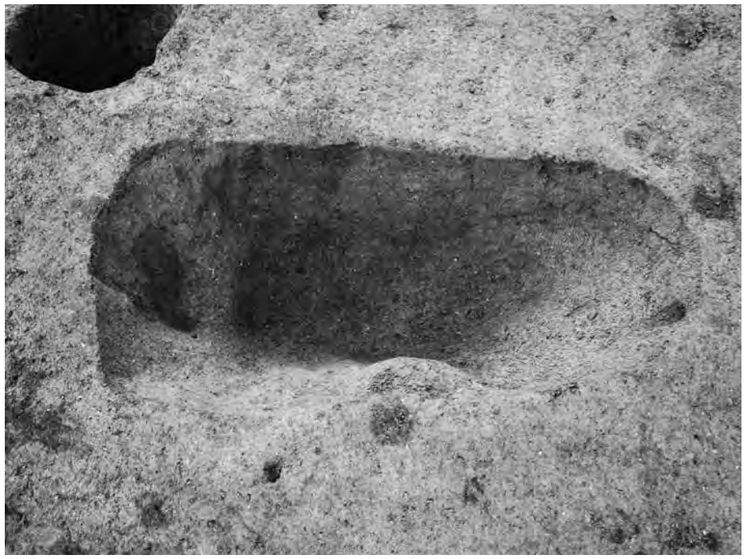
1　４号土坑土層（南から）

2　５号土坑（西から）

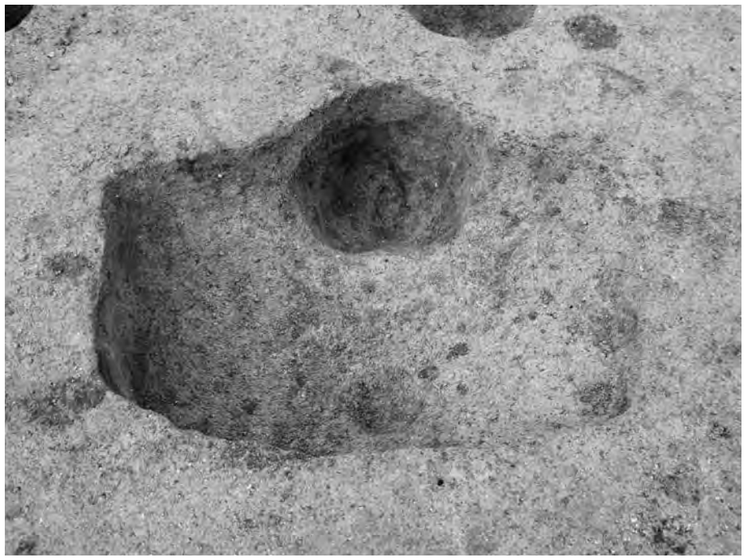


3　５号土坑土層（南から）

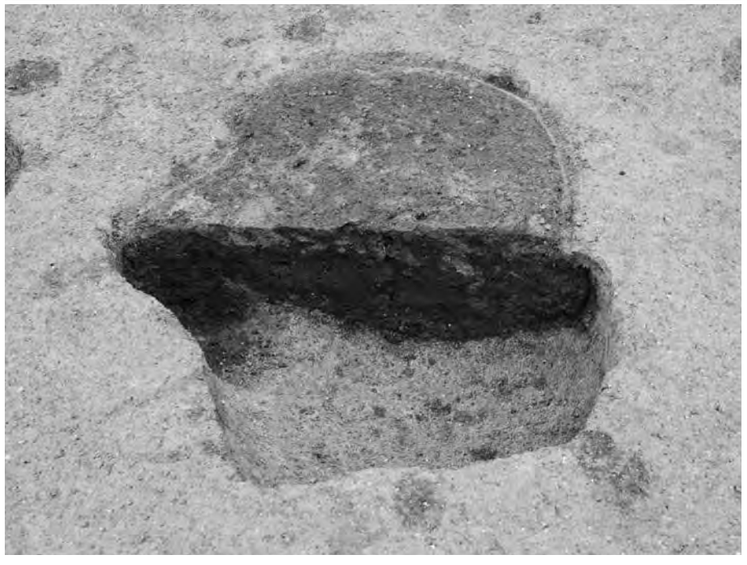
図版31



1　６号土坑（西から）



2　７号土坑（東から）

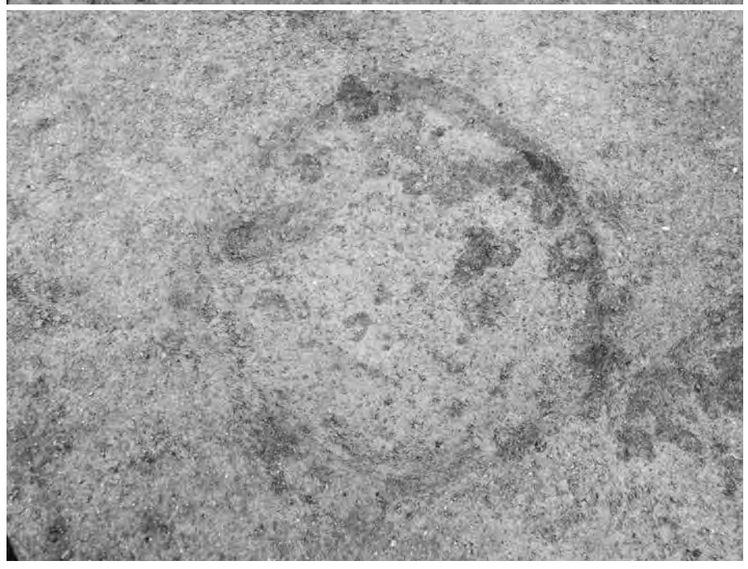


3　７号土坑土層（南から）

図版32

1　８～11号土坑検出状況（南から）

2　８～11号土坑（南西から）

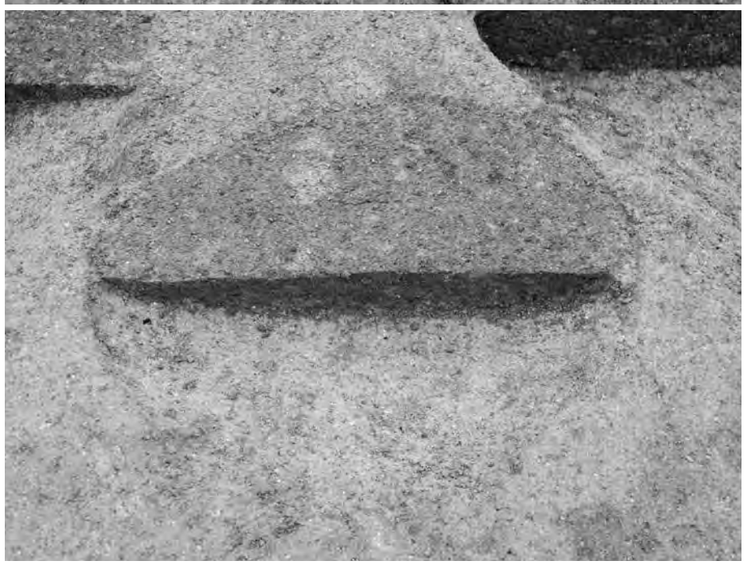


3　８号土坑（南西から）

図版33

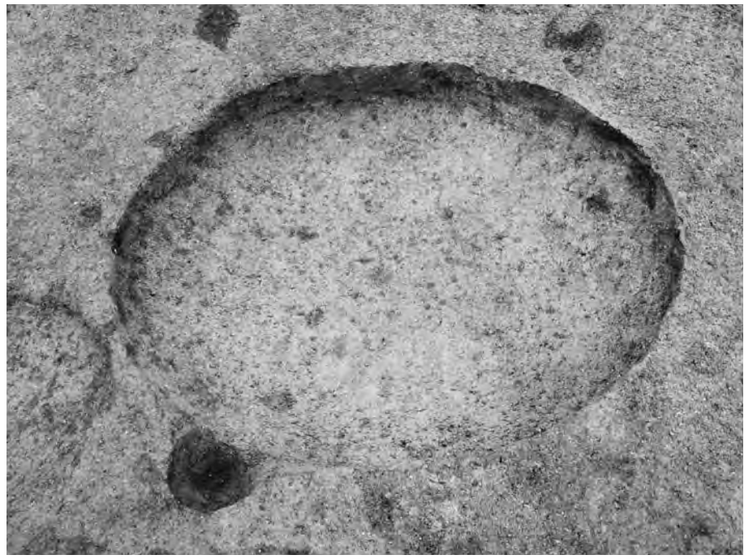
1　８号土坑土層（南から）

2　９号土坑（南西から）

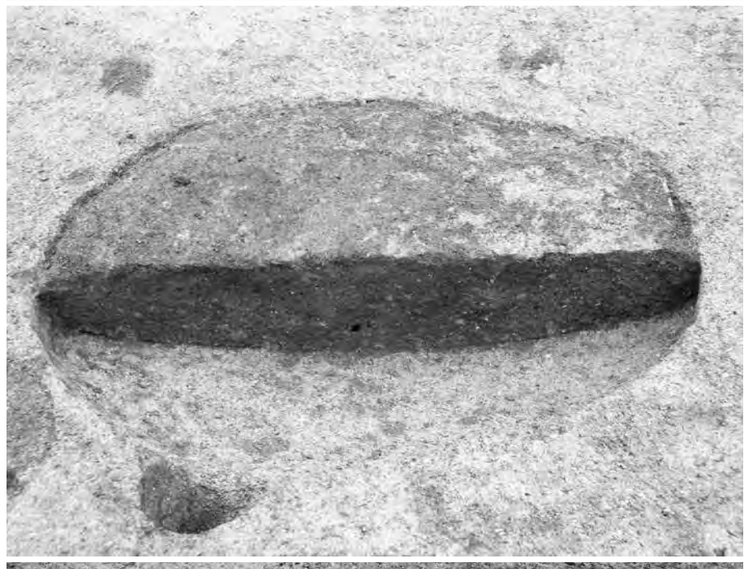


3　９号土坑土層（南から）

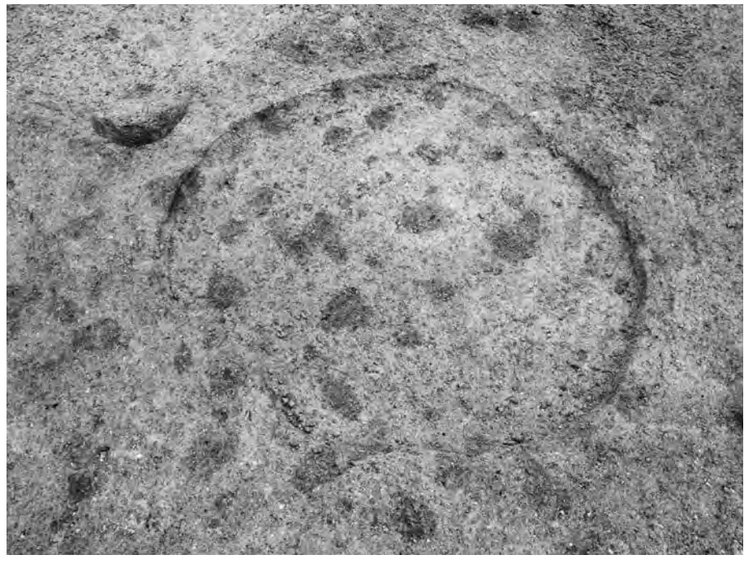
図版34



1　10号土坑（南から）



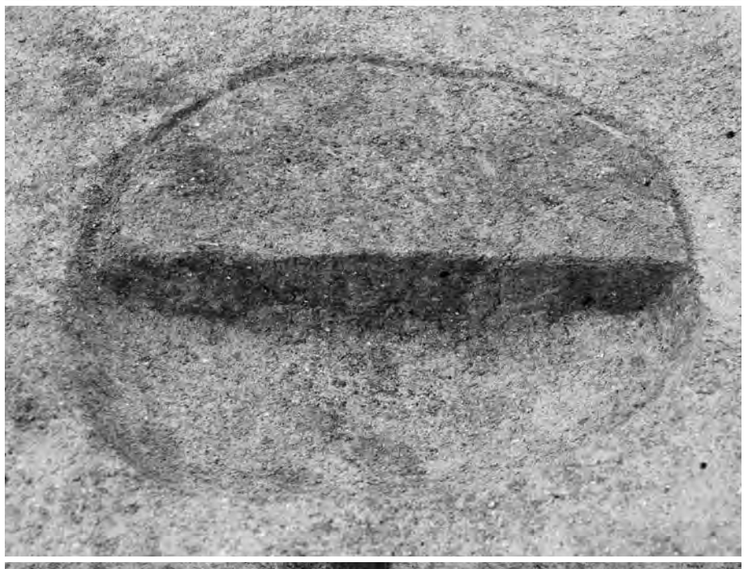
2　10号土坑土層（南から）



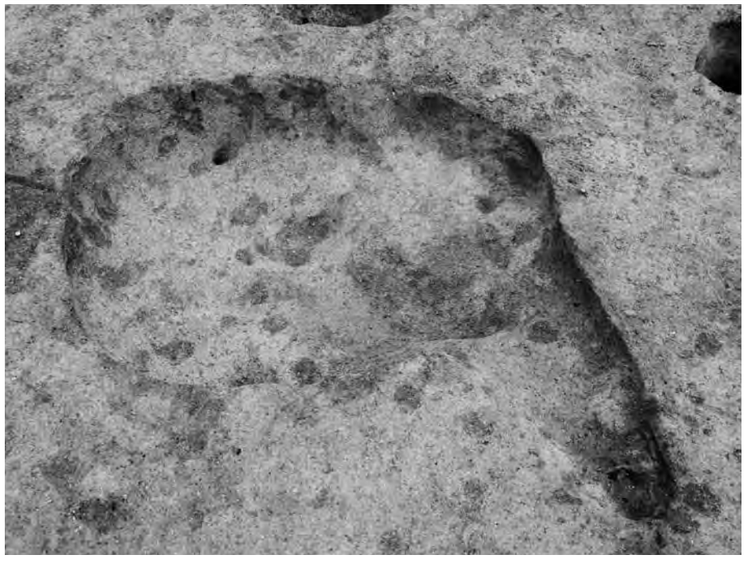
3　11号土坑（南西から）

図版35

1　11号土坑土層（南から）

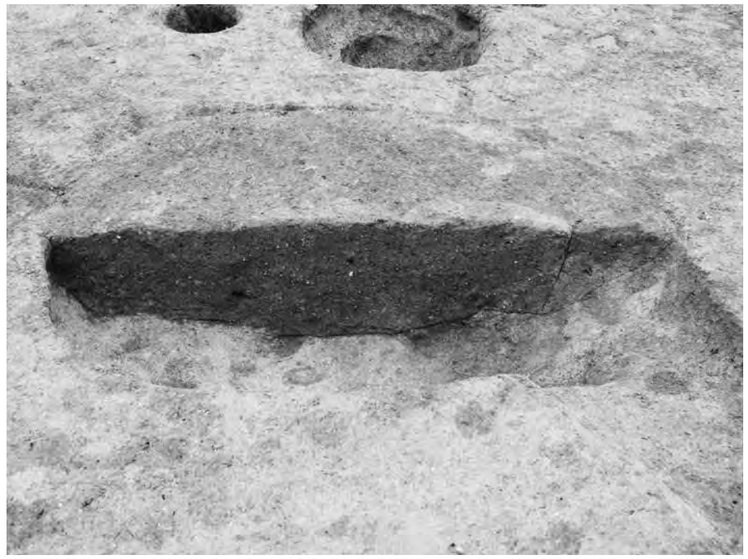


2　12号土坑土層（南から）



3　13号土坑（南から）

図版36



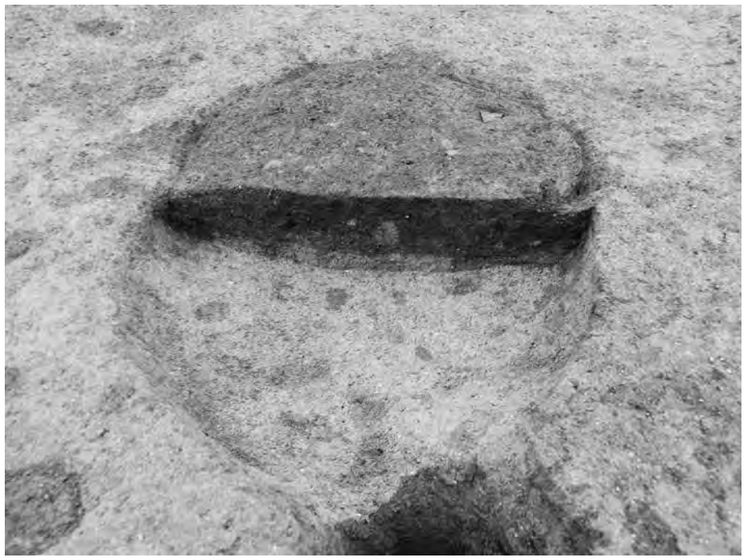
1　13号土坑土層（南から）

2　14号土坑（南から）

3　14号土坑土層（南から）

図版37

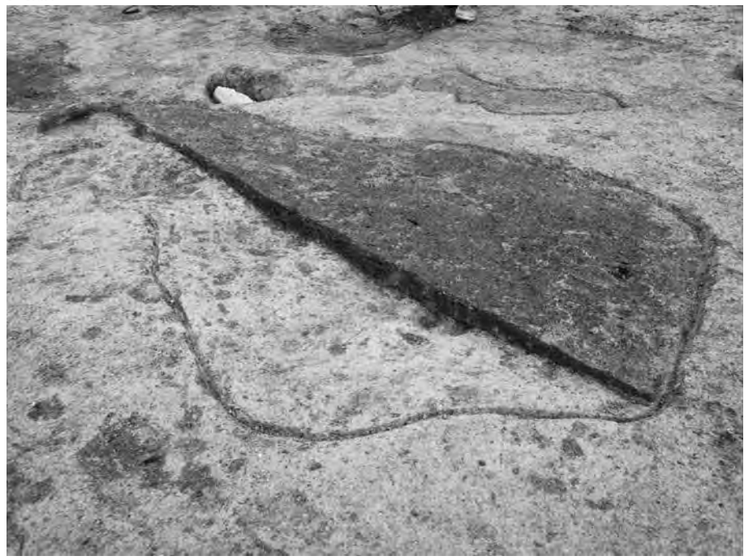
1　15号土坑（東から）



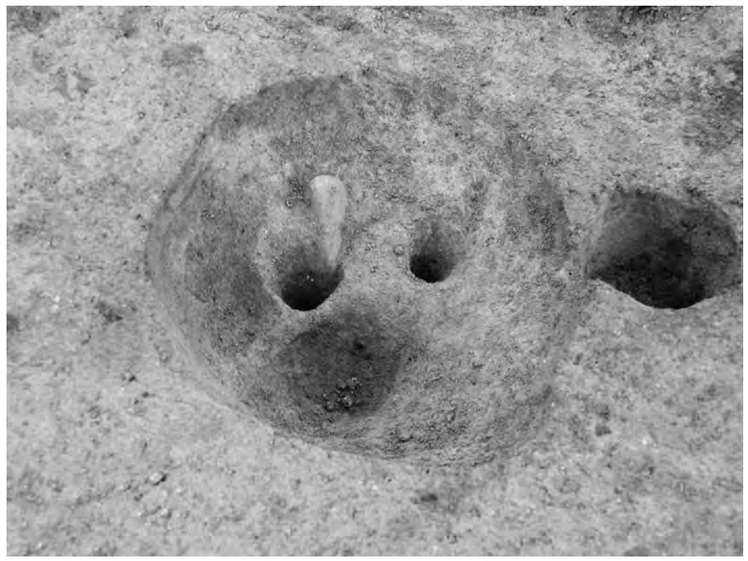
2　15号土坑土層（南から）

3　16号土坑（西から）

図版38



1　16号土坑土層（南西から）

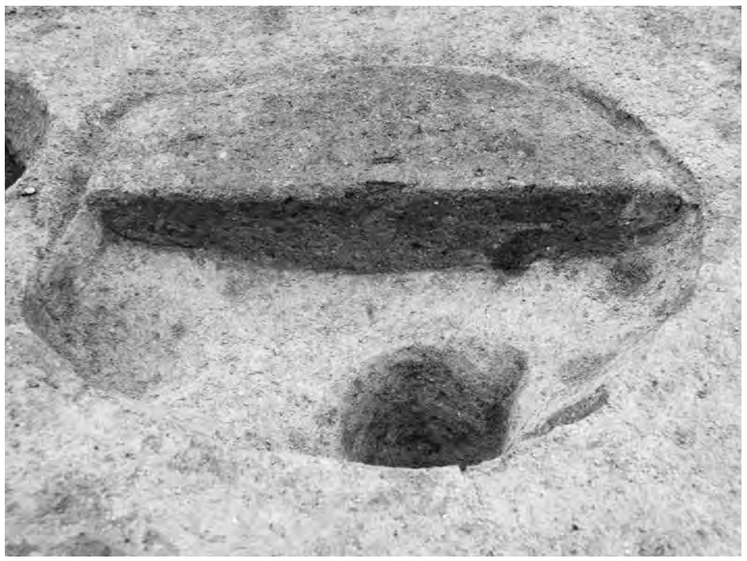


2　17号土坑（北東から）

3　17号土坑土層（南から）

図版39

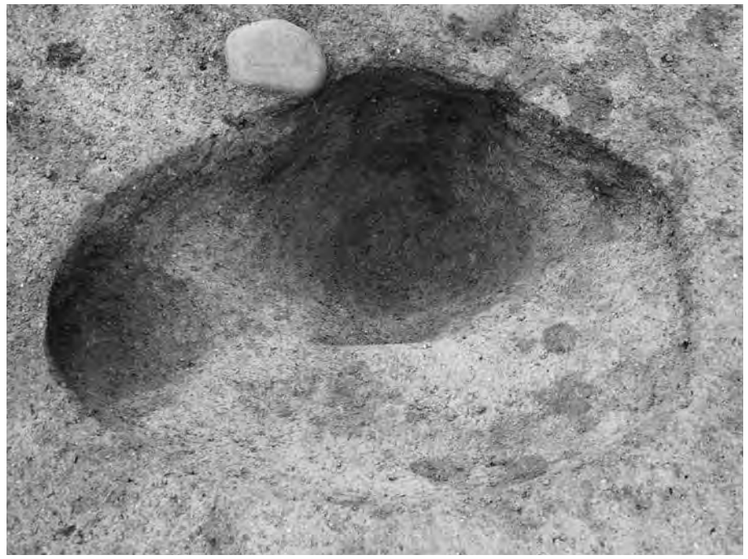
1　18号土坑（北から）



2　18号土坑土層（南から）

3　19号土坑（北西から）

図版40



1　20号土坑（北から）

2　20号土坑土層（南から）

3　21・22号土坑（南西から）

図版41

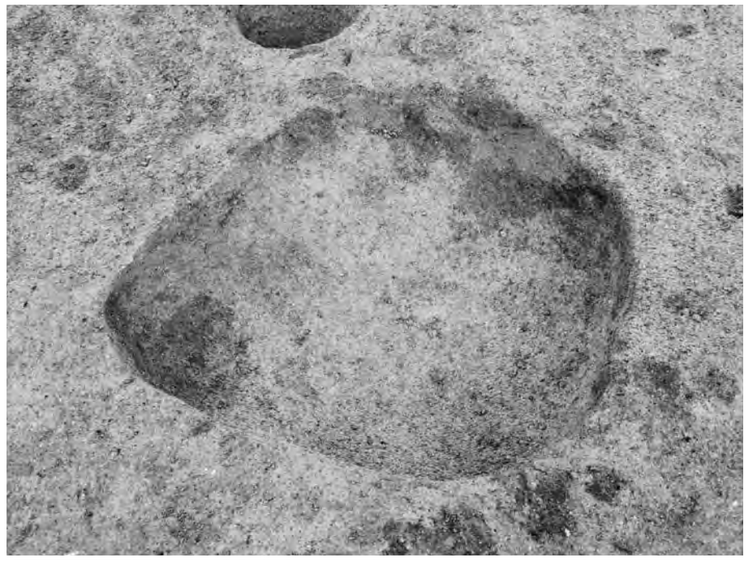
1　21号土坑土層（南西から）

2　22号土坑土層（南東から）

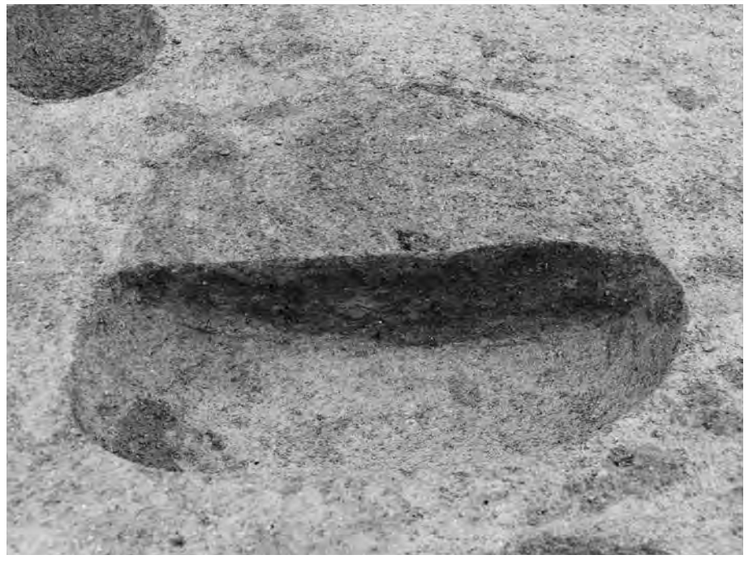
3　23号土坑（北から）

図版42

1　23号土坑土層（南から）



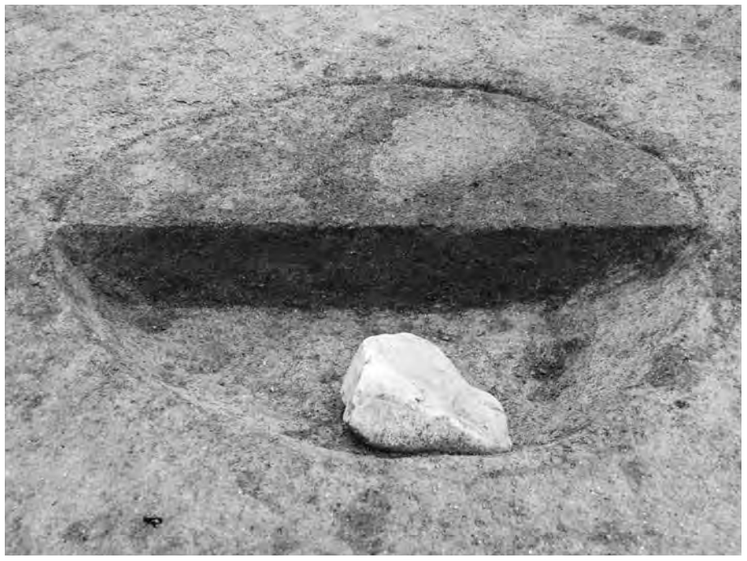
2　24号土坑（南から）



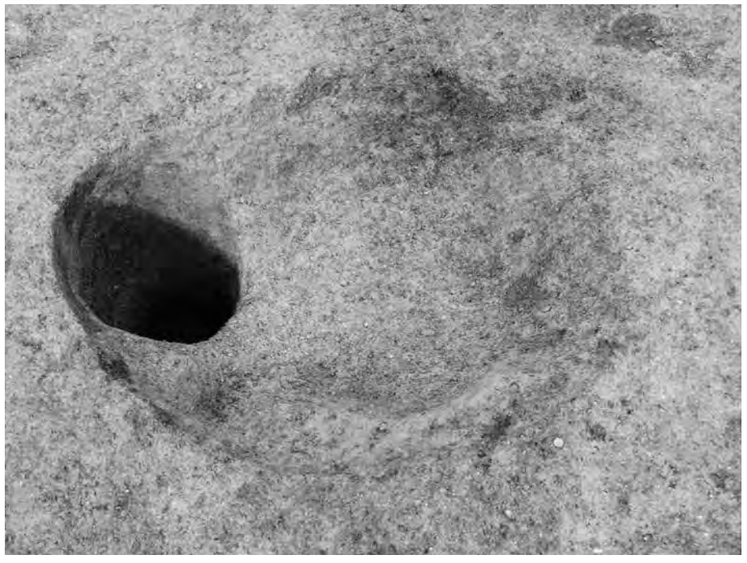
3　24号土坑土層（南から）

図版43

1　25号土坑（南から）

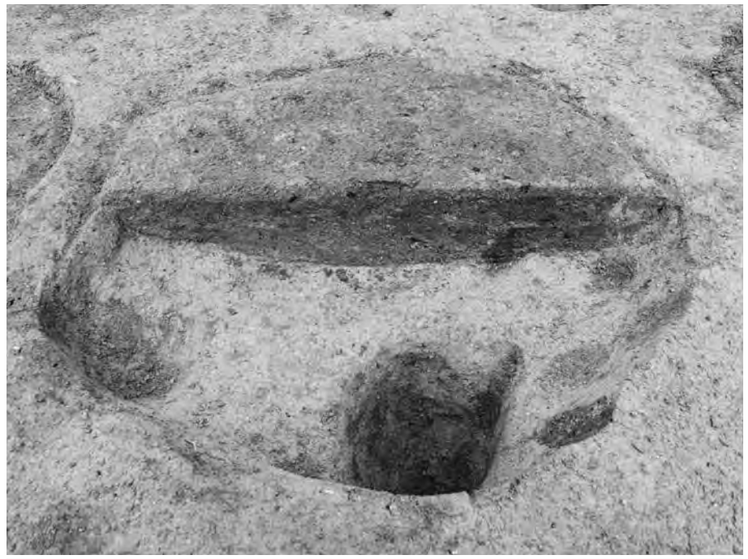


2　25号土坑土層（南西から）



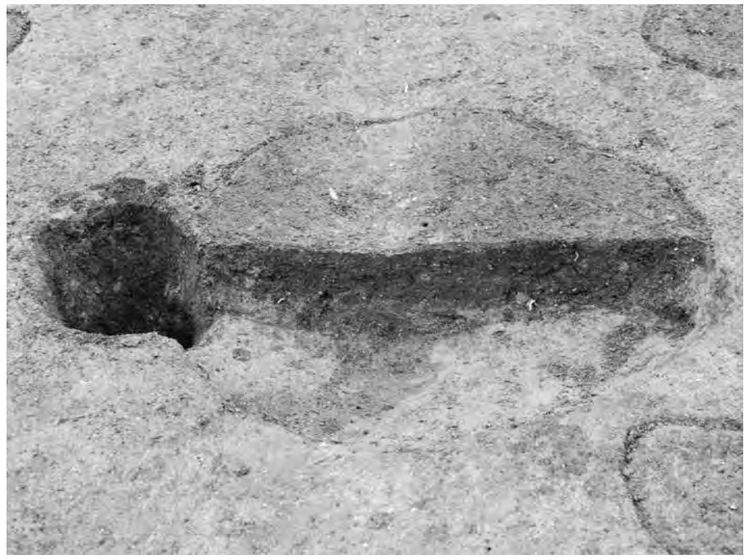
3　29号土坑（南から）

図版44



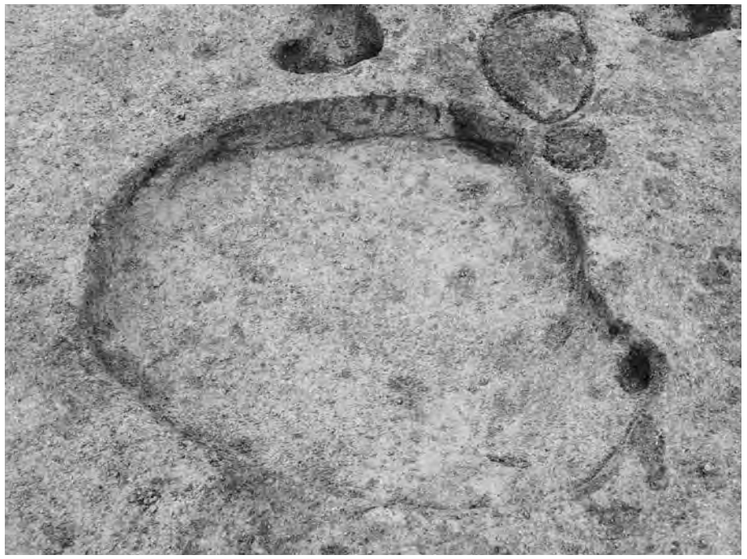
1　29号土坑土層（南西から）

2　30号土坑（西から）

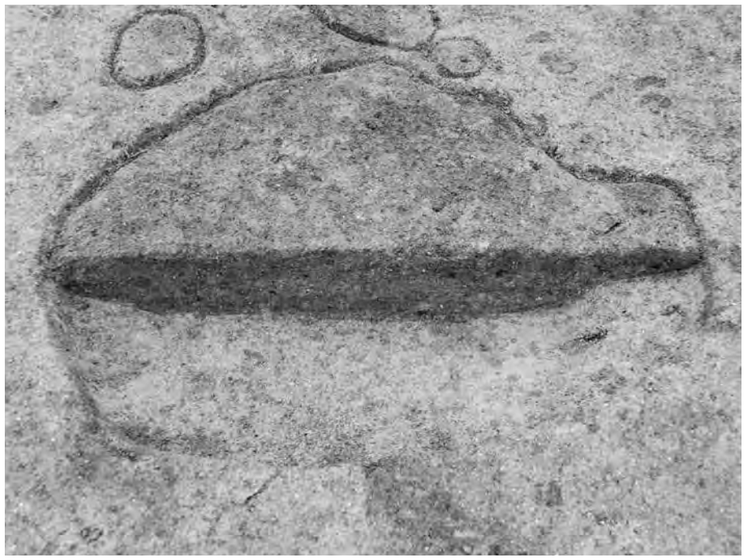


3　30号土坑土層（西から）

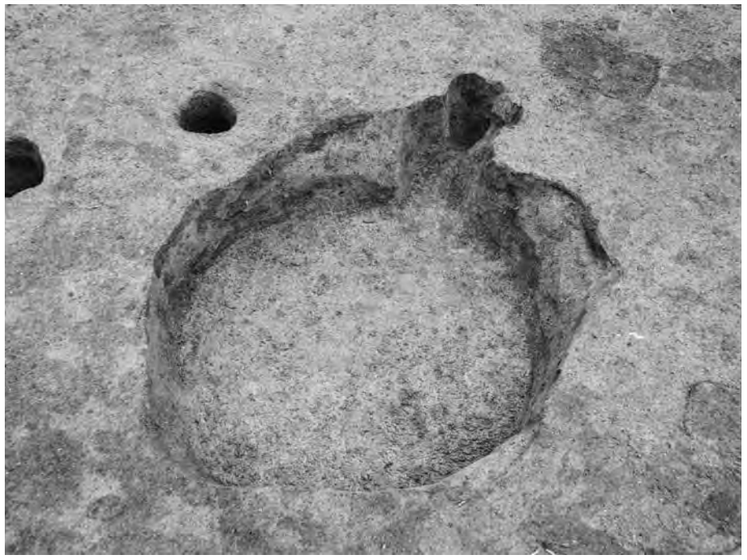
図版45



1　31号土坑（南から）

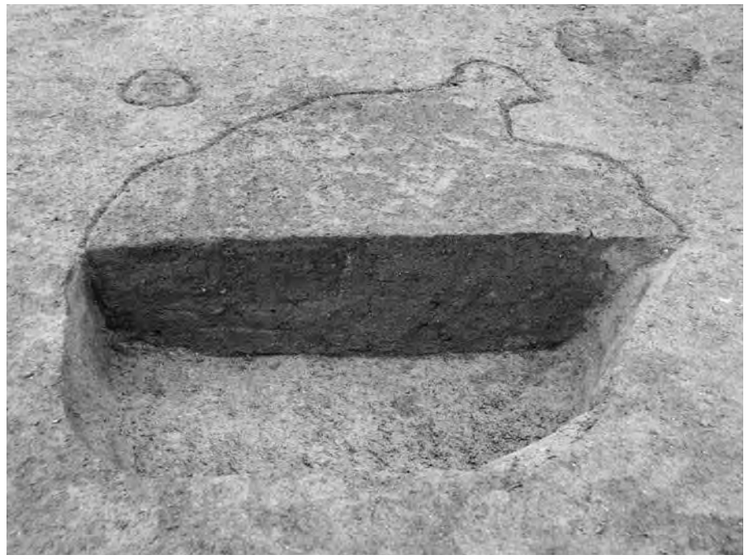


2　31号土坑土層（南西から）



3　32号土坑（南から）

図版46

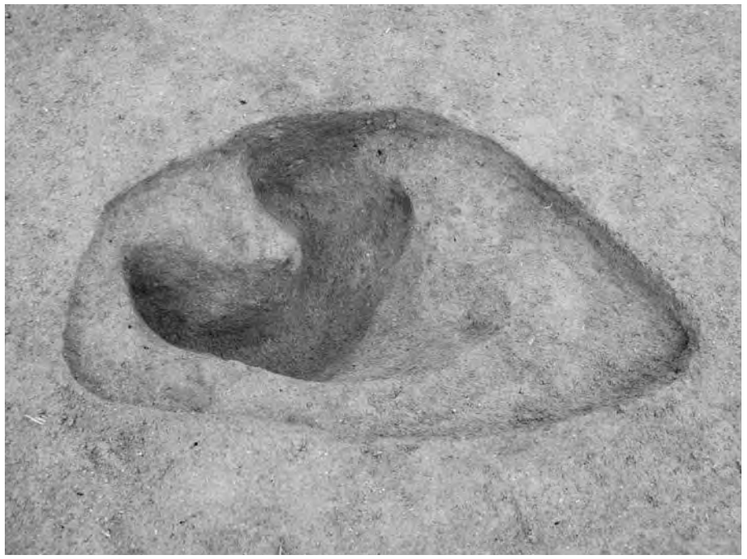


1　32号土坑土層（南西から）

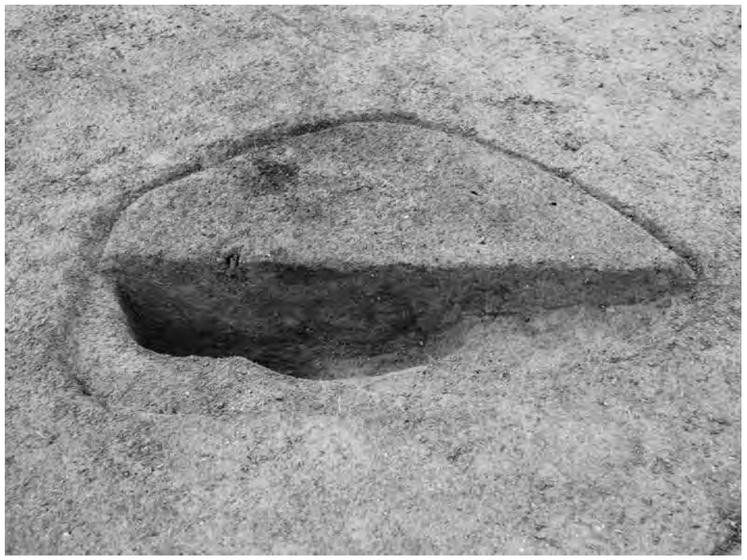
2　34号土坑（南西から）

3　34号土坑土層（南西から）

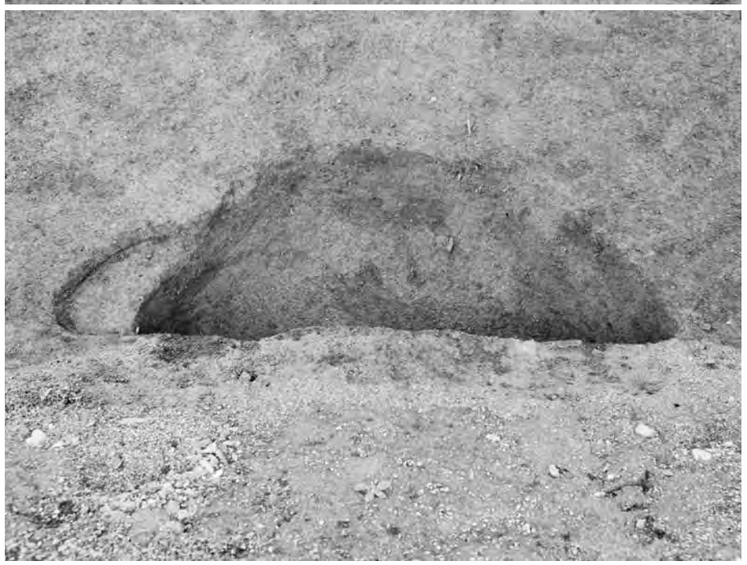
図版47



1　35号土坑（南西から）

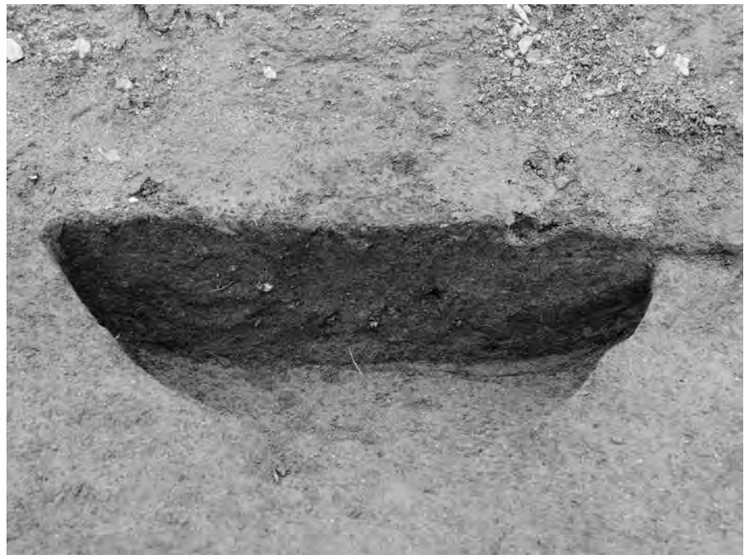


2　35号土坑土層（南西から）

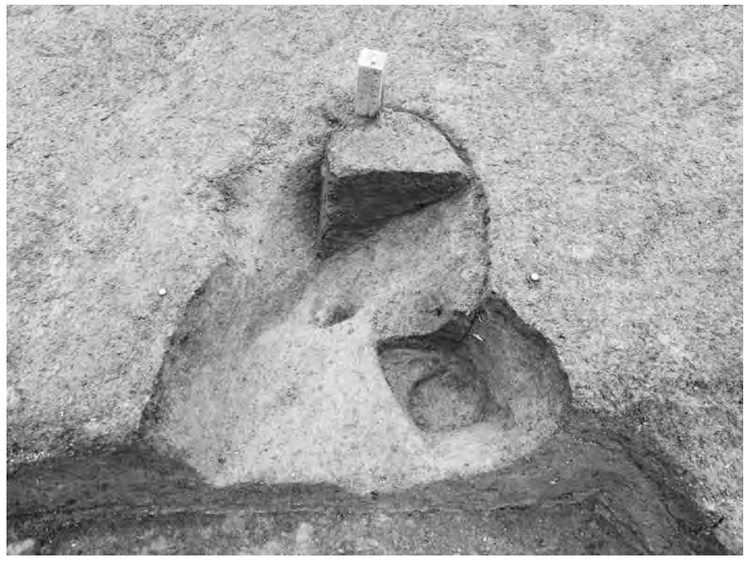


3　36号土坑（南西から）

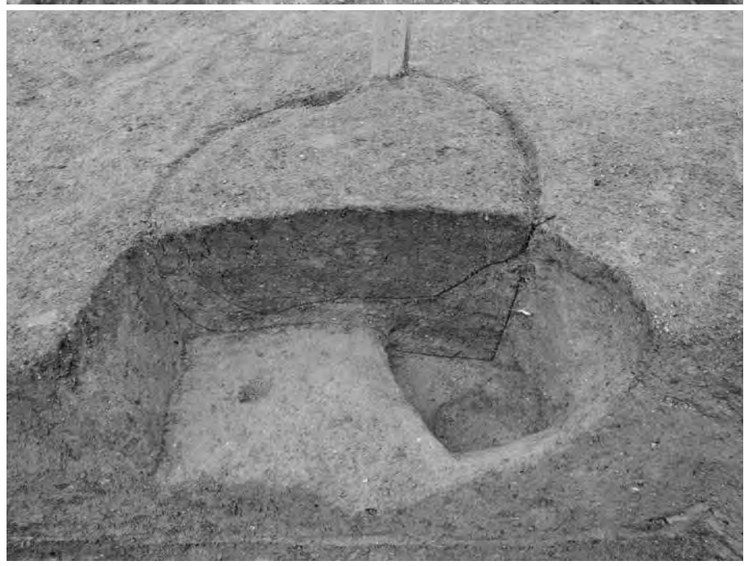
図版48



1　36号土坑土層（北東から）

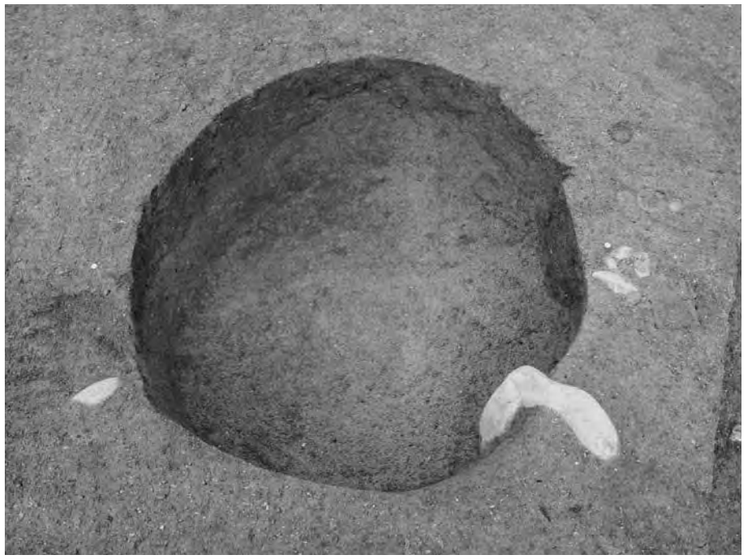


2　37号土坑（南西から）

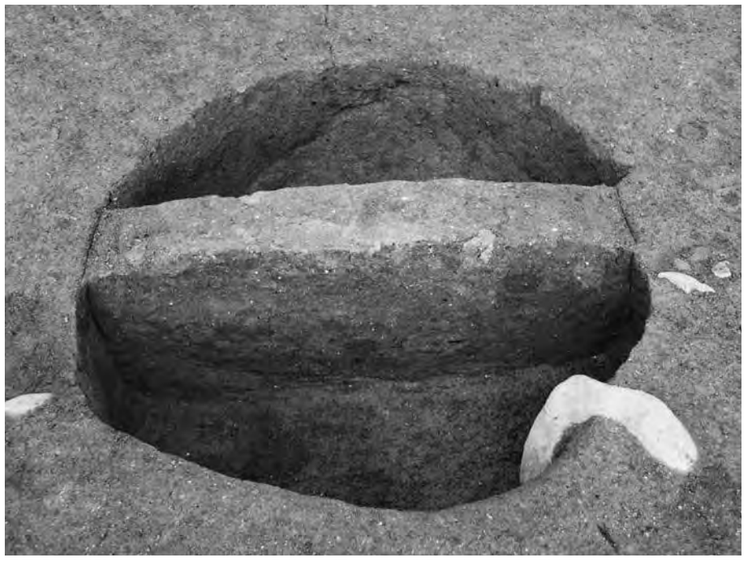


3　37号土坑土層（南西から）

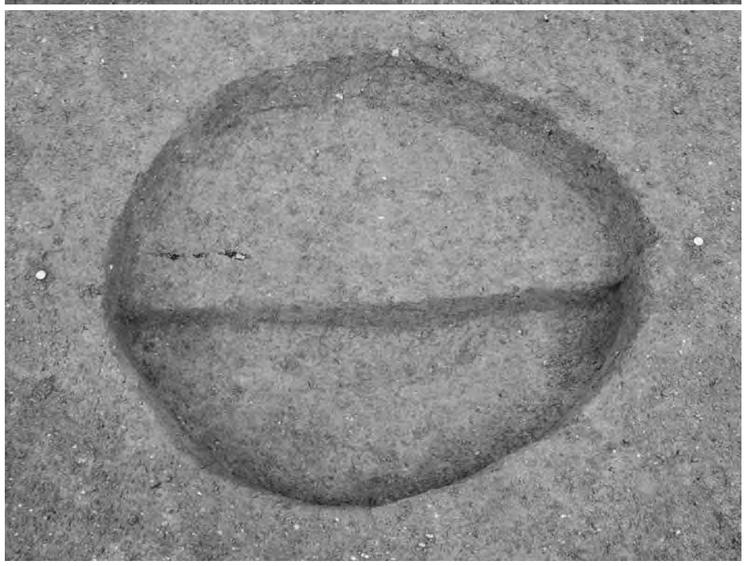
図版49



1　38号土坑（南西から）

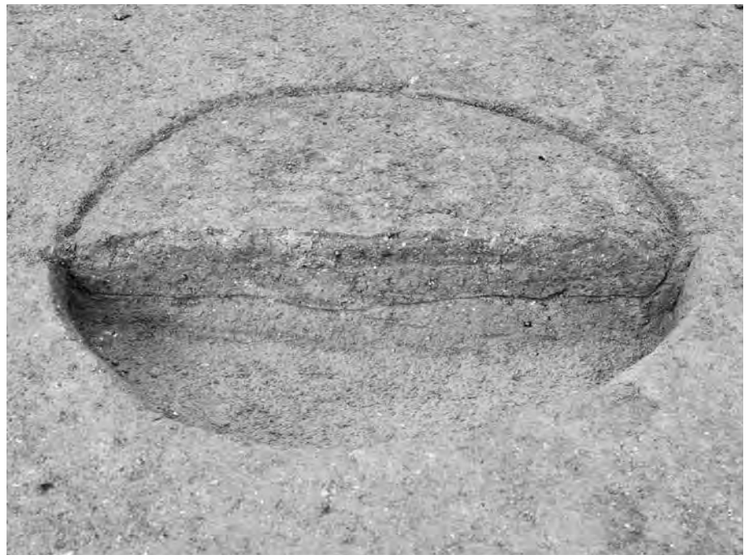


2　38号土坑土層（南西から）

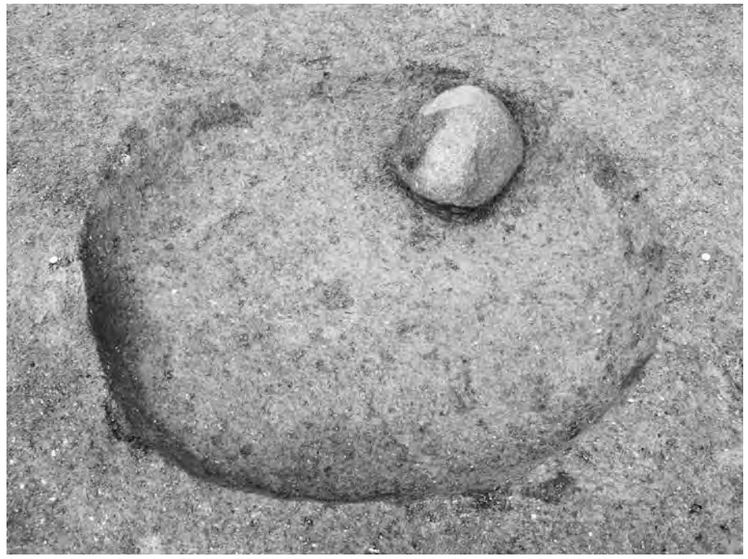


3　39号土坑（南西から）

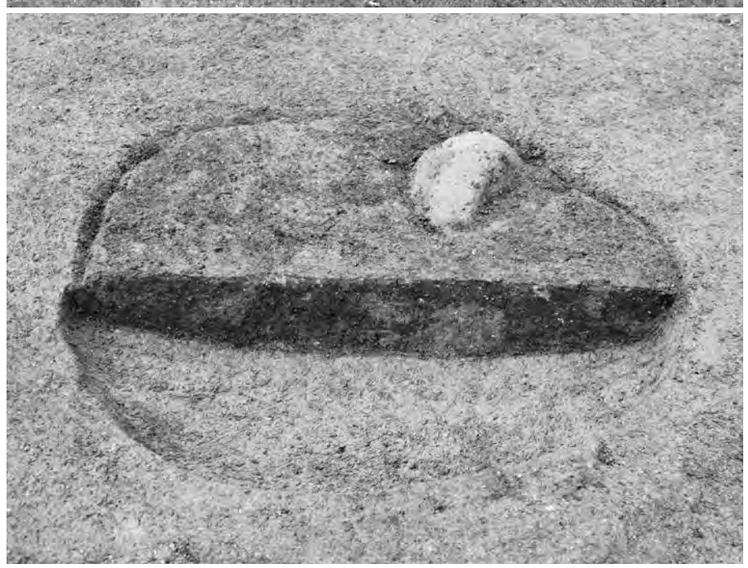
図版50



1　39号土坑土層（南西から）



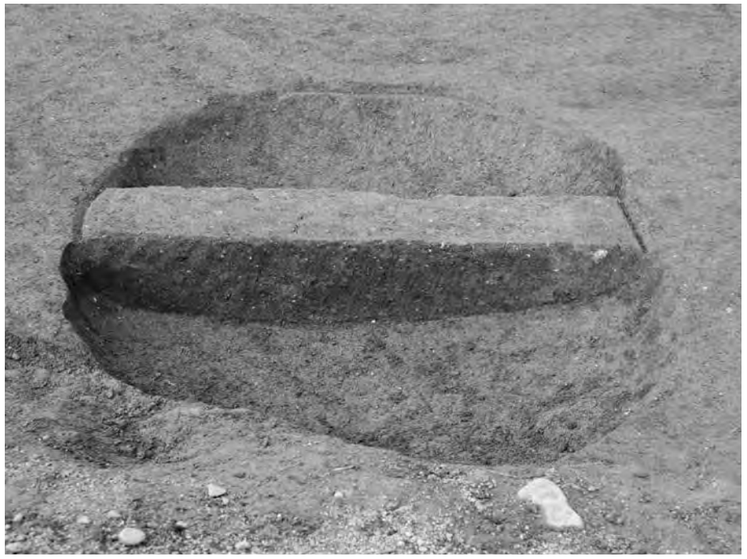
2　40号土坑（南西から）



3　40号土坑土層（南西から）

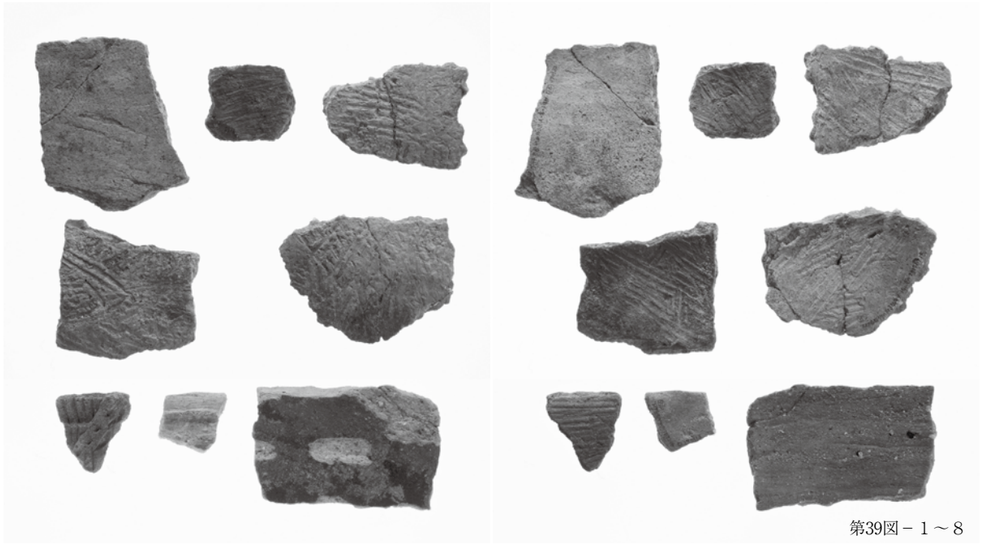
図版51

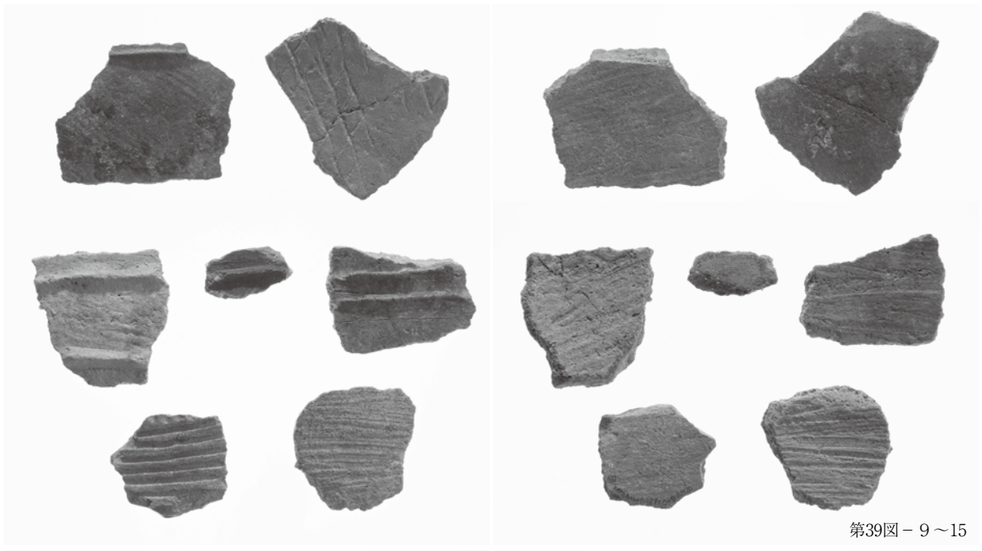
1　41号土坑（南から）

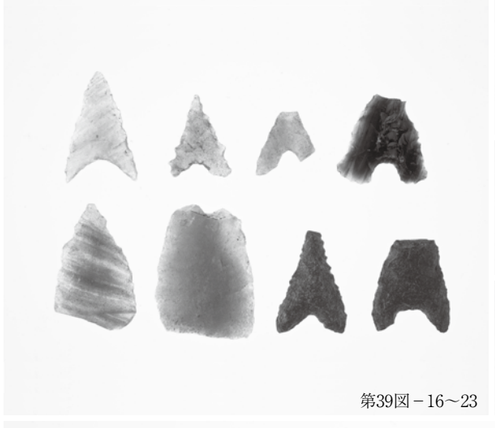


2　41号土坑土層（東から）

3　遺構掘削作業状況（南から）


第39図－１～８


第39図－９～15


第39図－16～23

第41図－４

第41図－１

第41図－２

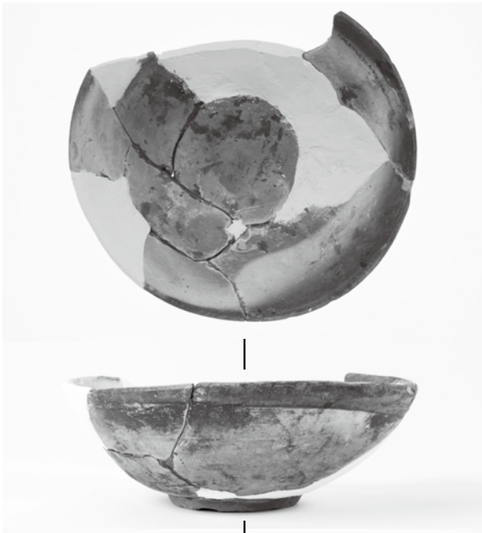
第41図－３

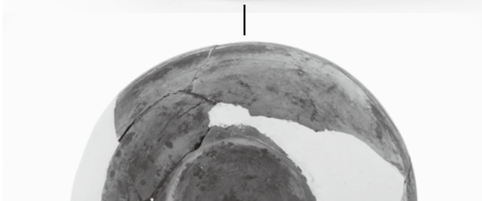
出土遺物５

第41図－５

第41図－６

第47図－４


第47図－20


第47図－24

第47図－33

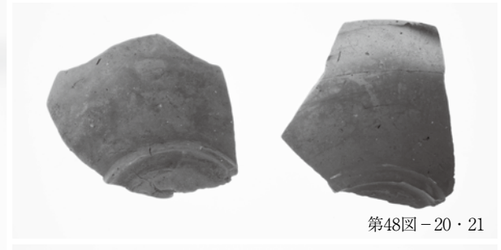
第48図－１

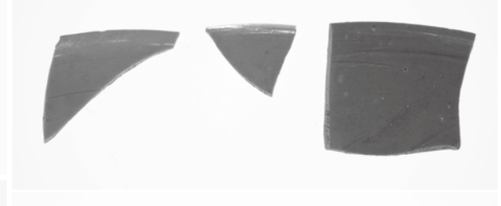
第48図－２

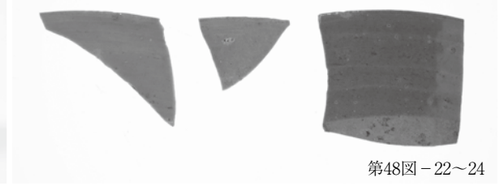
第48図－３

第48図－４

第48図－６


第48図－７


第48図－20・21


第48図－22～24

第48図－25

出土遺物６

図版54

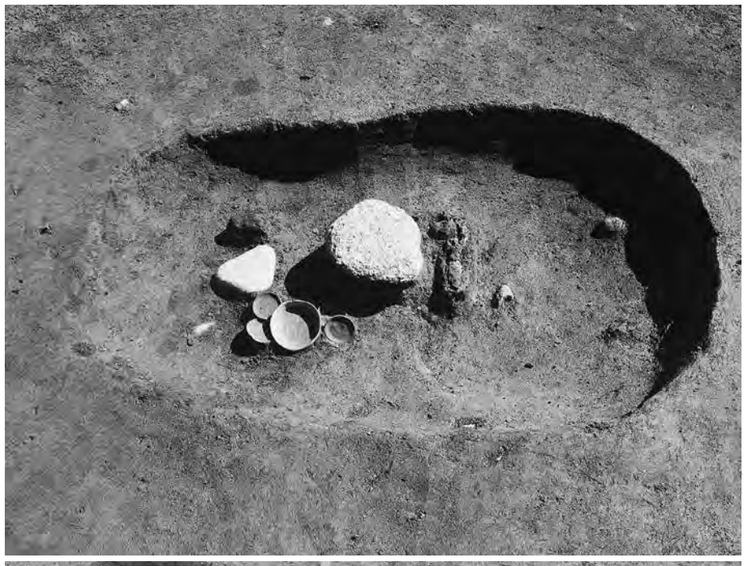
1　Ⅳ区全景（南西から）

2　Ⅳ区全景（南西から）

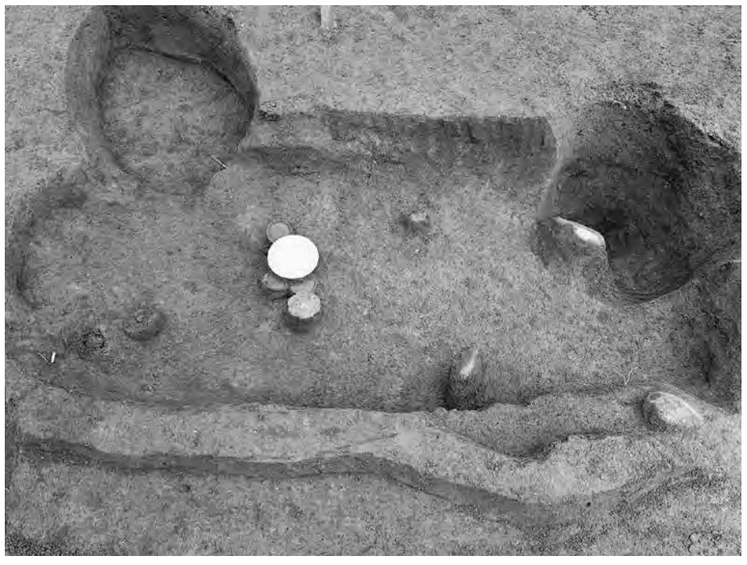
3　Ⅳ区グリッド土層（西から）

図版55

1　Ⅳ区縄文土器出土状況
（西から）



2　Ⅳ区2号土坑（西から）



3　Ⅳ区4号土坑（南から）

第53図－１～６

第53図－７～10

第53図－11～13

第53・54図－14～23

出土遺物７

第54図－26～37

第55図－41

第55図－42

第55図－43～46

第55図－47～51

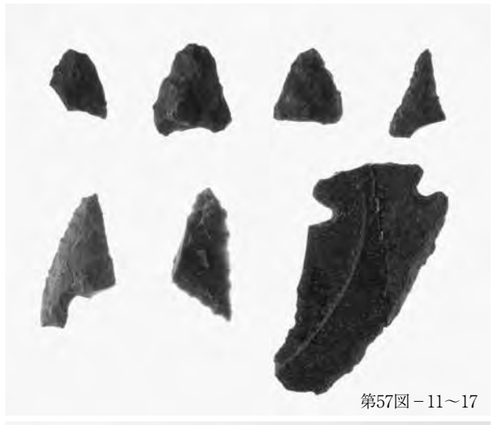
出土遺物８

図版58

第56図－53～59

第56図－68～71

第57図－１～10



第57図－11～17

第59図－１

第59図－４

第59図－７

第59図－８

第59図－５

出土遺物９

図版59

第59図－９

第59図－10

第59図－11

第59図－12

第59図－13

第59図－14

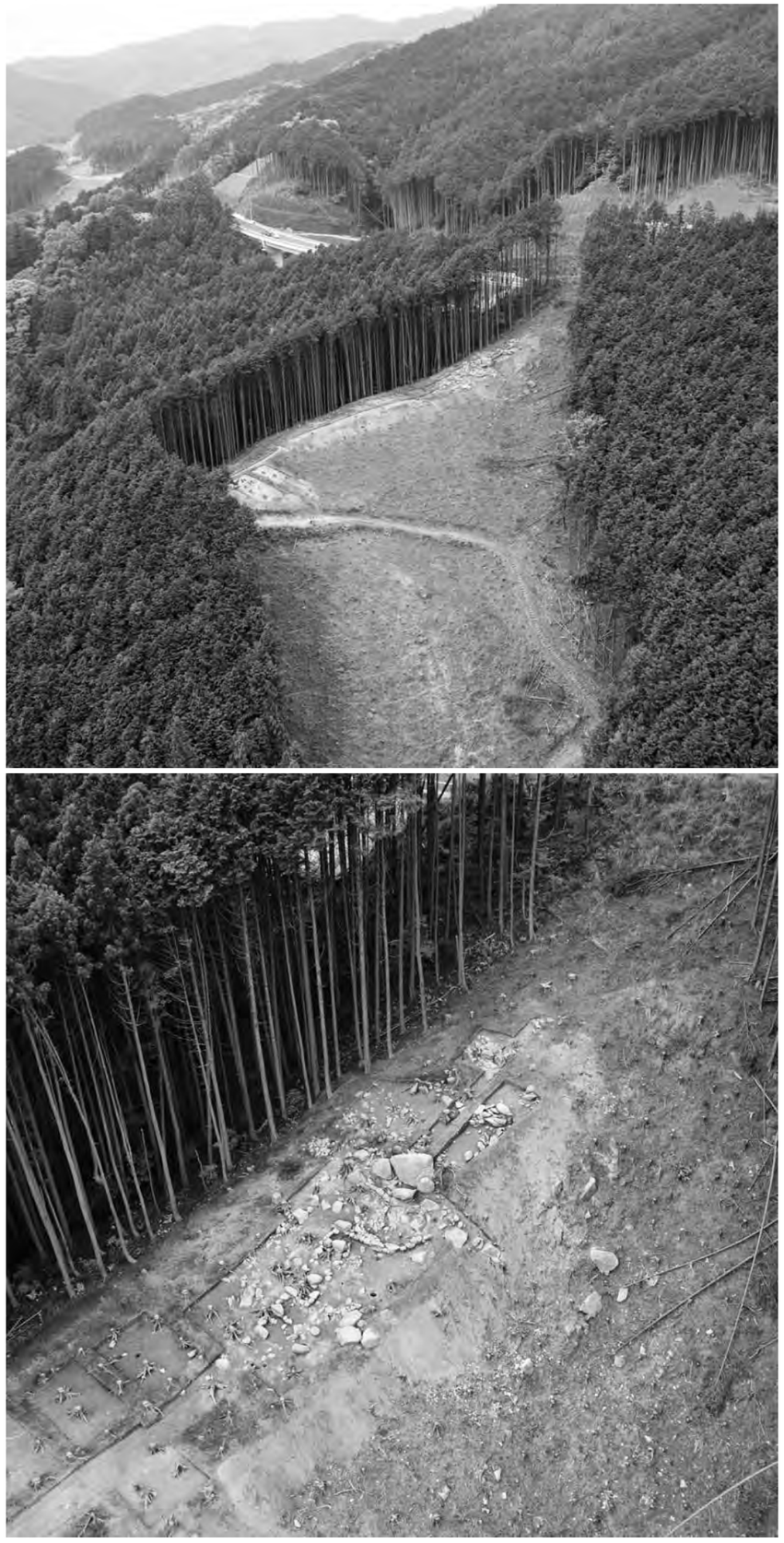
第59図－15

第59図－18

第59図－19

第60図－13

出土遺物 10



1　下伊良原宮久保遺跡
遠景（北西上空から）

2　近景（北西上空から）

1　近景（上空から）

2　立石周辺
（上空から）

図版62

1　立石現況（東から）

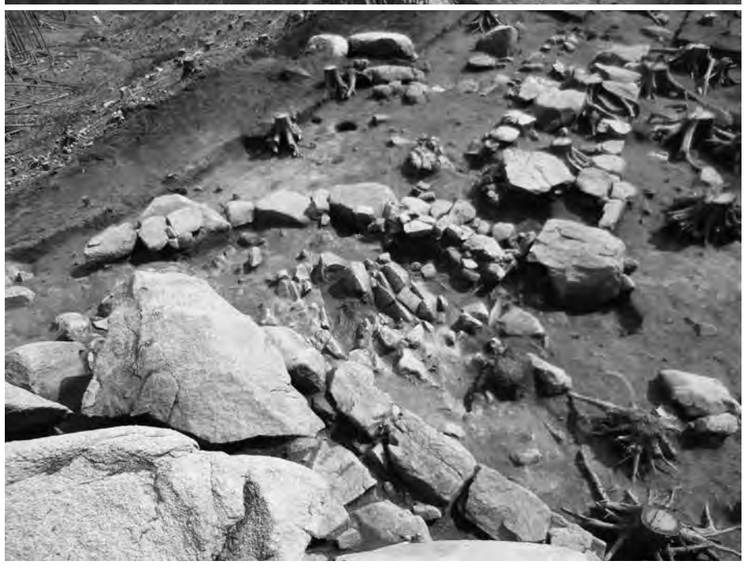
2　立石現況（南から）

3　立石現況（西から）

図版63

1　立石現況（北から）

2　立石基壇（北東から）



3　立石基壇（西から）

図版64

1　立石基壇内部（東から）

2　立石前面土師器出土状況
（南東から）

3　立石発掘後（東から）

図版65

1　調査後全景（東から）

2　調査後全景（西から）

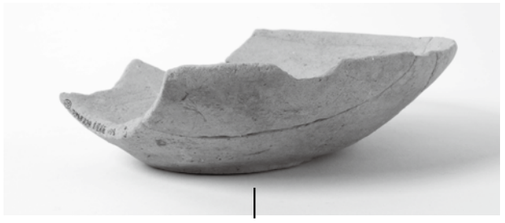
3　ビール瓶出土状況（東から）

第63図－1

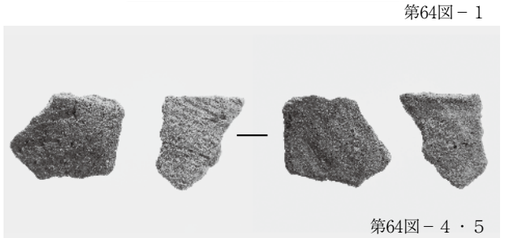
第63図－2

第63図－3

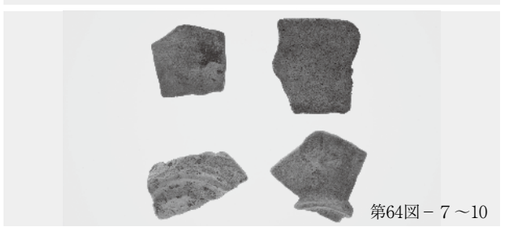
第63図－4



第64図－1

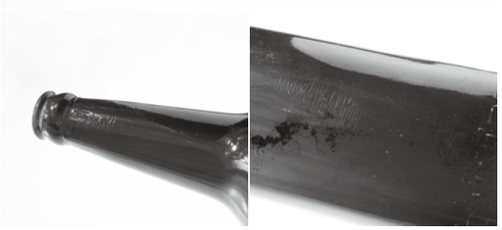


第64図－4・5



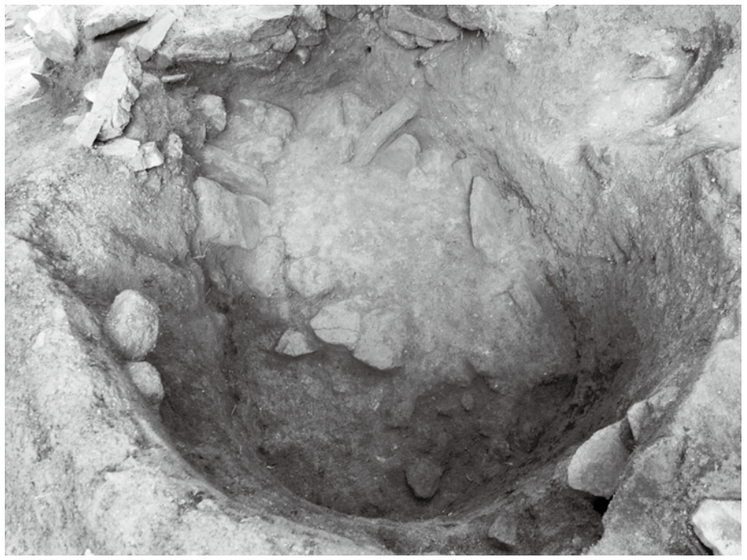
第64図－7～10

第64図－11



出土遺物11

1　炭窯全景（北から）



2　炭窯内天井崩落状況
（北から）

3　焚口と前面の整地（南東から）

図版68

1　焚口（東から）

2　焚口と焼成部（北から）

3　焼成部と煙道（南西から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	いらはら　なな
書名	伊良原　Ⅶ
副書名	
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第261集
編著者名	飛野博文　吉村靖徳　城門義廣　小川泰樹（編集）
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒836－0106　福岡県小郡市三沢5208－3　　TEL 0942－75－9575
発刊年月日	平成30（2018）年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
下伊良原竹の内遺跡（しもいらはらたけのうち）	福岡県京都郡みやこ町（ふくおかけんみやこぐんみやこまち）犀川下伊良原72、73、77、78、79、80、105（さいがわしもいらはら）	40625		33° 34′ 8″	130° 56′ 59″	2012.9.4 ～ 2017.3.17	10,800㎡	県営伊良原ダム建設
下伊良原宮久保遺跡（しもいらはらみやくぼ）	福岡県京都郡みやこ町（ふくおかけんみやこぐんみやこまち）犀川下伊良原1560他（さいがわしもいらはらほか）	40625		33° 34′ 23″	130° 56′ 47″	2016.1.22 ～ 2016.6.17	850㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下伊良原竹の内遺跡	集落	縄文時代 中世 近現代	掘立柱建物跡３、土壙墓７、土坑多数、遺物包含層、炭窯１	縄文土器、石器、土師器、瓦器、陶磁器、金属製品、石製品、土製品	
下伊良原宮久保遺跡	祭祀 生産	中世～近現代	祭祀遺構１、炭窯１	縄文土器、土師器、陶磁器、銅銭、鉄銭、石製品、ガラス瓶	

要約

下伊良原竹の内遺跡：縄文時代早期以来の集石遺構、土坑を検出し、土坑の１基からは中期春日式深鉢の完形品が出土している。遺跡全体に縄文時代遺物包含層が存在し、早期・前期を中心に晩期までの遺物が出土している。
中世の掘立柱建物跡、土壙墓、多数の円形あるいは楕円形の土坑等を検出した。また、昭和期の炭窯を調査した。

下伊良原宮久保遺跡：中世から近現代までの、露出する自然石を祀った祭祀遺跡。また、昭和期の炭窯を調査した。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 29	登録番号 2

伊良原ダム関係埋蔵文化財調査報告　－７－

伊良原　Ⅶ

福岡県文化財調査報告書　第261集
平成30年３月31日

発行　九州歴史資料館
〒838－0106　福岡県小郡市三沢5208－３

印刷　株式会社西日本新聞印刷
〒812－0041　福岡市博多区吉塚８－２－15